

IBM Maximo Asset Management

バージョン 7 リリース 6.1

インストール・ガイド (IBM WebSphere)



注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、171 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Maximo Asset Management のバージョン 7 リリース 6 モディフィケーション 1 フィックスパック 0、および、新しい版で明記されていない限り、これ以降のすべてのリリースとモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Maximo Asset Management
Version 7 Release 6.1
Installation Guide
(IBM WebSphere)

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 2007, 2018.

目次

第 1 章 インストールの準備	1
ソフトウェアのインストール・イメージ	1
インストール・プログラムの概要	1
構成プログラムの概要	1
第 2 章 デプロイメント時のミドルウェアの自動構成	3
Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成	4
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用した Db2 v11.1 のインストール	5
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 Installation Manager を使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 のインストール	6
Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備	8
Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行	8
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用した Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成	10
NOTF JMS キューの作成	10
NOTFERR JMS キューの作成	11
第 3 章 デプロイメント時の既存のミドルウェアの自動構成	13
Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成	14
Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備	14
Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行	15
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用した Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成	16
NOTF JMS キューの作成	17
NOTFERR JMS キューの作成	18
第 4 章 デプロイメント時の既存のミドルウェアの手動構成	19
手動ミドルウェア構成を使用した Maximo Asset Management のインストール	20
データベースの手動構成	21
手動による Db2 v11.1 の構成	21

手動による Microsoft SQL Server 2012 の構成	23
手動によるディレクトリー・サーバーの構成	26
手動による IBM Security Directory Server の構成	27
手動による Microsoft Active Directory バージョン 2012 の構成	31
手動による J2EE サーバーの構成	34
手動による WebSphere Application Server Network Deployment の構成	34
Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行	63
手動構成されたミドルウェアによる Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成	65
NOTF JMS キューの作成	66
NOTFERR JMS キューの作成	67
第 5 章 UpdateDB Lite コマンドを使用したアプリケーション・データベースの更新	69
UpdateDB Lite を使用したデータベースの更新	69
第 6 章 クラスタ環境でのデプロイ	71
Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成	73
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用した Db2 v11.1 のインストール	73
Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 Installation Manager を使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 のインストール	74
Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment の準備およびアプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルの構成	76
追加 WebSphere Application Server Network Deployment ノードでのクラスター・メンバーの構成	78
Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行	79
クラスタ環境での Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した Maximo Asset Management の構成	81
第 7 章 サイレント・インストール	83
インストール用のサイレント応答ファイルの作成	83
サイレント・インストール応答ファイルのサンプル	84

サイレント応答ファイル内のパスワード値の更新	85
Installation Manager ソフトウェアのサイレント・インストール	86
Maximo Asset Management および関連ミドルウェアのサイレント・インストール	86
Maximo Asset Management および関連するミドルウェアのサイレント・アンインストール	87
第 8 章 サイレント構成	89
ミドルウェア構成用のサイレント応答ファイルの作成	89
ミドルウェアのサイレント構成用の応答ファイルのサンプル	90
Maximo Asset Management のサイレント構成のための応答ファイルの作成	90
ミドルウェアのサイレント構成	91
Maximo Asset Management のサイレント構成	91
ミドルウェア構成のサイレント削除	92
製品構成のサイレント削除	93
第 9 章 HTTPOnly 属性の構成	95
第 10 章 インストール・プログラムおよび構成プログラムのログ情報	97
第 11 章 ポストインストール・タスク	99
ローカルでのヘルプのインストール	99
ヘルプのインストール	99
IBM Knowledge Center 構成	100
ヘルプ・コンポーネント	102
Maximo Asset Management 文書ライブラリー	103
初期データの構成	105
ユーザーとグループの同期化	108
構成後の Maximo Asset Management データベースへのサンプル・データの追加	109
第 12 章 EAR ファイルの管理	113
EAR ファイルのビルド	114
手動によるワーク・センター WAR ファイルのデプロイ	114
WebSphere Application Server Network Deployment からのアプリケーションの手動アンインストール	115
WebSphere Application Server Network Deployment への手動によるアプリケーションのインストール	115
第 13 章 コマンド・ラインによる構成	117
構成パラメーターの検証	118

入力プロパティ・ファイル	118
コマンド・ライン・インターフェースのパラメーター	120
コマンド・ライン構成プログラムのアクション	128
action updateDatabaseConfiguration	128
action validateDatabaseConfiguration	128
action validateAndUpdateDatabaseConfiguration	129
action deployDatabaseConfiguration	130
action removeDatabaseConfiguration	130
action enableDB2TextSearch	130
action updateJ2eeConfiguration	130
action validateJ2eeConfiguration	131
action validateAndUpdateJ2eeConfiguration	131
action deployJ2eeConfiguration	131
action removeJ2EEConfiguration	132
action deployConfiguration	132
action removeConfiguration	132
action reapplyAppServerTuning	132
action enableAppSecurity	133
action disableAppSecurity	133
action updateApplication	133
action addLanguages	133
action configureProducts	134
action deployMiddlewareConfiguration	134
action upgrade75Configuration	135
action updateApplicationDBLite	136
action configureProductsDBLite	136
構成プログラムのプロパティ	137
第 14 章 バックアップとリストア	165
管理ワークステーションのバックアップ	165
管理ワークステーションのリストア	166
第 15 章 製品のアンインストール	167
Maximo Asset Management の構成の削除	167
WebSphere Application Server Network Deployment 構成の削除	168
Maximo Asset Management およびミドルウェアのアンインストール	168
特記事項	171
商標	173
製品資料に関するご使用条件	173
IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント	174
索引	175

第 1 章 インストールの準備

以下のトピックでは、製品メディア、プリインストールの考慮事項、インストール手順の概要、および Maximo® Asset Management ランチパッドの使用に関する説明を提供しています。

この情報を使用してインストールを行う前に、計画情報を参照して Maximo Asset Management のデプロイメントのプロセス全体を把握しておいてください。

ソフトウェアのインストール・イメージ

IBM パスポート・アドバンテージから IBM® Maximo Asset Management 製品ソフトウェアにアクセスします。

パスポート・アドバンテージからダウンロードするインストール・イメージは、複数のダウンロード可能ファイルから構成されていることがあります。パッケージ内のすべてのファイルを単一のディレクトリーにダウンロードして、実行するために解凍してください。

説明およびインストール・イメージの完全なリストについては、IBM Maximo Asset Management 7.6.1 Download Document (<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24044945>) を参照してください。

インストール・プログラムの概要

IBM Installation Manager を使用して、Maximo Asset Management、IBM WebSphere® Application Server、および IBM DB2® をインストールします。

コンポーネントをインストールするターゲット・システム上で、インストール・プログラムを実行する必要があります。例えば、IBM WebSphere Application Server をインストールする場合は、IBM WebSphere Application Server サーバーとして指定されているシステム上でローカルにインストール・プログラムを起動します。

リストされているパッケージのフィックス、更新、拡張機能を検索するには、「他のバージョン、フィックス、および拡張機能の確認」ボタンを使用します。インストール・プログラムにより、IBM Fix Central から、リストされているパッケージの最新バージョンがダウンロードされます。

構成プログラムの概要

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management と関連するミドルウェアを構成します。

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、以下の構成タスクを実行します。

- 製品の構成のための IBM WebSphere Application Server の準備
- 新しい Maximo Asset Management のデプロイメントの構成

- データベースのアクセス資格情報の更新
- Maximo Asset Management のセキュリティー・モデルの変更
- データベース・サーバー・ホストの変更
- IBM WebSphere Application Server のアクセス資格情報の更新
- IBM WebSphere Application Server のホストの変更
- データベースの更新およびアプリケーション EAR ファイルのビルドとデプロイ
- IBM WebSphere Application Server の構成の削除
- Maximo Asset Management の構成の削除

Maximo Asset Management 構成プログラムでは、Maximo Asset Management のデプロイメントについてユーザーが行った構成の選択内容を記録し、ユーザーが入力した情報に基づいて、Maximo Asset Management をデプロイします。

Maximo Asset Management 構成プログラムに入力した情報は、`maximo.properties` ファイル、`install.properties` ファイルに保存されます。この情報の一部は、Maximo データベースにも書き込まれます。これらの値は、アップグレード時またはフィックスパックの適用時に Maximo Asset Management 構成プログラムのパネルの各フィールドに表示されます。

Maximo Asset Management 構成プログラムは、構成アイテムの各フィールドに入力された値を検証します。構成アイテムの一部のフィールドは、ユーザー名フィールドとパスワード・フィールドのように、ペアで検証されます。

ほとんどの場合、構成プログラムはローカルでもリモートでも実行できます。Maximo Asset Management の構成のために IBM WebSphere Application Server サーバーを準備する場合は、IBM WebSphere Application Server サーバー上でローカルに構成プログラムを実行する必要があります。

Maximo Asset Management 構成プログラムでミドルウェアを自動構成しない場合は、Maximo Asset Management を構成する前に、そのミドルウェアを手動で構成する必要があります。

注: Maximo Asset Management の保護のためにディレクトリー・サーバーを使用する場合は、LDAP スtringで入力する特殊文字の使用に関する製品固有の構文ルールに注意してください。特殊文字をディレクトリー・サーバーで読み取ることができるようにするには、ほとんどの場合、特殊文字の前にエスケープ文字を付加する必要があります。

多くのディレクトリー・サーバー製品では、LDAP スtring内のブランク・スペースは特殊文字と見なされます。エスケープしていないブランク文字を含む LDAP スtringをフィールド値の最後に入力した場合、Maximo Asset Management のエラーが発生します。

LDAP スtringでの特殊文字の使用について詳しくは、ご使用のディレクトリー・サーバーの製品資料を参照してください。

第 2 章 デプロイメント時のミドルウェアの自動構成

Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、企業内で Maximo Asset Management デプロイメントをインストールし、自動的に構成します。

このタスクについて

自動ミドルウェア構成によって Maximo Asset Management をデプロイするには、いくつかのタスクを完了する必要があります。ここでは、それらのタスクの大きな概要またはロードマップについて説明します。

このシナリオでは、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、以下のコンポーネントの新規インスタンスをインストールし、自動的に構成します。

- Db2
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Maximo Asset Management

Maximo Asset Management インストール・プログラムを使用して、デプロイメントで使用する Maximo Asset Management およびミドルウェアをインストールします。その後、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、ミドルウェアと Maximo Asset Management の両方を構成します。

Db2 は、Maximo Asset Management インストール・プログラムを使用してインストールすることができます。その後、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、これを自動的に構成します。

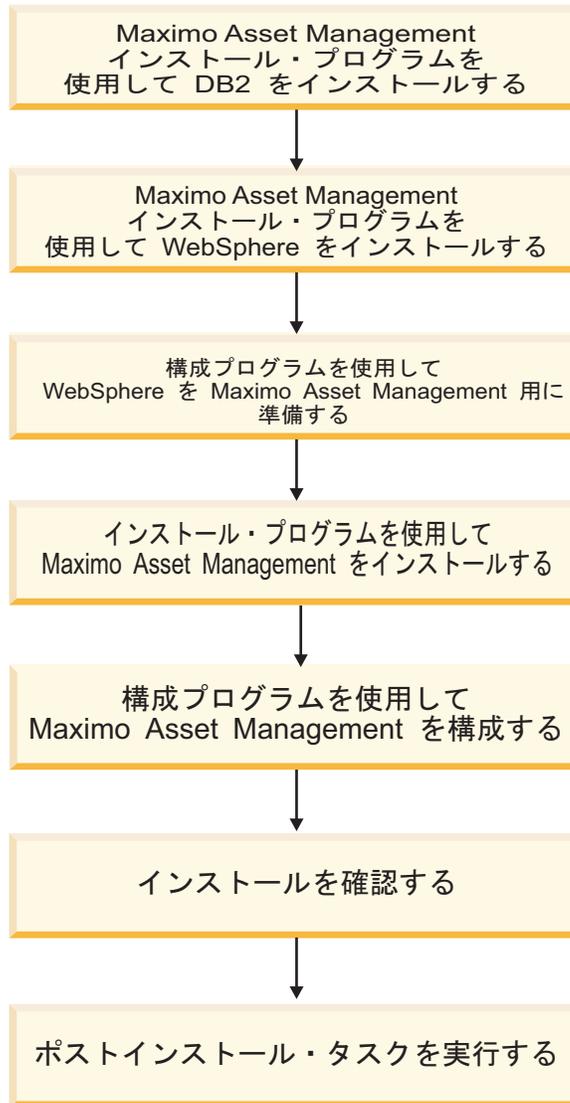


図 1. 自動ミドルウェア構成を使用した *Maximo Asset Management* のデプロイ

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment との間の通信で SSL を構成すると、Maximo Asset Management 構成プログラムでユーザーおよびグループをディレクトリー内に自動的に作成することができます。Maximo Asset Management の認証および許可にディレクトリー・サーバーを使用する予定の場合、ユーザーおよびグループをディレクトリー内に作成する必要があります。認証および許可に Maximo Asset Management アプリケーション・セキュリティーを使用する予定の場合、ディレクトリー・サーバーに対して SSL を構成する必要はありません。

このタスクについて

構成プログラムが Microsoft Active Directory 内に自動的にユーザーおよびグループを作成できるようにするには、Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間で SSL 通信を構成する必要があります。この手順が必要になるのは、構成プログラムによる WebSphere Application Server Network Deployment の自動構成を選択する場合のみです。そして、構成プログラムによって、Microsoft Active Directory でユーザーを自動的に作成させるようにする場合です。

Microsoft Active Directory に対して SSL を有効にし、証明書を生成して、その証明書を WebSphere Application Server Network Deployment に追加する必要があります。

認証局の名前またはドメインをいずれかの時点で変更すると、その認証局から以前に発行された証明書は無効になります。

ご使用の環境でホスト・ネーム・レゾリューションが正しく設定されていることを確認してください。証明書が発行されたシステムのホスト名が Microsoft Active Directory をホスティングするシステムで解決されないと、通信障害が発生します。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用した Db2 v11.1 のインストール

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Db2 v11.1 をインストールします。

手順

1. ターゲット・システムに管理権限を持つユーザーとしてログインします。
Linux または UNIX の端末ウィンドウから IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストールする言語を選択し、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「IBM Maximo Asset Management のインストール」をクリックします。
 - c. 「IBM Maximo Asset Management のインストール」パネルで、「IBM Db2 v11.1」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。

4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (Recheck Status)」をクリックしてから続行します。
5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
7. パッケージのインストール場所のパネルで、パッケージ・グループを選択し、インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。
8. パッケージ機能パネルで、すべてのデフォルト・オプションをチェックしたままにし、「次へ」をクリックします。
9. パッケージ構成パネルで、Db2 v11.1 の構成情報を指定し、「次へ」をクリックします。
10. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 Installation Manager を使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 のインストール

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 をインストールします。

手順

1. ターゲット・システムに管理権限を持つユーザーとしてログインします。
Linux または UNIX の端末ウィンドウから IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストールする言語を選択し、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」をクリックします。
 - c. 「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」パネルで、「**IBM WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7**」を選択し、「**IBM Maximo Asset Management** コンポーネントのインストール」をクリックします。 WebSphere Application Server Network Deployment のインストール時に、Java v8 をインストールします。Java v8 をインストールすると、構成プログラムによって、Java v8 を使用するように IBM Maximo Asset Management が構成されます。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (**Recheck Status**)」をクリックしてから続行します。
 5. 「ライセンス契約」パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、パッケージ・グループを選択し、そのインストール・ディレクトリーのパス情報を指定します。リストされている各パッケージ・グループについて、この処理を繰り返して、「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ翻訳パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment のための言語サポートを指定し、「次へ」をクリックします。
 9. パッケージ機能パネルで、すべてのデフォルト・オプションを選択したままにし、「次へ」をクリックします。
 10. パッケージ構成パネルで、IBM HTTP Server の構成情報を指定し、「次へ」をクリックします。
 11. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。
 12. インストールが完了したら、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成のために WebSphere Application Server Network Deployment を準備します。

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 構成のために WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 を準備します。

手順

1. ご使用の Web ブラウザーで Maximo Asset Management ランチパッドが動作しない場合、WebSphere Application Server 用の **IBM Tivoli Process Automation Suite** 構成プログラムのインストール・ディレクトリー (デフォルトは Linux/UNIXでは /opt/IBM/SMP、Windows では C:\IBM\SMP) に移動します。ConfigTool ディレクトリーに移動し、Windows では ConfigUI.exe を、UNIX では ConfigUI を開始します。
2. IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成操作ページで、「**WebSphere Application Server** の構成」をクリックします。
3. 「アプリケーション・サーバー・プロファイルの構成」ペインで、WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーおよびアプリケーション・サーバーのプロファイルを作成するために使用する情報を指定します。
4. オプション: 必要な場合、「アプリケーション・サーバーの詳細オプションの構成」ペインで、追加の構成情報を指定します。
5. WebSphere Application Server Network Deployment 管理セキュリティーのためにディレクトリー・サーバーの使用を選択する場合、ディレクトリー・サーバー・ホスト、資格情報、およびディレクトリー構造に関する情報を「管理セキュリティーの構成」ペインで指定します。
6. 「デプロイメント操作の適用」ペインで、デプロイメント操作のすべてのオプションを選択してから、「終了」をクリックします。

タスクの結果

Maximo Asset Management のための WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備ができました。

Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールします。

始める前に

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、管理ワークステーション上の既存の Maximo Asset Management バージョンとは別の場所にインストールする必要があります。

このタスクについて

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールするために、Maximo Asset Management 管理システム上で Maximo Asset Management バー

ジョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行します。

手順

1. Maximo Asset Management 管理ワークステーションにログインします。IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを Linux または UNIX の端末ウィンドウから実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストール・セッションの言語を選択して、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」をクリックします。
 - c. 「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」パネルで、「**IBM Maximo Asset Management v7.6.1**」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (**Recheck Status**)」をクリックしてから続行します。
 5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、IBM Tivoli の Process Automation Suite パッケージ・グループを選択し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・ディレクトリーのパス情報を指定してから「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。英語以外の環境にインストールする場合、環境の概要が英語でリストされることがあります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 用のサポート言語を後で構成します。

- インストールが完了したら、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムが終了し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムが自動的に開始されます。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 を構成します。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用した Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 を構成します。

手順

1. 以下のようにして、構成プログラムを開始します

オプション	説明
Windows 8 以降	C:\IBM\SMP\ConfigTool\ConfigUI.exe または <i>InstallLocation</i> \ConfigTool\ConfigUI.exe
UNIX	<i>InstallLocation</i> /ConfigTool/ConfigUI。例えば、/opt/IBM/SMP/ConfigTool/ConfigUI です。

2. 「デプロイメント操作」ペインで、ご使用の環境に応じて「新規デプロイメントの構成」または「既存の **Asset Management** デプロイメントを指すように新規の管理ワークステーションを構成します」を選択します。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。

タスクの結果

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、WebSphere Application Server Network Deployment を使用するためにインストールおよび構成されました。

NOTF JMS キューの作成

通知用の JMS キュー NOTF を作成する必要があります。

このタスクについて

NOTF という名前の JMS キューを作成して、通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 NOTF。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名

jms/maximo/int/queues/notf

バス名

intjmsbus。

キュー名

CQINBD。

6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

NOTFERR JMS キューの作成

エラー・キュー・バス宛先を作成したら、通知エラー処理用の NOTFERR エラー・キューを作成します。

このタスクについて

NOTFERR という名前の JMS キューを作成して、通知エラー処理を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。

4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。
 - 名前 NOTFERR と入力します。
 - この値には、大文字のみを含める必要があります。
 - JNDI 名
jms/maximo/int/queues/notferr と入力します。
 - バス名
「intjmsbus」を選択します。
 - キュー名
「CQINERRBD」を選択します。
6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

第 3 章 デプロイメント時の既存のミドルウェアの自動構成

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、企業内の既存のミドルウェアを Maximo Asset Management で使用するために自動的に構成することができます。

このタスクについて

ここでは、Maximo Asset Management を自動的にデプロイするために実行しておく必要があるタスクの大まかな概要やロードマップを示します。企業内で既に設定されているミドルウェアを使用します。



図 2. 既存のミドルウェアを再利用して *Maximo Asset Management* をデプロイする

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment との間の通信で SSL を構成すると、Maximo Asset Management 構成プログラムでユーザーおよびグループをディレクトリー内に自動的に作成することができます。Maximo Asset Management の認証および許可にディレクトリー・サーバーを使用する予定の場合、ユーザーおよびグループをディレクトリー内に作成する必要があります。認証および許可に Maximo Asset Management アプリケーション・セキュリティーを使用する予定の場合、ディレクトリー・サーバーに対して SSL を構成する必要はありません。

このタスクについて

構成プログラムが Microsoft Active Directory 内に自動的にユーザーおよびグループを作成できるようにするには、Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間で SSL 通信を構成する必要があります。この手順が必要になるのは、構成プログラムによる WebSphere Application Server Network Deployment の自動構成を選択する場合のみです。そして、構成プログラムによって、Microsoft Active Directory でユーザーを自動的に作成させるようにする場合です。

Microsoft Active Directory に対して SSL を有効にし、証明書を生成して、その証明書を WebSphere Application Server Network Deployment に追加する必要があります。

認証局の名前またはドメインをいずれかの時点で変更すると、その認証局から以前に発行された証明書は無効になります。

ご使用の環境でホスト・ネーム・レゾリューションが正しく設定されていることを確認してください。証明書が発行されたシステムのホスト名が Microsoft Active Directory をホスティングするシステムで解決されないと、通信障害が発生します。

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 構成のために WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 を準備します。

手順

1. ご使用の Web ブラウザーで Maximo Asset Management ランチパッドが動作しない場合、WebSphere Application Server 用の **IBM Tivoli Process Automation Suite** 構成プログラムのインストール・ディレクトリー (デフォルトは Linux/UNIXでは /opt/IBM/SMP、Windows では C:\IBM\SMP) に移動します。ConfigTool ディレクトリーに移動し、Windows では ConfigUI.exe を、UNIX では ConfigUI を開始します。
2. IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成操作ページで、「**WebSphere Application Server** の構成」をクリックします。

3. 「アプリケーション・サーバー・プロファイルの構成」ペインで、WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーおよびアプリケーション・サーバーのプロファイルを作成するために使用する情報を指定します。
4. オプション: 必要な場合、「アプリケーション・サーバーの詳細オプションの構成」ペインで、追加の構成情報を指定します。
5. WebSphere Application Server Network Deployment 管理セキュリティーのためにディレクトリー・サーバーの使用を選択する場合、ディレクトリー・サーバー・ホスト、資格情報、およびディレクトリー構造に関する情報を「管理セキュリティーの構成」ペインで指定します。
6. 「デプロイメント操作の適用」ペインで、デプロイメント操作のすべてのオプションを選択してから、「終了」をクリックします。

タスクの結果

Maximo Asset Management のための WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 の準備ができました。

Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールします。

始める前に

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、管理ワークステーション上の既存の Maximo Asset Management バージョンとは別の場所にインストールする必要があります。

このタスクについて

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールするために、Maximo Asset Management 管理システム上で Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行します。

手順

1. Maximo Asset Management 管理ワークステーションにログインします。IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを Linux または UNIX の端末ウィンドウから実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストール・セッションの言語を選択して、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」をクリックします。
 - c. 「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」パネルで、「**IBM Maximo Asset Management v7.6.1**」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (**Recheck Status**)」をクリックしてから続行します。
 5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. **Installation Manager** のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび **Installation Manager** インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。**Installation Manager** は、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに **Installation Manager** によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、**IBM Tivoli** の **Process Automation Suite** パッケージ・グループを選択し、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 インストール・ディレクトリーのパス情報を指定してから「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。英語以外の環境にインストールする場合、環境の概要が英語でリストされることがあります。**Maximo Asset Management** 構成プログラムを使用して、**Maximo Asset Management** 用のサポート言語を後で構成します。
 9. インストールが完了したら、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 インストール・プログラムが終了し、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 構成プログラムが自動的に開始されます。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 を構成します。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用した **Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 の構成

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、**Maximo Asset Management** バージョン 7.6.1 を構成します。

手順

1. 以下のようにして、構成プログラムを開始します

オプション	説明
Windows 8 以降	C:¥IBM¥SMP¥ConfigTool¥ConfigUI.exe または <i>InstallLocation</i> ¥ConfigTool¥ConfigUI.exe
UNIX	<i>InstallLocation</i> /ConfigTool/ConfigUI。例 えば、/opt/IBM/SMP/ConfigTool/ConfigUI です。

2. 「デプロイメント操作」ペインで、ご使用の環境に応じて「新規デプロイメントの構成」または「既存の **Asset Management** デプロイメントを指すように新規の管理ワークステーションを構成します」を選択します。
3. 画面の指示に従ってインストールを完了します。

タスクの結果

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、WebSphere Application Server Network Deployment を使用するためにインストールおよび構成されました。

NOTF JMS キューの作成

通知用の JMS キュー NOTF を作成する必要があります。

このタスクについて

NOTF という名前の JMS キューを作成して、通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 NOTF。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名
jms/maximo/int/queues/notf

バス名
intjmsbus。

キュー名
CQINBD。

6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

NOTFERR JMS キューの作成

エラー・キュー・バス宛先を作成したら、通知エラー処理用の NOTFERR エラー・キューを作成します。

このタスクについて

NOTFERR という名前の JMS キューを作成して、通知エラー処理を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 NOTFERR と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名
jms/maximo/int/queues/notferr と入力します。

バス名
「intjmsbus」を選択します。

キュー名
「CQINERRBD」を選択します。

6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

第 4 章 デプロイメント時の既存のミドルウェアの手動構成

既存のミドルウェア・サーバーを再利用し、Maximo Asset Management と連携するように手動で構成することによって、Maximo Asset Management をデプロイできます。

ここでは、企業内で既に設定されているミドルウェアを使用して、Maximo Asset Management を自動的にデプロイするために実行しておく必要のあるタスクの大まかな概要やロードマップを示します。

このシナリオでは、Maximo Asset Management 構成プログラムを実行する前に、既存のミドルウェア・リソースを手動で構成します。

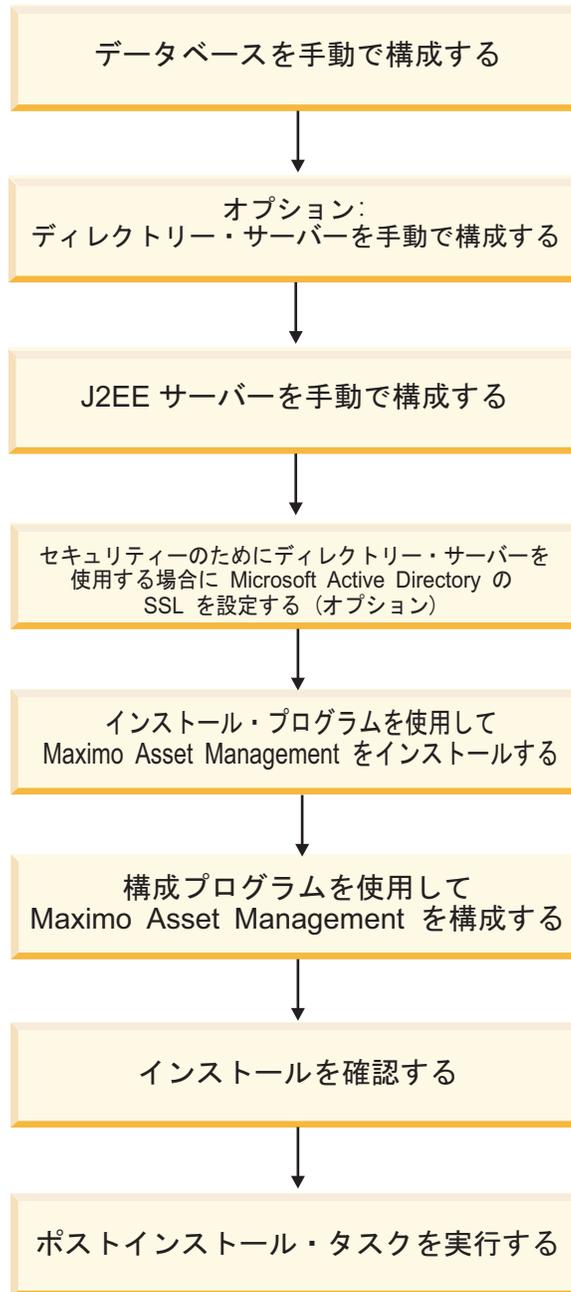


図 3. 手動ミドルウェア構成を使用した *Maximo Asset Management* のデプロイ

手動ミドルウェア構成を使用した **Maximo Asset Management** のインストール

手動構成によるインストールでは、*Maximo Asset Management* インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用する前に、*Maximo Asset Management* と連携するように、ミドルウェア・コンポーネント、データベース・サーバー、ディレクトリー・サーバー、および J2EE サーバーを構成します。

Maximo Asset Management 構成プログラムでは、Maximo Asset Management の 1 つ以上のミドルウェア・コンポーネントを自動で構成できます。もう一つの方法として、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを実行する前に、ミドルウェア・サーバーを Maximo Asset Management と連携するように手動で構成することができます。

始める前に、以下の前提条件に適合していることを確認してください。

- Maximo Asset Management 構成プログラムを開始する Windows サーバーまたは UNIX サーバーを指定している。
- WebSphere Application Server Network Deployment の場合は、セルおよび関連するすべてのノードがアクティブになっていることを確認する。

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用する前に各ミドルウェア・サーバーの手動による構成を完了して、Maximo Asset Management が各サーバーと連携するように構成する必要があります。

Maximo Asset Management とともに使用しようとしているミドルウェアがサポートされていることを確認してください。

データベースの手動構成

Maximo Asset Management で使用するデータベース・サーバーを手動で構成することができます。Maximo Asset Management のインストール・プログラムと構成プログラムを使用する前に、データベース・サーバーを手動で構成する必要があります。

UNIX および Linux 上の Db2 の場合は、Db2 表スペース用に少なくとも 8 ギガバイト (バイナリー) のフリー・スペースが必要です。このスペースは、データベース・インスタンスのホーム・ディレクトリー (/home/ctginst1) に使用する必要があります。

Windows 上の Db2 の場合は、Db2 のインストール・ディレクトリーに少なくとも 8 ギガバイトのフリー・スペースがあることを確認してください。

手動による Db2 v11.1 の構成

Maximo Asset Management での使用のために Db2 v11.1 サーバーを手動で構成します。

始める前に

全文検索をサポートする計画がある場合は、それが Db2 で有効になっていることを確認してください。

このタスクについて

Maximo Asset Management で使用するために既存の Db2 v11.1 サーバーを構成するには、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを開始する前に以下の手順を実行します。

手順

1. システムに対する管理権限を持つユーザーとしてシステムにログインします。
2. システム・ユーザーがシステムに存在していない場合は、作成します。

- Windows
 - db2admin
 - maximo
- Linux または UNIX
 - db2admin
 - maximo
 - ctgfenc1
 - ctginst1

ctginst1 ユーザー ID を、その 1 次グループとして db2iadm1 に割り当てる必要があります。

3. コンソール・ウィンドウを開き、Db2 環境をセットアップします。

- Windows
 - db2cmd
- Linux または UNIX

/opt/ibm/db2/V11.1/bin、/opt/ibm/db2/v11.1/instance、および /opt/ibm/db2/V11.1/adm の各ディレクトリーが PATH に追加されていることを確認します。

4. Db2 インスタンスを作成します。

- Windows

```
db2icrt -s ese -u db2admin,myPassword -r 50005,50005 ctginst1
set db2instance=ctginst1
db2start
db2 update dbm config using SVCENAME 50005 DEFERRED
db2stop
db2set DB2COMM=tcPIP
db2start
```
- Linux または UNIX

```
db2icrt -s ese -u ctgfenc1 -p 50005 ctginst1
./home/ctginst1/sql1ib/db2profile
db2start
db2 update dbm config using SVCENAME 50005 DEFERRED
db2stop
db2set DB2COMM=tcPIP
db2start
```

5. データベースを作成します。

```
db2 create db 'maxdb76' ALIAS 'maxdb76' using codeset UTF-8 territory US pagesize 32 K
db2 connect to 'maxdb76'
db2 GRANT DBADM ON DATABASE TO USER db2admin (windows only)
db2 GRANT SECADM ON DATABASE TO USER db2admin (windows only)
db2 connect reset
```

6. データベースを構成します。

```
db2 update db cfg for maxdb76 using SELF_TUNING_MEM ON
db2 update db cfg for maxdb76 using APPGROUP_MEM_SZ 16384 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using APPLHEAPSZ 2048 AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_MAINT ON DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_TBL_MAINT ON DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_RUNSTATS ON DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_REORG ON DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_DB_BACKUP ON DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using CATALOGCACHE_SZ 800 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using CHNGPGS_THRESH 40 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using DBHEAP_AUTOMATIC
db2 update db cfg for maxdb76 using LOCKLIST_AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using LOGBUFSZ 1024 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using LOCKTIMEOUT 300 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using LOGPRIMARY 20 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using LOGSECOND 100 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using LOGFILSIZ 8192 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using SOFTMAX 1000 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using MAXFILOP 32768 DEFERRED #32-bit Windows
```

```

db2 update db cfg for maxdb76 using MAXFILOP 65335 DEFERRED #64-bit Windows
db2 update db cfg for maxdb76 using MAXFILOP 30720 DEFERRED #32-bit UNIX
db2 update db cfg for maxdb76 using MAXFILOP 61440 DEFERRED #64-bit UNIX
db2 update db cfg for maxdb76 using PCKCACHESZ AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using STAT_HEAP_SZ AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using STMTHEAP AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using UTIL_HEAP_SZ 10000 DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using DATABASE_MEMORY AUTOMATIC DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using AUTO_STMT_STATS OFF DEFERRED
db2 update db cfg for maxdb76 using STMT_CONC LITERALS DEFERRED
db2 update alert cfg for database on maxdb76 using db.db_backup_req SET THRESHOLDSCHECKED YES
db2 update alert cfg for database on maxdb76 using db.tb_reorg_req SET THRESHOLDSCHECKED YES
db2 update alert cfg for database on maxdb76 using db.tb_runstats_req SET THRESHOLDSCHECKED YES
db2 update dbm cfg using PRIV_MEM_THRESH 32767 DEFERRED
db2 update dbm cfg using KEEPFENCED NO DEFERRED
db2 update dbm cfg using NUMDB 2 DEFERRED
db2 update dbm cfg using RQRIOBLK 65535 DEFERRED
db2 update dbm cfg using HEALTH_MON OFF DEFERRED
#
# Windows: AGENT_STACK_SZ 1000
# Unix : AGENT_STACK_SZ 1000
#
db2 update dbm cfg using AGENT_STACK_SZ 1000 DEFERRED
db2 update dbm cfg using MON_HEAP_SZ AUTOMATIC DEFERRED
db2set DB2_SKIPINSERTED=ON
db2set DB2_INLIST_TO_NLJN=YES
db2set DB2_MINIMIZE_LISTPREFETCH=Y
db2set DB2_EVALUNCOMMITTED=Y
db2set DB2_FMP_COMM_HEAPSZ=65536
db2set DB2_SKIPDELETE=ON
db2set DB2_USE_ALTERNATE_PAGE_CLEANING=ON

```

- Linux または UNIX の場合、ctginst1 ユーザーとしてシステムにログインし、Db2 コマンド行環境を再始動します。

```

su - ctginst1
db2

```

- Db2 を再始動します。

```

db2stop force
db2start

```

- データベースに再接続します。

```

db2 connect to 'maxdb76'

```

- バッファークールを作成します。

```

db2 CREATE BUFFERPOOL MAXBUFFPOOL IMMEDIATE SIZE 4096 AUTOMATIC PAGESIZE 32 K

```

- 表スペースを作成します。

```

db2 CREATE REGULAR TABLESPACE MAXDATA PAGESIZE 32 K MANAGED BY AUTOMATIC STORAGE INITIALSIZE 5000 M BUFFERPOOL MAXBUFFPOOL
db2 CREATE TEMPORARY TABLESPACE MAXTEMP PAGESIZE 32 K MANAGED BY AUTOMATIC STORAGE BUFFERPOOL MAXBUFFPOOL
db2 CREATE REGULAR TABLESPACE MAXINDEX PAGESIZE 32 K MANAGED BY AUTOMATIC STORAGE INITIALSIZE 5000 M BUFFERPOOL MAXBUFFPOOL
db2 GRANT USE OF TABLESPACE MAXDATA TO USER MAXIMO

```

- スキーマを作成します。

```

db2 create schema maximo authorization maximo

```

- maximo に権限を付与します。

```

db2 GRANT DBADM,CREATETAB,BINDADD,CONNECT,CREATE_NOT_FENCED_ROUTINE,IMPLICIT_SCHEMA,
LOAD,CREATE_EXTERNAL_ROUTINE,QUIESCE_CONNECT,SECADM ON DATABASE TO USER MAXIMO
db2 GRANT USE OF TABLESPACE MAXDATA TO USER MAXIMO
db2 GRANT CREATEIN,DROPIN,ALTERIN ON SCHEMA MAXIMO TO USER MAXIMO

```

- データベース接続を切断します。

```

db2 connect reset

```

- Db2 コマンド行環境を終了します。

- インストールの準備の方法を説明した章にある前提条件のトピックに示されている、該当するフィックスパックをインストールします。フィックスパックの README ファイルに含まれているインストール・タスクとポストインストール・タスクをすべて検討し、完了します。これを行わないと、Maximo Asset Management のインストールが失敗する可能性があります。

手動による Microsoft SQL Server 2012 の構成

Microsoft SQL Server は、手動で構成して、Maximo Asset Management と組み合わせて使用できます。

始める前に

Microsoft SQL Server では UTF-8 がサポートされないため、マルチリンガル・サポート機能は制限されています。複数の言語を 1 つのデータベース・インスタンスでサポートできるのは、それらが同じ文字セットを共用する場合に限定されます。例えば、英語、フランス語、およびポルトガル語が 1 つのデータベース・インスタンスでサポートされるのは、それらが同じ文字セットを使用するためです。ポルトガル語と中国語の両方を 1 つのデータベース・インスタンスでサポートできなかったのは、それらが異なる文字セットを使用するためです。

Microsoft SQL Server データベースの照合設定は、以下のオプションに設定する必要があります。

- 辞書順
- 大文字と小文字を区別しない
- 1252 文字セットを使用

このタスクについて

Maximo Asset Management で使用するために既存の Microsoft SQL Server を構成するには、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを始動する前に、以下の手順を実行します。

手順

1. リスナー・ポートを構成します。

Microsoft SQL Server データベース・エンジンのデフォルトのインスタンスは、TCP ポート 1433 を listen します。Microsoft SQL Server データベース・エンジンおよび Microsoft SQL Server Compact Edition の名前付きインスタンスは、動的ポートを対象に構成されています。つまり、これらのインスタンスは、サービスの開始時に使用可能な任意のポートを選択します。ファイアウォールを介して名前付きインスタンスに接続する場合は、特定のポートを listen するようにデータベース・エンジンを構成し、ファイアウォール内でこのポートを開くようにします。

- a. 「プログラム」 > 「Microsoft SQL Server 2012」 > 「構成ツール」 > 「SQL Server 構成マネージャ」を開きます。
- b. Microsoft SQL Server 構成マネージャのナビゲーション・ペインで、「SQL Server ネットワーク構成」 > 「<インスタンス名> のプロトコル」を展開して「TCP/IP」をダブルクリックします。
- c. 「TCP/IP のプロパティ」ダイアログボックスで、「IP アドレス」タブをクリックします。
- d. リストされている各 IP アドレスについて、「TCP 動的ポート」フィールドが空白であることを確認します。「TCP 動的ポート」フィールドに 0 の値が入っている場合、その IP アドレスは動的ポートを使用します。Maximo Asset Management では Microsoft SQL Server は静的ポートを listen する必要があるため、このフィールドは空白でなければなりません。
- e. リストされた IP アドレスごとに、「TCP ポート」フィールドに 1433 を入力します。

- f. 「OK」をクリックします。
 - g. SQL Server 構成マネージャーのナビゲーション・ペインで、「SQL Server サービス」をクリックします。
 - h. 「SQL Server (<インスタンス名>)」を右クリックし、「再始動」をクリックして Microsoft SQL Server の停止および再始動を行います。
 - i. Microsoft SQL Server インスタンスが稼働していることを確認し、SQL Server 構成マネージャーを閉じます。
2. Microsoft SQL Server 2012 のインストール時に、全文検索設定が有効になっていることを確認します。既存の Microsoft SQL Server データベースに全文検索がインストールされているかどうかを判別するには、以下の手順を実行します。
- a. SQL Server Management Studio を開き、認証タイプとして「SQL Server 認証」を選択し、sa ユーザー ID の資格情報を入力し、「接続」をクリックします。
 - b. 「新しいクエリ」をクリックします。
 - c. 次のコマンドを入力し、「実行」をクリックします。

```
select FULLTEXTSERVICEPROPERTY ( 'IsFulltextInstalled' )
```
- 全文検索をインストールしていない場合 (結果値が 0) は、ただちにインストールする必要があります。全文検索をインストールするには、Microsoft SQL Server 2012 の製品メディアをシステムに挿入し、インストール・ウィザードを開始します。インストール・ウィザードを順に進めて、「セットアップの種類」ダイアログ・ボックスの「カスタム」部分にある「フルテキスト検索」オプションを有効にします。インストール・プロセスを終了するには、サーバーを再始動します。
3. Microsoft SQL Server データベースを作成します。
- a. SQL Server Management Studio を開きます (「スタート」 > 「プログラム」 > 「Microsoft SQL Server 2012」 > 「SQL Server Management Studio」)。
 - b. ナビゲーション・ツリーで「データベース」フォルダーを右クリックし、「新しいデータベース」を選択します。
 - c. データベース名入力フィールドに、固有のデータベース名を指定します。例えば、maxdb76 と入力します。
 - d. maxdb76 論理名の場合、初期サイズ (MB) 属性を 500 (MB) に変更し、また「自動拡張/最大サイズ」フィールドの値を「1 MB 単位で無制限」に設定します。
 - e. 必要に応じて、使用中の本番環境に適合するようにログ設定を変更します。
 - f. 「OK」をクリックします。
4. Microsoft SQL Server 用の Maximo ユーザーを作成します。
- a. Microsoft SQL Server Management Studio (「スタート」 > 「プログラム」 > 「Microsoft SQL Server 2012」 > 「SQL Server Management Studio」) を開きます。
 - b. SQL Server 構成マネージャーのナビゲーション・ペインで、「データベース」をクリックします。

- c. **maxdb76** データベースを右クリックし、「新しいクエリ」を選択します。
- d. 以下のスクリプトを入力して、システムのパスワード・ポリシーに準拠したパスワードを持つ Maximo データベース ユーザー MAXIMO を作成します。

```
sp_addlogin MAXIMO,password  
go
```

この値では大文字と小文字が区別されます。

- e. 「実行」をクリックします。
- f. 以下のスクリプトを入力し、maximo に対するデータベース所有者を変更します。

```
sp_changedbowner MAXIMO  
go
```

- g. 「実行」をクリックします。

次のタスク

データベースに論理名を追加し、それらのファイル・グループを PRIMARY 以外の値に設定した場合は、データベースをセットアップして Maximo ユーザーを作成した後に、以下の手順を実行します。

1. 以下のプロパティを `install_home\etc\install.properties` ファイルに追加します。

```
Database.SQL.DataFilegroupName=your_logical_name
```

2. 構成ツールを実行してデプロイメントを完了します。

これらの追加手順は、データベースに論理名を追加し、それらのファイル・グループを PRIMARY 以外の値に設定した場合にのみ実行してください。

手動によるディレクトリー・サーバーの構成

認証と許可を管理するために、Maximo Asset Management 用のディレクトリー・サーバーを手動で構成することができます。

Maximo Asset Management を保護する方法はいくつか存在します。ディレクトリー・サーバーを使用して Maximo Asset Management を保護する場合は、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用する前に、手動によるディレクトリー・サーバーの構成を完了しておく必要があります。

注: リストされている基本 DN、バインド・ユーザー、その他のさまざまなノード値は、デフォルト値です。これらの値は、組織内の既存の LDAP 階層に適用される値に置き換えてください。

重要: Maximo Asset Management 構成パネル・フィールドの LDAP 値、LDIF ファイルのエントリー、またはディレクトリー・サーバー・ツールを使用してディレクトリー・インスタンスに直接入力する値を入力する場合は、LDAP ストリングでの特殊文字の使用に関する製品固有の構文ルールに注意してください。特殊文字をディレクトリー・サーバーで読み取ることができるようにするには、ほとんどの場合、特殊文字の前にエスケープ文字を付加する必要があります。Maximo Asset Management で使用される LDAP ストリングに含まれている特殊文字をエスケープしなかった場合、Maximo Asset Management のエラーが発生します。

多くのディレクトリー・サーバー製品では、LDAP スtringの一部になっている
空白・スペースは特殊文字と見なされます。空白を含む LDAP String
を、例えばフィールド値の最後に誤って入力した場合、空白文字の前にエスケ
ープ文字を付加していなければ、Maximo Asset Management エラーが発生し、こ
のエラーをトラブルシューティングするのが難しくなります。

LDAP Stringでの特殊文字について詳しくは、ご使用のディレクトリー・サー
バーの製品資料を参照してください。

手動による IBM Security Directory Server の構成

Maximo Asset Management で使用するように IBM Security Directory Server を
手動で構成します。

このタスクについて

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application
Server Network Deployment を自動的に構成することを選択した場合、これらの
ユーザーおよびグループを自動的に作成することができます。Maximo Asset
Management 構成プログラムで WebSphere Application Server Network
Deployment を構成しない場合は、ユーザーを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを開
始する前に IBM Security Directory Server を構成するには、IBM Security
Directory Server のインスタンスを作成する必要があります。

注: IBM Security Directory Server が必要とするものと Maximo Asset
Management との間で Db2 インスタンスを共有することは技術的には可能で
すが、それは問題につながる恐れがあります。インストール中にはデータベース・イ
ンスタンスが再始動されるため、一時的にエンタープライズで IBM Security
Directory Server を使用できなくなる可能性があります。自動化されたインストー
ル・プログラムを使用すると、Maximo Asset Management および IBM Security
Directory Server によって使用するためのインスタンスがそれぞれ別個に作成され
ます。

手順

1. 希望する方法に従ってシステムにユーザーを作成し、そのユーザーを適切なグ
ループに割り当てます。

Windows

ユーザー db2admin を作成し、このユーザーを以下のグループのメン
バーにします。

- Windows 管理者
- DB2ADMNS
- DB2USERS

UNIX ユーザー idscmdb を作成し、このユーザーを以下のグループのメン
バーにします。

- dasadmnl
- idslldap
- dbsysadm

root ユーザーは、dasadm1、idsldap、および dbsysadm グループのメンバーであることも必要です。

2. インスタンス管理ツールがまだ開始されていない場合は、システムに管理者としてログインしていることを確認し、このツールを開始します。

Windows

「すべてのプログラム」 > 「IBM Tivoli Directory Server 6.3」 > 「インスタンス管理ツール (Instance Administration Tool)」を選択します。

UNIX コマンド行に `/opt/IBM/ldap/V6.3/sbin/idsxinst` と入力します。

3. インスタンス管理ツールで「インスタンスの作成」をクリックします。
4. 「新規インスタンスの作成」ウィンドウで「新規ディレクトリー・サーバー・インスタンスの作成」をクリックし、「次へ」をクリックします。
5. 「インスタンスの詳細 (Instance details)」ウィンドウで、以下のフィールドに値を入力し、「次へ」をクリックします。

ユーザー名

インスタンスを所有するユーザーのシステム・ユーザー ID として `idscmdb` を選択します。この名前は、インスタンスの名前にもなりません。

インストール・ロケーション

インスタンスのファイルが保管される場所を入力します。

暗号化シード・ストリング

暗号化シードとして使用する文字ストリングを入力します。この値は、12 文字以上でなければなりません。

インスタンスの説明

インスタンスの簡単な説明を入力します。

6. 「Db2 インスタンスの詳細」パネルで「Db2 インスタンス名」フィールドの値として `idscmdb` を入力し、「次へ」をクリックします。
7. 「マルチホーム・ホストの TCP/IP 設定 (TCP/IP settings for multihomed hosts)」パネルで「構成したすべての IP アドレスを **listen** する (**Listen on all configured IP addresses**)」を選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「TCP/IP ポート設定 (TCP/IP port settings)」パネルで以下のフィールドへの入力を行い、「次へ」をクリックします。

サーバーのポート番号

サーバーの連絡先ポートとして `389` と入力します。

サーバーのセキュア・ポート番号

サーバーのセキュア・ポートとして `636` と入力します。

管理デーモン・ポート番号

管理デーモン・ポートとして `3538` と入力します。

管理デーモン・セキュア・ポート番号

管理デーモン・セキュア・ポートとして `3539` と入力します。

9. 「オプション・ステップ (Option steps)」パネルで、以下のオプションが選択された状態のままにして、「次へ」をクリックします。

管理者 DN およびパスワードの構成

ここで、インスタンスの管理者 DN およびパスワードを構成します。

データベースの構成

ここで、ディレクトリー・サーバーのデータベースを構成します。

10. 「管理者 DN およびパスワードの構成 (Configure administrator DN and password)」パネルで以下のフィールドへの入力を行い、「次へ」をクリックします。

管理者 DN

管理者の識別名 (DN) として `cn=root` と入力します。

管理者パスワード

管理者 DN のパスワードを入力します。

11. 「データベースの構成 (Configure database)」パネルで以下のフィールドへの入力を行い、「次へ」をクリックします。

データベース・ユーザー名

データベース・ユーザーとして `idscmdb` と入力します。

パスワード

`idscmdb` ユーザーのパスワードを入力します。

データベース名

このディレクトリー・インスタンスで使用するデータベースとして `idscmdb` と入力します。

12. 「データベース・オプション (Database options)」パネルで以下のフィールドへの入力を行い、「次へ」をクリックします。

データベースのインストール・ロケーション

データベースの場所を入力します。

Windows

Windows プラットフォームの場合、この値はドライブ名でなければなりません。

UNIX Windows システム以外の場合、ロケーションはディレクトリー名 (`/home/ldapdb` など) でなければなりません。

指定するロケーションには 80 MB 以上の空きハード・ディスク・スペースがあることを確認してください。新規のエントリーがディレクトリーに追加されるのに応じたサイズの増大に対応できるように、追加のディスク・スペースも必要です。

文字セット・オプション

「ユニバーサル **DB2** データベース (**UTF-8/UCS-2**) の作成 (**Create a universal DB2 database (UTF-8/UCS-2)**)」オプションを選択した状態にしておきます。

13. 「設定の確認 (Verify settings)」パネルで、表示されたインスタンスの作成に関する詳細を確認し、「終了」をクリックして `idscmdb` インスタンスを作成します。
14. 「閉じる」をクリックしてウィンドウを閉じ、インスタンス管理ツールのメイン・ウィンドウに戻ります。
15. 「閉じる」をクリックしてインスタンス管理ツールを終了します。

16. IBM Security Directory Server 構成ツールを開始します。

Windows

「すべてのプログラム」 > 「IBM Tivoli Directory Server 6.3」 > 「インスタンス管理ツール (Instance Administration Tool)」を選択します。

UNIX コマンド行に `./opt/IBM/ldap/V6.3/sbin/idsxcfg` と入力します。

17. 「サフィックスの管理 (Manage suffixes)」を選択します。
18. 「サフィックスの管理 (Manage suffixes)」パネルで以下のサフィックスを入力し、「追加」をクリックします。
o=IBM,c=US
19. 「OK」をクリックします。
20. LDIF ファイルを作成して保存します。

例えば以下のような DN 情報を追加します。

- ou=SWG,o=IBM,c=US
- ou=users

注: この例の ou=SWG,o=IBM,c=US は、SWG という組織単位です。SWG は、Maximo Asset Management 用に作成されたユーザーを配置するための OU=Users 組織単位を格納します。DC=IBM および DC=COM は、ibm.com[®] のドメイン・フォレストを示します。この例は、お客様の所属組織のディレクトリー構造に置き換えることができます。

以下のユーザーおよび作成した ou=users DN 内でのそれらの位置を定義します。これらのユーザーは、Virtual Member Manager を使用して Maximo Asset Management を保護するために定義します。

重要: この手順を開始する前に、LDAP リポジトリのルートに以下のユーザーを作成します。

表 1. 基本の Maximo Asset Management ユーザー

ユーザー
wasadmin
maxadmin
mxintadm
maxreg

以下にデフォルトのベース LDIF データの例を示します。

```
dn: o=ibm,c=us
objectClass: top
objectClass: organization
o: IBM

dn: ou=SWG, o=ibm,c=us
ou: SWG
objectClass: top
objectClass: organizationalUnit

dn: ou=users,ou=SWG, o=ibm,c=us
ou: users
```

```

objectClass: top
objectClass: organizationalUnit
dn: cn=wasadmin,ou=users,ou=SWG, o=ibm,c=us
uid: wasadmin
userpassword: wasadmin
objectclass: organizationalPerson
objectclass: inetOrgPerson
objectclass: person
objectclass: top
title: WebSphere Administrator
sn: wasadmin
cn: wasadmin
dn: uid=maxadmin,ou=users,ou=SWG, o=ibm,c=us
userPassword: maxadmin
uid: maxadmin
objectClass: inetorgperson
objectClass: top
objectClass: person
objectClass: organizationalPerson
sn: maxadmin
cn: maxadmin

dn: uid=mxintadm,ou=users,ou=SWG, o=ibm,c=us
userPassword: mxintadm
uid: mxintadm
objectClass: inetorgperson
objectClass: top
objectClass: person
objectClass: organizationalPerson
sn: mxintadm
cn: mxintadm

dn: uid=maxreg,ou=users,ou=SWG, o=ibm,c=us
userPassword: maxreg
uid: maxreg
objectClass: inetorgperson
objectClass: top
objectClass: person
objectClass: organizationalPerson
sn: maxreg
cn: maxreg

```

注: Windows で LDIF ファイルを作成する場合は、このファイルを使用する前にファイルから ^M 文字を削除しておく必要があります。

注: LDIF ファイルを UNIX システムにインポートする前に、dos2unix コマンドを実行して、そのファイルをフォーマットする必要があります。

21. IBM Security Directory Server 構成ツールで、「**LDIF** データのインポート (**Import LDIF data**)」をクリックします。
22. 「参照」をクリックして、LDIF ファイルを見つけます。
23. 「インポート」をクリックします。
24. IBM Security Directory Server 構成ツールを閉じ、サーバーを再始動します。

手動による Microsoft Active Directory バージョン 2012 の構成

Microsoft Active Directory は、手動で構成して、Maximo Asset Management と組み合わせて使用できます。

始める前に

Maximo Asset Management での許可および認証用に Microsoft Active Directory を手動で構成します。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成することを選択した場合、これらのユーザーおよびグループを自動的に作成することができます。Maximo Asset Management 構成プログラムで WebSphere Application Server Network Deployment を構成しない場合、ユーザーを手動で作成する必要があります。ユーザーを自動的に作成するには、Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment 間の SSL 通信が必要です。

重要: デプロイメントを成功させるには、以下の手順で作成するユーザーとパスワードがこの構成と正確に一致している必要があります。場合によっては、これらのアカウントを必須フォーマットで作成するために、Microsoft Active Directory のセキュリティ・ポリシーを一時的に変更する必要があります。インストールが完了したら、より厳密なセキュリティ・ポリシーに準拠するために、これらのデフォルト・パスワードを変更して構いません。

このタスクについて

Maximo Asset Management のインストールおよび構成プログラムを開始する前に、Microsoft Active Directory を構成します。以下の手順を実行します。

手順

1. 「Active Directory ドメイン サービス」ロールを追加します。
 - a. サーバー マネージャーを始動します。
 - b. 「役割と機能の追加」をクリックします。
 - c. 「開始する前に」ページで、「次へ」をクリックします。
 - d. 「インストールの種類」で「役割ベースまたは機能ベースのインストール」を選択してから、「次へ」をクリックします。
 - e. 「サーバー プールからサーバーを選択」オプションを選択してから、サーバー プールの一覧からローカル・サーバーを選択します。「次へ」をクリックします。
 - f. ロール一覧で、「**Active Directory** ドメイン サービス」を選択します。
 - g. 「機能の追加」をクリックします。
 - h. 「次へ」をクリックします。
 - i. 「機能の選択」ページで、デフォルトを受け入れて、「次へ」をクリックします。
 - j. 確認ページで、「インストール」をクリックします。
 - k. インストールが完了したら「閉じる」をクリックし、サーバーを再始動します。
2. サーバーをドメイン コントローラーにプロモートします。
 - a. サーバー マネージャーを始動します。
 - b. ダッシュボードで「**AD DS**」をクリックします。

- c. 「**Active Directory** ドメイン サービスに必要な構成」警告インディケーターをクリックします。
- d. 「すべてのサーバー タスクの詳細と通知」ページで、「このサーバーをドメイン コントローラーに昇格する」アクションをクリックします。
- e. 「配置構成」ページで、「新しいフォレストの追加」を選択します。固有の完全修飾ドメイン名を使用したルート・ドメイン名 (qawin01ldap.swg.usma.ibm.com など) を指定してから、「次へ」をクリックします。
- f. 「ドメイン コントローラー オプション」ページで、「ドメイン ネーム システム (**DNS**) サーバー」オプションをクリアし、ディレクトリー サービス復元モード (**DSRM**) のパスワードを指定します。「次へ」をクリックします。
- g. デフォルトの NetBIOS 名を受け入れて、「次へ」をクリックします。
- h. 「**AD DS**」データベース、ログ・ファイル、および SYSVOL のデフォルト・パスを受け入れます。「次へ」をクリックします。
- i. 要約を参照し、「次へ」をクリックしてから、「インストール」をクリックします。
- j. サーバーを再始動します。

システムが再始動したら、ログイン資格情報で指定したドメインを含める必要があります。この例では、QAWIN01LDAP ドメインが作成されました。システムにログインするときのユーザーとして QAWIN01LDAP¥Administrator を指定します。

3. Maximo Asset Management のコンテナ、ユーザー、およびグループを作成します。
 - a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「**Active Directory** ユーザーとコンピューター」を選択します。
 - b. サーバーを選択して右クリックし、「新規」 > 「組織単位」を選択します。
 - c. 組織単位の名前 (例えば SWG) を指定してから、「**OK**」をクリックします。
 - d. サーバーに配置される新しい組織単位 (この例では SWG) を選択し、右クリックして「新規」 > 「組織単位」を選択します。
 - e. 組織単位の名前 (例えば users) を指定し、「**OK**」をクリックします。
 - f. SWG の下に別の組織単位を作成し、groups という名前を付けます。
 - g. **users** 組織単位を右クリックし、「新規」 > 「ユーザー」をクリックします。
 - h. maxadmin という名前のユーザーを作成します。maxadmin を「名」および「ユーザー ログオン名」に指定します。「次へ」をクリックします。
 - i. maxadmin のパスワードを指定します。「次へ」をクリックしてから、「終了」をクリックします。
 - j. mxintadm および maxreg という名前でユーザーをあと 2 つ作成します。
 - k. **groups** 組織単位を右クリックし、「新規」 > 「グループ」を選択します。
 - l. グループに maximousers という名前を付け、「**OK**」をクリックします。
 - m. maximousers グループを右クリックし、「プロパティ」を選択します。

- n. 「メンバー」タブで、「追加」をクリックします。
- o. 「選択するオブジェクト名を入力してください」フィールドに **maxadmin** と入力し、「OK」をクリックします。 maxadmin ユーザーは、maximousers メンバー・リストのメンバーになりました。
- p. mxintadm ユーザーおよび maxreg ユーザーを maximousers グループに追加します。
- q. 「適用」をクリックしてから、「OK」をクリックします。

次のタスク

Microsoft Active Directory の構成が完了したので、今度はMicrosoft Active Directory を使用できるようにするために、J2EE サーバーを構成する作業に入る準備ができました。

手動による J2EE サーバーの構成

Maximo Asset Management で使用するために既存の J2EE サーバーを手動で構成します。

J2EE サーバーの手動構成は、Maximo Asset Management WebSphere Application Server Network Deployment をデプロイすることを選択し、Maximo Asset Management 構成プログラムによる自動構成を選択しない場合に必要です。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用する前に、手動構成を完了しておく必要があります。

Maximo Asset Management に Java 8 が必要です。Maximo Asset Management で使用する J2EE サーバー上に、Java 8 をインストールし、構成する必要があります。

手動による WebSphere Application Server Network Deployment の構成

このセクションでは、Maximo Asset Management で使用するために既存の WebSphere Application Server Network Deployment を手動で構成する方法について記載します。

Maximo Asset Management 構成プログラムによる自動構成を行わない場合は、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用する前に WebSphere Application Server Network Deployment を手動で構成する必要があります。

WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの作成:

WebSphere Application Server Network Deployment を手動でインストールする場合は、プロファイルを作成してから Maximo Asset Management のインストールを開始する必要があります。WebSphere Application Server Network Deployment には、プロファイルを作成する際に使用する **manageprofiles** コマンド行ツールが付属しています。

始める前に

使用するコマンドまたはシェルの文字制限をよく理解していることを確認してください。場合によっては、これらの制限を超過することを回避するために、コマンド

の入力が必要な場合があります。複数行に渡って長いコマンドを入力する方法について詳しくは、WebSphere Application Server Network Deployment の製品資料を参照してください。

このタスクについて

以下のコマンドは、プロファイルの管理に役立ちます。

表 2. プロファイル・コマンド

タスク	コマンド
プロファイルの削除	<code>WAS_HOME/bin/manageprofiles.[sh bat] -delete -profileName profile name</code>
プロファイル・レジストリーのリフレッシュ (例えばプロファイルの削除後)	<code>WAS_HOME/bin/manageprofiles.[sh bat] -validateAndUpdateRegistry</code>
既存のプロファイルのリスト表示	<code>WAS_HOME/bin/manageprofiles.[sh bat] -listProfiles</code>

`WAS_HOME` は、WebSphere Application Server Network Deployment のインストール場所です (`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/` または `C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\` など)。

WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

手順

1. `WAS_HOME` フォルダの `bin` ディレクトリーにある `setupCmdLine.[sh|bat]` スクリプトを入手し、WebSphere Application Server Network Deployment 環境を構成インスタンスに設定します。通常、`WAS_HOME` は `/opt/IBM/WebSphere/AppServer` または `C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer\` にあります。
2. `ctgDmgr01` プロファイルのプロファイル・ポート・ファイルを作成します。このファイルは、このプロファイルが使用するポートを設定するために、**manageprofiles** コマンドと組み合わせて使用されます。

注: このファイル内のすべての値の後にスペースが付加されないようにすることが重要です。このスペースの付加は、例の切り取りおよび貼り付けを行うと発生することがあります。いずれかの値の末尾に余分なスペースが存在する場合、WebSphere では、そのスペースをその値の最後の文字として使用します。例えば、`WC_adminhost=9060` という値を指定したが、`9060` の後に余分なスペースが入力されたとします。この値は、`WC_adminhost=9060<sp>` (`<sp>` はスペース文字) と解釈されます。

- a. `_portdef_DMgr.props` という名前の新規テキスト・ファイルを開き、以下のテキストを入力します。

```
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS=9403
WC_adminhost=9060
DCS_UNICAST_ADDRESS=9352
BOOTSTRAP_ADDRESS=9809
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS=9401
CELL_DISCOVERY_ADDRESS=7277
```

```
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS=8879
ORB_LISTENER_ADDRESS=9100
CSIV2_SSL_MUTUALAUTH_LISTENER_ADDRESS=9402
WC_adminhost_secure=9043
```

b. このファイルを *WAS_HOME* ディレクトリに配置します。

3. **manageprofiles** コマンドを使用して、*ctgDmgr01* プロファイルを作成します。以下のコマンドすべてを 1 行で入力します。各エントリ間にはスペースを挿入します。

```
WAS_HOME/bin/manageprofiles.[sh|bat]
-create
-templatePath WAS_HOME/profileTemplates/dmgr
-hostName yourfullyqualifiedhost
-profileName ctgDmgr01
-profilePath WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01
-portsFile WAS_HOME/_portdef_DMgr.props
-cellName ctgCell01
-nodeName ctgCellManager01
-enableAdminSecurity "false"
```

4. Java 8 を使用するように *ctgDmgr01* プロファイルが構成されていることを確認します。

a. 使用可能な Java JDK をリストして、Java 8 がシステムにインストールされていることを確認します。

```
WAS_HOME/bin>managesdk.[sh|bat]
-listAvailable
-verbose
```

b. *ctgDmgr01* に関連付けられている Java のバージョンをリストします。

```
WAS_HOME/bin/managesdk.[sh|bat]
-listEnabledProfile
-profileName ctgDmgr01
-verbose
```

c. 必要に応じて、*ctgDmgr01* プロファイルで Java 8 を使用できるようにします。

```
WAS_HOME/bin>managesdk.[sh|bat]
-enableProfile
-profileName ctgDmgr01
-sdkName 1.8_00
-enableServers
```

5. *ctgDmgr01* サーバーを開始します。

```
WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01/bin/startManager.[sh|bat]
```

6. *ctgAppSrv01* プロファイルのプロファイル・ポート・ファイルを作成します。このファイルは、このプロファイルが使用するポートを設定するために **manageprofiles** コマンドによって使用されます。

a. *_portdef_AppSvr.props* という名前の新規テキスト・ファイルを開き、以下のテキストを入力します。

```
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS=9201
DCS_UNICAST_ADDRESS=9353
NODE_DISCOVERY_ADDRESS=7272
NODE_IPV6_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS=5001
BOOTSTRAP_ADDRESS=2809
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS=9901
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS=8878
NODE_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS=5000
ORB_LISTENER_ADDRESS=9101
CSIV2_SSL_MUTUALAUTH_LISTENER_ADDRESS=9202
```

- b. このファイルを `WAS_HOME` ディレクトリーに配置します。
7. 以下のように **manageprofiles** コマンドを使用して、`ctgAppSrv01` プロファイルを作成します。

```
WAS_HOME/bin/manageprofiles.[sh|bat]
-create
-templatePath WAS_HOME/profileTemplates/managed
-hostName yourfullyqualifiedhost
-profileName ctgAppSrv01
-profilePath WAS_HOME/profiles/ctgAppSrv01
-cellName ctgNodeCell01
-nodeName ctgNode01
-portsFile WAS_HOME/_portdef_AppSvr.props
-dmgrHost yourfullyqualifiedhost
-dmgrPort 8879
-isDefault
```

8. Java 8 を使用するように `ctgAppSrv01` プロファイルが構成されていることを確認します。

- a. 使用可能な Java JDK をリストして、Java 8 がシステムにインストールされていることを確認します。

```
WAS_HOME/bin>managesdk.[sh|bat]
-listAvailable
-verbose
```

- b. `ctgAppSrv01` に関連付けられている Java のバージョンをリストします。

```
WAS_HOME/bin/managesdk.[sh|bat]
-listEnabledProfile
-profileName ctgAppSrv01
-verbose
```

- c. 必要に応じて、`ctgAppSrv01` プロファイルで Java 8 を使用できるようにします。

```
WAS_HOME/bin>managesdk.[sh|bat]
-enableProfile
-profileName ctgAppSrv01
-sdkName 1.8_00
-enableServers
```

9. `ctgAppSrv01` ノードを開始します。

```
WAS_HOME/profiles/ctgAppSrv01/bin/startNode.[sh|bat]
```

10. サーバーを再始動します。

```
WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01/bin/stopManager.[sh|bat]
WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01/bin/startManager.[sh|bat]
WAS_HOME/profiles/ctgAppSrv01/bin/stopNode.[sh|bat]
WAS_HOME/profiles/ctgAppSrv01/bin/startNode.[sh|bat]
```

11. `firststeps.[sh|bat]` を開始して「インストール検査」オプションを選択し、サーバーが正常にインストールされ、始動されていることを確認します。

```
WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01/firststeps/firststeps.[sh|bat]
```

59 ページの『手動による WebSphere Application Server Network Deployment での Virtual Member Manager の構成』

一部のデプロイメント環境では、Maximo Asset Management を保護するために、Virtual Member Manager の手動構成が必要です。

パーシスタンス・ストアのデータ・ソースの手動での作成:

WebSphere Application Server Network Deployment を手動で構成することを選択した場合、Db2 データベースに JMS メッセージを保管するには、データ・ソースを作成する必要があります。

このタスクについて

WebSphere Application Server Network Deployment で Db2 データベースを使用して JMS メッセージを保管させるようにするオプションがあります。Db2 以外の製品の使用方法を含め、WebSphere Application Server Network Deployment メッセージの保管について詳しくは、http://www-01.ibm.com/support/knowledgecenter/SSLKT6/sslkt6_welcome.html を参照してください。

パーシスタンス・ストアのデータ・ソースを作成するには、以下のステップを実行します。

手順

1. データベース・サーバーをホストするサーバーで、システム・ユーザーおよびパスワードを作成します。例えばユーザー名を `mxsibusr`、パスワードを `mxsibusr` とします。
2. データベースを作成および構成します。
 - a. Db2 コントロール・センターを開きます。
 - b. ご使用のシステムの下にリストされているデータベース・フォルダーを参照します。
 - c. データベース・フォルダーを右クリックし、「データベースの作成」 > 「標準」を選択します。
 - d. デフォルト設定を使用して、`maxsibdb` という名前のデータベースを作成します。
 - e. データベースが作成されたら、`maxsibdb` データベースを展開し、「ユーザーおよびグループ・オブジェクト」を選択します。
 - f. 「DB ユーザー」を右クリックし、「追加」を選択します。
 - g. 「ユーザー」メニューで「`mxsibusr`」を選択します。
 - h. セキュリティー管理者権限を除くすべての権限を `mxsibusr` に付与します。
 - i. 「適用」をクリックします。
 - j. `maxsibdb` を右クリックして「接続」を選択することにより、`mxsibusr` ユーザーを使用してデータベースに接続できることを確認します。
3. WebSphere Application Server Network Deployment で J2C 認証データおよび JDBC プロバイダーを構成します。
 - a. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールを開き、ログインします。
 - b. 「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」の順に進みます。
 - c. 「認証」ヘッダーの下で、「**Java Authentication and Authorization Service**」 > 「**J2C 認証データ (J2C authentication data)**」をクリックします。
 - d. 「新規」をクリックします。

- e. ユーザー ID フォームの以下のフィールドに入力します。
- 別名 maxJaasAlias
- ユーザー ID
mxsibusr
- パスワード
mxsibusr 用に作成したパスワード。
- 説明 SIB データベース・ユーザーの別名。
- f. 「適用」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
- g. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「リソース」 > 「JDBC」 > 「JDBC プロバイダー」の順に進みます。
- h. 「スコープ」の下にある「すべての有効範囲オプションがある「有効範囲選択」ドロップダウン・リストを表示」をクリックして「Cell=ctgCell01」を選択し、「設定」の下にある「適用」をクリックします。
- i. 「新規」をクリックします。
- j. 以下の値を指定して、「適用」をクリックします。
- データベース・タイプ
DB2
- プロバイダー・タイプ
DB2 Universal JDBC Driver Provider
- インプリメンテーション・タイプ
XA データ・ソース
- 名前 **maxJdbcProvider**
- k. 「次へ」をクリックします。
- l. WebSphere Application Server 変数
\${DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH} のフィールドに
<WAS_HOME>ctgMX¥lib の値を入力します。例えば、C:¥Program
Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥ctgMX¥lib と入力します。
- m. 「次へ」をクリックします。
- n. 「終了」をクリックします。
- o. 「保存」をクリックします。
4. コマンド・プロンプトを開き、<DB2_HOME>/java/db2jcc.jar および
<DB2_HOME>/java/db2jcc_license_cu.jar を <WAS_HOME>¥ctgMX¥lib ディレクト
リーにコピーします。「リソース」 > 「JDBC」 > 「JDBC プロバイダー
(JDBC Providers)」 > 「maxJdbcProvider」に戻り、db2jcc.jar および
db2jcc_license_cu.jar の両方で必要な場合は、クラスパスを訂正します。各
JAR ファイルで \${DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH} の絶対パスが使用
されるようにしてください。
5. 以下のように、WebSphere Application Server を構成します。
- a. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、
「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」の順に進みます。

- b. 「スコープ」の下にある「すべての有効範囲オプションがある「有効範囲選択」ドロップダウン・リストを表示」をクリックして「**Cell=ctgCell01**」を選択し、「設定」の下にある「適用」をクリックします。
 - c. 「新規」をクリックします。
 - d. 以下の値を指定します。
 - データ・ソース名
intjmsds
 - JNDI 名
jdbc/intjmsds
 - e. 「コンポーネント管理認証別名と XA リカバリーの認証別名 (Component-managed authentication alias and XA recovery authentication alias)」メニューで、**maxJaasAlias** を選択します。
 - f. 「次へ」をクリックします。
 - g. 「既存の JDBC プロバイダーを選択 (Select an existing JDBC provider)」を選択し、メニューから「**maxJdbcProvider**」を選択します。
 - h. 「次へ」をクリックします。
 - i. 以下の値を指定します。
 - データベース名
maxsibdb
 - ドライバー・タイプ
4
 - サーバー名
Db2 サーバーのホスト名を指定します。
 - ポート番号
Db2 のポート番号を指定します。例えば、**50005** とします。
 - j. 「コンテナ管理パーシスタンス (CMP) でこのデータ・ソースを使用 (Use this data source in container managed persistence (CMP))」オプションが選択されていることを確認して、「次へ」をクリックします。
 - k. 「終了」をクリックします。
 - l. 「保存」をクリックします。
6. 「**intjmsds**」を選択してから「接続のテスト」をクリックして、データ・ソースを検証します。

WebSphere Application Server Network Deployment の構成タスクの実行:

この手順に従って、WebSphere Application Server Network Deployment の構成タスクを実行します。

このタスクについて

Maximo Asset Management ミドルウェアを Maximo Asset Management で使用するように手動で構成することを選択する場合は、WebSphere Application Server Network Deployment を手動で構成する必要があります。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment のデプロイメント・マネージャー・ホストから Maximo Asset Management 管理システムの一時的ディレクトリー (Maximo Asset Management をインストールする以下のディレクトリー) に、鍵ストア・ファイルを手動でコピーします。
`WAS_HOME/profiles/ctgDmgr01/etc/trust.p12`
2. ブラウザーを開き、ブラウザーのアドレス・バーに `http://server_name:9060/admin` と入力して管理コンソールにアクセスします。この URL アドレスは、管理コンソールのデフォルトのポート番号 (9060) およびコンテキスト (`admin`) を表しています。ログインするユーザー名を入力します。ブラウザーはセキュア・ポート (9043) にリダイレクトされます。
3. MXServer アプリケーション・サーバーを作成します。
 - a. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」と展開します。
 - b. 「新規」をクリックします。
 - c. MXServer と入力して、「次へ」をクリックします。
 - d. すべてのデフォルト設定を受け入れ、「次へ」をクリックします。
 - e. デフォルト設定を受け入れ、「次へ」をクリックします。
 - f. 「終了」をクリックします。
 - g. 「設定」をクリックします。
 - h. 「ノードと変更を同期化」チェック・ボックスを選択してから、「適用」をクリックします。
 - i. 「保存」をクリックします。
 - j. 「OK」をクリックします。



図 4. 手動によるアプリケーション・サーバーの作成

4. アプリケーション・サーバーの「JVM メモリー設定 (JVM Memory Settings)」および「JVM 引数」を編集します。
 - a. メイン・ウィンドウで「MXServer」をクリックします。

- b. 「サーバー・インフラストラクチャー」グループから、「Java およびプロセス管理 (**Java and Process Management**)」リンクを展開します。
- c. 「プロセス定義」をクリックします。
- d. 「Java 仮想マシン」をクリックします。
- e. 「初期ヒープ・サイズ」および「最大ヒープ・サイズ」で、これらの値を 4096 に設定します。
- f. 「汎用 JVM 引数」フィールドに以下の値を入力します。各引数の間にはスペースを入れてください。

```
-Dsun.rmi.dgc.ackTimeout=10000
-Djava.net.preferIPv4Stack=true # for Windows
-Xdisableexplicitgc
-Xgcpolicy:gencon
-Xmn1024m # Xmn1024m for 64-bit JVM
-Xlp64k # AIX
```

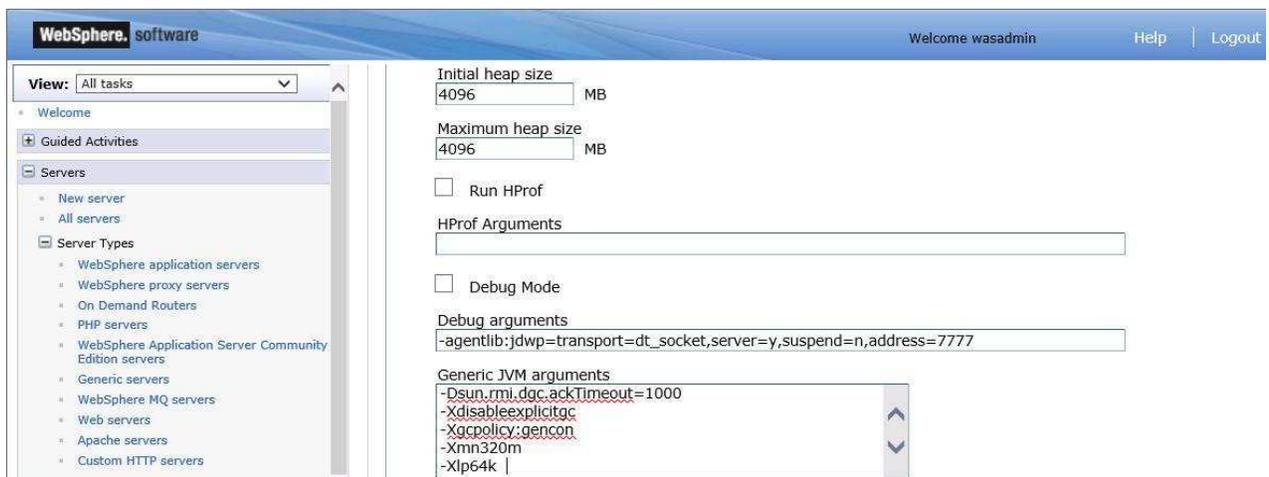


図 5. 手動によるアプリケーション・サーバーの作成

- g. 「OK」をクリックします。
 - h. メッセージ・ボックスの「保存」をクリックします。
5. アプリケーション・サーバーのスレッド・プール設定を編集します。
 - a. 「WebSphere Application Server」パネルから「MXServer」をクリックします。
 - b. 「追加プロパティ」グループから「スレッド・プール」をクリックします。
 - c. 「デフォルト」をクリックします。「最小サイズ」を 20 に設定します。「最大サイズ」を 50 に設定します。「スレッドの非アクティブ・タイムアウト」を 30000 に設定します。「OK」をクリックします。
 - d. 「TCPChannel.DCS」をクリックします。「最小サイズ」を 5 に設定します。「最大サイズ」を 20 に設定します。「スレッドの非アクティブ・タイムアウト」を 5000 に設定します。「OK」をクリックします。
 - e. 「WebContainer」をクリックします。「最小サイズ」を 50 に設定します。「最大サイズ」を 50 に設定します。「スレッドの非アクティブ・タイムアウト」を 30000 に設定します。「OK」をクリックします。

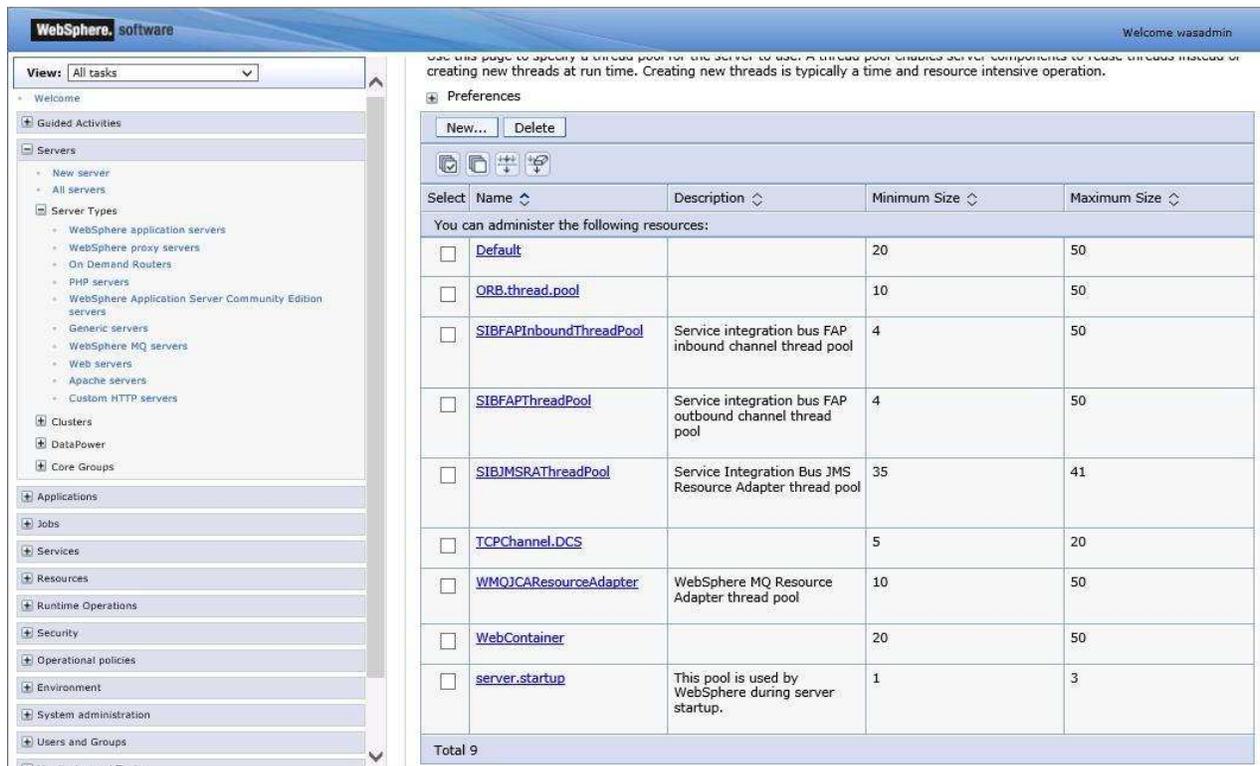


図 6. アプリケーション・サーバーのスレッド・プール設定の編集

6. デプロイメント・マネージャーの「JVM メモリー設定 (JVM Memory Settings)」を編集します。
 - a. 「システム管理」から「デプロイメント・マネージャー」をクリックします。
 - b. 「サーバー・インフラストラクチャー」グループから、「Java およびプロセス管理 (Java and Process Management)」リンクを展開します。
 - c. 「プロセス定義」をクリックします。
 - d. 「Java 仮想マシン」をクリックします。
 - e. スクロールダウンし、「初期ヒープ・サイズ」に 1024 を、「最大ヒープ・サイズ」に 1024 を入力して、「OK」をクリックします。

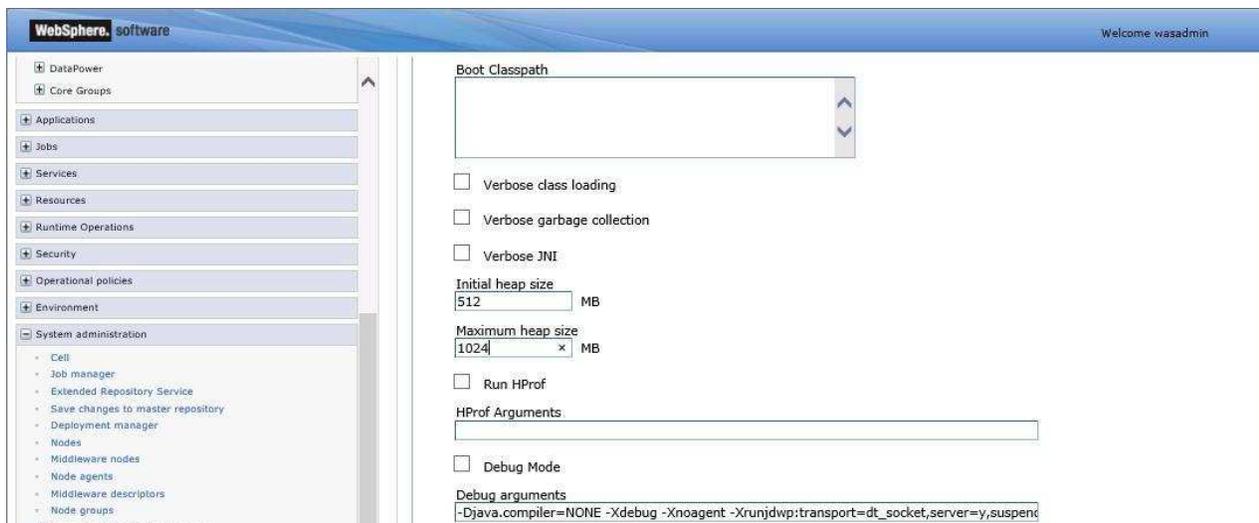


図 7. デプロイメント・マネージャーの「JVM メモリー設定 (JVM Memory Settings)」の編集

- f. メッセージ・ボックスの「保存」をクリックします。
7. アプリケーション・サーバーを始動します。
 - a. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」から、「アプリケーション・サーバー」をクリックします。
 - b. MXServer のチェック・ボックスを選択します。
 - c. 「開始」をクリックします。
8. HTTP 転送ポート番号を識別します。
 - a. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」と展開し、メイン・ウィンドウから「**MXServer**」をクリックします。
 - b. 「Web コンテナ設定 (Web Container Settings)」を開き、「**Web コンテナ・トランスポート・チェーン (Web container transport chains)**」をクリックします。
 - c. デフォルトのポート番号は WCInboundDefault (9080) で表示されることに注意してください。

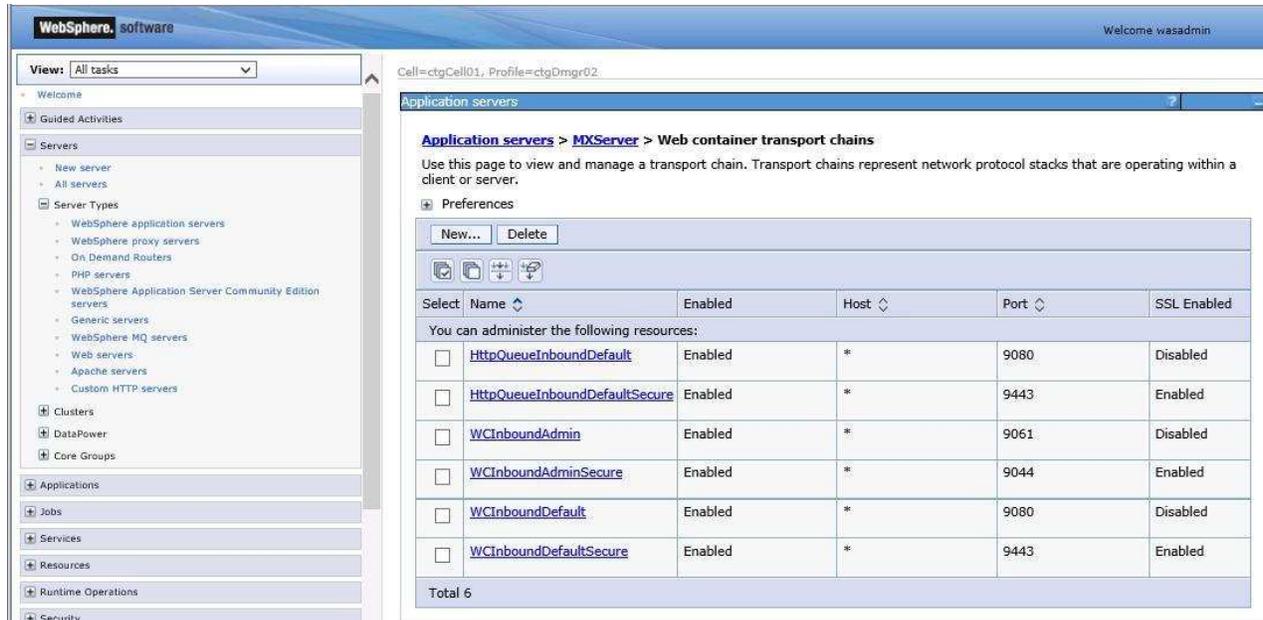


図 8. HTTP 転送ポート番号の識別

9. 仮想ホストを作成します。
 - a. 「環境」を展開します。
 - b. 「仮想ホスト」をクリックします。
 - c. 「新規」をクリックします。
 - d. 「一般プロパティ (General Properties)」セクションで、「名前」ボックスに `maximo_host` と入力します。
 - e. 「適用」をクリックします。
 - f. 「保存」をクリックします。
 - g. 「OK」をクリックします。
 - h. 「仮想ホスト」ウィンドウから「`maximo_host`」をクリックします。
 - i. 「ホスト別名」リンクをクリックします。
 - j. 「新規」をクリックします。
 - k. 「ホスト名」に * (アスタリスク) を入力し、HTTP ポート番号 (デフォルトでは 80) を入力します。
 - l. 「OK」をクリックします。
 - m. 「新規」をクリックします。
 - n. 「ホスト名」に * (アスタリスク) を入力し、ポート番号に 9061 を入力します。
 - o. 「OK」をクリックします。
 - p. 「新規」をクリックします。
 - q. 「ホスト名」に * (アスタリスク) を入力し、ポート番号に 9443 を入力します。
 - r. 「OK」をクリックします。
 - s. 「新規」をクリックします。

- t. 「ホスト名」に * (アスタリスク) を入力し、ポート番号に 9080 を入力します。
- u. 「OK」をクリックします。
- v. 「新規」をクリックします。
- w. 「ホスト名」に * (アスタリスク) を入力し、ポート番号に 9044 を入力します。
- x. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

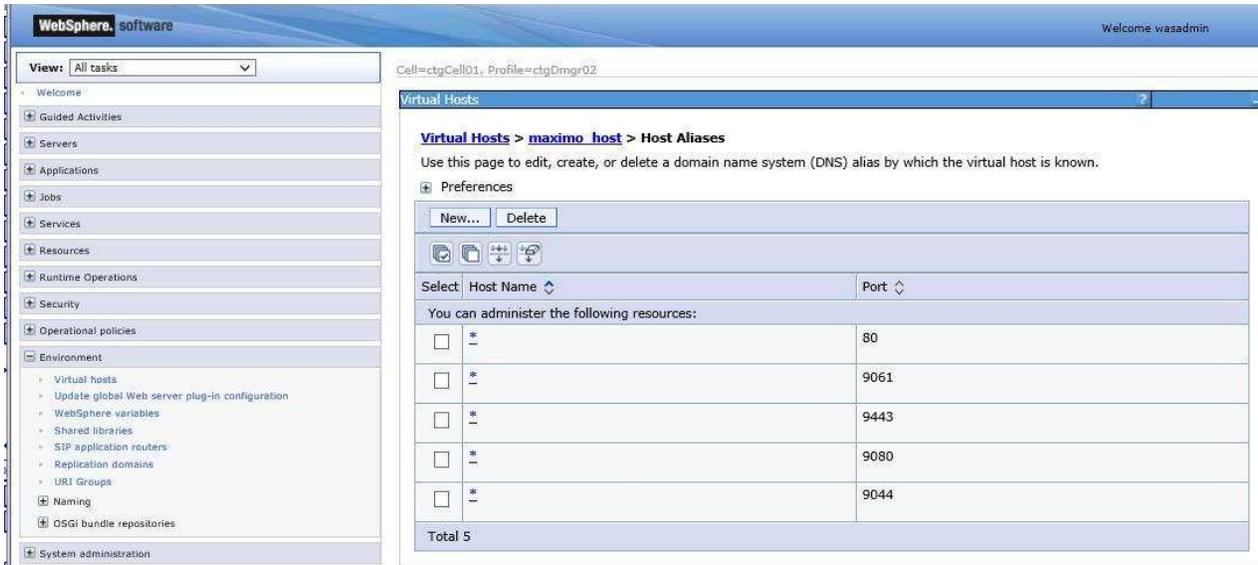


図 9. 仮想ホストの作成

10. ノード・エージェント始動時のアプリケーション・サーバーの自動始動を有効にします。
 - a. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」と展開します。
 - b. メイン・ウィンドウで「MXServer」をクリックします。
 - c. 「サーバー・インフラストラクチャー」グループから、「Java およびプロセス管理 (Java and Process Management)」を展開します。
 - d. 「モニター・ポリシー」をクリックします。
 - e. ノード再始動状態を「RUNNING」に変更して「OK」をクリックします。
 - f. メッセージ・ボックスの「保存」をクリックします。

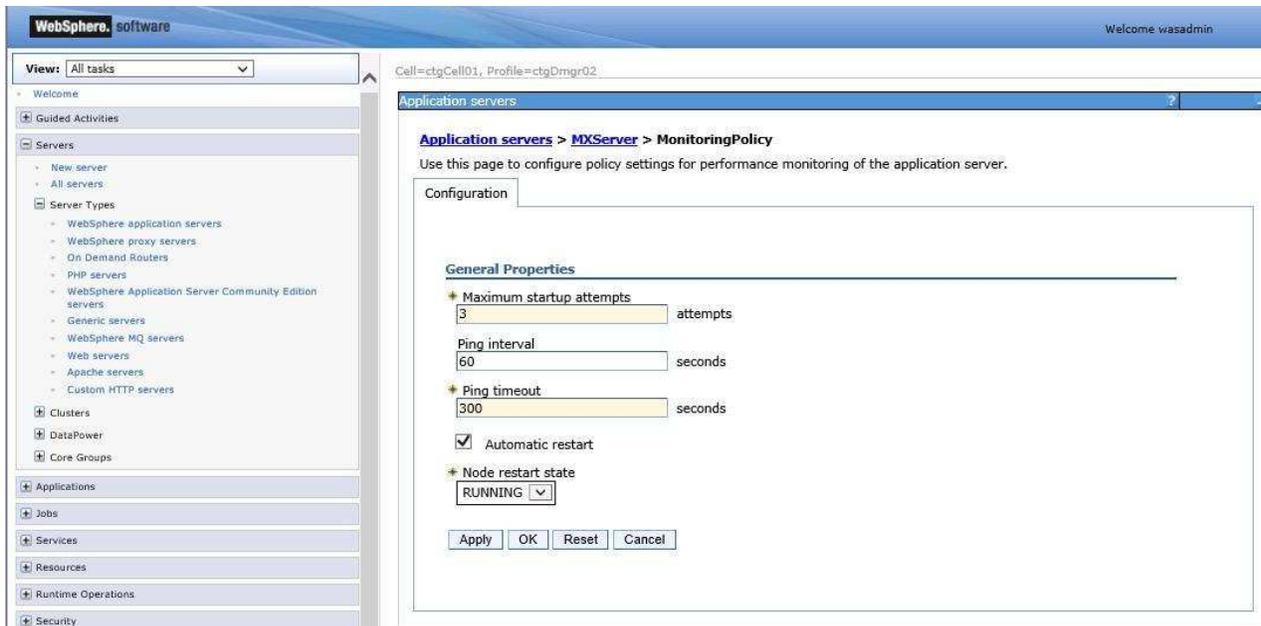


図 10. ノード・エージェント始動時のアプリケーション・サーバーの自動始動の有効化

ノード・エージェントに **Windows** サービスを作成:

WebSphere Application Server Network Deployment ノード・エージェントを開始するための Windows サービスを作成できます。

このタスクについて

必須ではありませんが、オプションで、ノード・エージェントを Windows サービスとして始動することができます。

ミドルウェアのインストール・プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment v7 をインストールした場合は、このステップはミドルウェアのインストール・プログラムにより既に実行済みです。

手順

1. コマンド・プロンプトを開きます。
2. ディレクトリーを <WAS_HOME>%bin に変更します。
3. 改行を挿入しないで以下のコマンドを入力します (大/小文字の区別がありません)。

```
WASService
-add NodeAgent
-serverName nodeagent
-profilePath "C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥profiles¥ctgAppSrv01"
-wasHome "C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer"
-logRoot "C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥profiles¥ctgAppSrv01¥logs¥nodeagent"
-logFile "C:¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥profiles¥ctgAppSrv01¥logs¥nodeagent¥startServer.log"
-restart true
```

4. コマンド・プロンプトを閉じます。

手動による JMS キューの構成:

この手順では、JMS キューを構成するステップについて詳しく説明します。この手順は、製品インストール・プログラムを使用する前に完了しておく必要があります。

このタスクについて

インストール・プロセス中に、Maximo Asset Management インストール・プログラムによって、Maximo Asset Management ミドルウェアの自動構成オプションが提供されます。Maximo Asset Management インストール・プログラムによる Maximo Asset Management ミドルウェアの自動構成を選択した場合は、JMS メッセージ・キューが作成されて構成されます。Maximo Asset Management ミドルウェアを Maximo Asset Management で使用するように入力して構成することを選択した場合は、これらのメッセージ・キューを手動で構成する必要があります。

JMS キューを構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment アプリケーション・サーバーを始動します。
2. Internet Explorer を開始し、以下の URL を入力して WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールを開きます。
`http://<server_name>:<port_number>/ibm/console`
例えば、以下の URL 例のような URL を入力します。
`http://localhost:9060/ibm/console`
3. ログイン画面でユーザー ID を入力し、「ログイン」をクリックします。このアクションによって、WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールの「ようこそ」画面が開きます。
4. 「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。バスとは、バスのメンバーとして追加された、相互に接続されたサーバーとクラスターのグループです。
5. 「新規」をクリックして、新規サービス統合バスを追加可能な「新規サービス統合バスを作成する」パネルを開きます。
6. 「名前」フィールドに、新規バスの名前として `intjmsbus` を入力します。
7. 「バス・セキュリティー」チェック・ボックスをクリアします。このボックスを選択したままにすると、`intjmsbus` は、セルのグローバル・セキュリティー設定を継承します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「終了」をクリックします。
10. 「保存」をクリックします。このステップによって、JMS バス・セットアップがクラスター構成に伝搬されます。

サービス統合バスへのサーバーの追加:

サービス統合バスのサーバーを定義する必要があります。

このタスクについて

サーバーをサービス統合バスに追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. 「**intjmsbus**」をクリックし、「バス」 > 「**intjmsbus**」ダイアログ・ボックスを開きます。
3. 「トポロジー」の下「バス・メンバー」をクリックします。
4. 「バス」 > 「**intjmsbus**」 > 「バス・メンバー」ダイアログ・ボックスで「追加」をクリックして、「新規バス・メンバーの追加」ダイアログ・ボックスを開きます。
5. 「サーバー」オプションをクリックし、バスに追加するサーバー名「**ctgNode01:MXServer**」を選択して、「次へ」を選択します。
6. 「ファイル・ストア (**File store**)」ラジオ・ボタンが選択されていることを確認してから、「次へ」をクリックします。
7. 「ファイル・ストアの構成 (Configure file store)」パネルから「次へ」をクリックします。
8. 「アプリケーション・サーバーでのメッセージング・パフォーマンスの調整 (Tune application server for messaging performance)」パネルで、「次へ」をクリックします。
9. 「終了」をクリックします。
10. 「保存」をクリックします。
11. 「**intjmsbus**」を選択します。
12. 「デフォルト・メッセージング・エンジンのメッセージ上限しきい値 (**Default messaging engine high message threshold**)」フィールドの値を、最小値である 500,000 メッセージに変更してから、「適用」をクリックします。

処理を待機しているメッセージの数が、設定した「メッセージ上限しきい値 (High Message Threshold)」を超えると、アプリケーション・サーバーは、処理キューへの新規メッセージの追加を制限します。

メッセージの要件に応じて、より大きい値をメッセージしきい値に入力しても構いません。キューへのメッセージの出入り、およびメッセージしきい値設定がシステム・パフォーマンスに与える影響をモニターすることによって、最適なメッセージしきい値設定を決めることができます。例えば、大きい値を設定したときにシステム・パフォーマンスが低下した場合は、しきい値を小さい値に設定することができます。

初期構成後に「メッセージ上限しきい値 (High message threshold)」設定を変更する場合は、管理コンソールで「追加プロパティー (Additional Properties)」メニューを開き、それぞれの下位階層構成のしきい値を変更する必要があります。

13. 「保存」をクリックします。

継続インバウンドのサービス統合バス宛先 (CQINBD) キューの作成:

継続インバウンドのサービス統合バス宛先 (CQINBD) キューを作成する必要があります。

このタスクについて

JMS バス内の継続インバウンド・バス宛先キュー (CQINBD) の論理アドレスを追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. 「intjmsbus」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」ダイアログ・ボックスを開きます。
3. 宛先リソースの下の「宛先」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」ダイアログ・ボックスを開きます。

CQINBD などのバス宛先は、アプリケーションがメッセージの添付と交換を行うことができる、サービス統合バス内の仮想の場所です。

4. 「新規」をクリックし、「新規宛先の作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
5. 宛先タイプとして「キュー」にチェック・マークを付けたままにし、「次へ」をクリックして「新規キューの作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
6. 「ID」フィールドに「CQINBD」、「説明」フィールドに「継続キュー・インバウンド」と入力して「次へ」をクリックし、「point-to-point メッセージの新規キューを作成します」ダイアログ・ボックスを開きます。
7. 「バス・メンバー」プルダウンを選択し、CQINBD バス宛先キューのメッセージを保存および処理するバス・メンバーとして「Node=ctgNode01:Server=MXServer」を選択します。
8. 「次へ」をクリックし、「キュー作成の確認」ダイアログ・ボックスを開きます。
9. 選択内容を確認してから「終了」をクリックし、CQINBD バス宛先キューの作成を完了します。
10. バス「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」の順にナビゲートして「CQINBD」をクリックし、構成ダイアログ・ボックスを開きます。
11. 「例外宛先」の値として、「なし」をクリックします。
12. 「1 メッセージ当たりの配信失敗数を数え続ける (Keep count of failed deliveries per message)」が有効になっていることを確認します。
13. 「適用」をクリックします。
14. 「保存」をクリックします。

順次インバウンドのサービス統合バス宛先 (SQINBD) キューの作成:

順次インバウンドのサービス統合バス宛先 (SQINBD) キューを作成する必要があります。

このタスクについて

サービス統合バス内の順次インバウンド・バス宛先キュー (SQINBD) の論理アドレスを追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. 「intjmsbus」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」ダイアログ・ボックスを開きます。
3. 宛先リソースの下の「宛先」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」ダイアログ・ボックスを開きます。バスの宛先は、アプリケーションがメッセージの添付と交換を行うことができる、サービス統合バス内の仮想の場所です。
4. 「新規」をクリックし、「新規宛先の作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
5. 宛先タイプとして「キュー」にチェック・マークを付けたままにし、「次へ」をクリックして「新規キューの作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
6. 「ID」フィールドに「SQINBD」、「説明」フィールドに「順次キュー・インバウンド」と入力して「次へ」をクリックし、「point-to-point メッセージの新規キューを作成します」ダイアログ・ボックスを開きます。この値を使用する必要がある、値に含まれるのは大文字のみでなければなりません。
7. 「バス・メンバー」プルダウンを選択し、「Node=ctgNode01:Server=MXServer」を選択します。
8. 「次へ」をクリックし、「キュー作成の確認」ダイアログ・ボックスを開きます。
9. 選択内容を確認してから「終了」をクリックし、SQINBD バス宛先キューの作成を完了します。
10. バス「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」の順にナビゲートして「SQINBD」をクリックし、構成ダイアログ・ボックスを開きます。
11. 「例外宛先」の値として、「なし」をクリックします。
12. 「1 メッセージ当たりの配信失敗数を数え続ける (Keep count of failed deliveries per message)」が有効になっていることを確認します。
13. 「適用」をクリックします。
14. 「保存」をクリックします。

順次アウトバウンドのサービス統合バス宛先 (SQOUTBD) キューの作成:

順次アウトバウンドのサービス統合バス宛先 (SQOUTBD) キューを作成する必要があります。

このタスクについて

サービス統合バス内の順次アウトバウンド・バス宛先キュー (SQOUTBD) の論理アドレスを追加するには、以下のステップを実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. 「**intjmsbus**」をクリックし、「バス」 > 「**intjmsbus**」ダイアログ・ボックスを開きます。
3. 宛先リソースの下の「宛先」をクリックし、「バス」 > 「**intjmsbus**」 > 「宛先」ダイアログ・ボックスを開きます。SQOUTBD などのバス宛先は、アプリケーションがメッセージの添付と交換を行うことができる、サービス統合バス内の仮想の場所です。
4. 「新規」をクリックし、「新規宛先の作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
5. 宛先タイプとして「キュー」にチェック・マークを付けたままにし、「次へ」をクリックして「新規キューの作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
6. 「ID」フィールドに「SQOUTBD」、「説明」フィールドに「順次キュー・アウトバウンド」と入力して「次へ」をクリックし、「point-to-point メッセージの新規キューを作成します」ダイアログ・ボックスを開きます。この値を使用する必要があり、値に含まれるのは大文字のみでなければなりません。
7. 「バス・メンバー」メニューを選択し、SQOUTBD バス宛先キューのメッセージを保存および処理するバス・メンバーとして「**Node=ctgNode01:Server=MXServer**」を選択します。
8. 「次へ」をクリックし、「キュー作成の確認」ダイアログ・ボックスを開きます。
9. 選択内容を確認してから「終了」をクリックし、キューの作成を完了します。
10. バス「バス」 > 「**intjmsbus**」 > 「宛先」の順にナビゲートして「**SQOUTBD**」をクリックし、構成ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで、以下の変更を行う必要があります。
11. 「例外宛先」の値として、「なし」をクリックします。
12. 「**1** メッセージ当たりの配信失敗数を数え続ける (**Keep count of failed deliveries per message**)」が有効になっていることを確認します。
13. 「適用」をクリックします。
14. 「保存」をクリックします。

JMS 接続ファクトリーの作成:

Point-to-Point メッセージング・キューの関連 JMS プロバイダーへの接続を作成するための接続ファクトリーを追加します。

このタスクについて

JMS 接続ファクトリーを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「**JMS**」 > 「接続ファクトリー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「**Cell=ctgCell01**」を選択します。

3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力します。

名前 intjmsconfact と入力します。

JNDI 名

jms/maximo/int/cf/intcf と入力します。

バス名

「intjmsbus」を選択します。

6. 「適用」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

継続インバウンド (CQIN) JMS キューの作成:

継続インバウンド Point-to-Point メッセージの宛先として、JMS キュー (CQIN) を作成する必要があります。

このタスクについて

CQIN JMS キューを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 CQIN と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名

jms/maximo/int/queues/cqin と入力します。

バス名

「intjmsbus」を選択します。

キュー名

「CQINBD」を選択します。

6. 「OK」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

順次インバウンド (SQIN) JMS キューの作成:

順次インバウンド Point-to-Point メッセージの宛先として、JMS キュー (SQIN) を作成する必要があります。

このタスクについて

SQIN JMS キューを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 SQIN と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名

jms/maximo/int/queues/sqin と入力します。

バス名

「intjmsbus」を選択します。

キュー名

「SQINBD」を選択します。

6. 「OK」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

順次アウトバウンド (SQOUT) JMS キューの作成:

順次アウトバウンド Point-to-Point メッセージの宛先として、JMS キュー (SQOUT) を作成する必要があります。

このタスクについて

SQOUT JMS キューを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」が選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 SQOUT と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名

jms/maximo/int/queues/sqout と入力します。

バス名

「**intjmsbus**」を選択します。

キュー名

「**SQOUTBD**」を選択します。

6. 「**OK**」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

継続インバウンド・キュー (CQIN) 用の **JMS** 活動化仕様の作成:

継続インバウンド・キュー (CQIN) でメッセージを受信するには、まず活動化する必要があります。

このタスクについて

CQIN キューを活動化するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「**JMS**」 > 「アクティベーション・スペック」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「**Cell=ctgCell01**」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」を選択し、「**OK**」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「**OK**」をクリックします。

名前 intjmsact

この値は大文字小文字が区別されます。この値は小文字である必要があります。

JNDI 名

intjmsact

宛先タイプ

キュー

宛先 **JNDI** 名

jms/maximo/int/queues/cqin

バス名

intjmsbus

エンドポイントごとの **MDB** の最大並行呼び出し数

10

6. 「**OK**」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

エラー・キュー:

継続中のキュー (CQIN) からリダイレクトされるメッセージを受け取るエラー・キューを作成する必要があります。

メッセージにエラーが発生したときに、継続中のキュー (CQIN) からリダイレクトされるメッセージをエラー・キューで受け取ります。

インバウンド・エラー・キュー (CQINERRBD) のサービス統合バス宛先の作成:

JMS バス内のインバウンド・エラー・キュー (CQINERRBD) キューの論理アドレスを追加する必要があります。

このタスクについて

以下のステップを実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
2. 「intjmsbus」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」ダイアログ・ボックスを開きます。
3. 宛先リソースの下の「宛先」をクリックし、「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」ダイアログ・ボックスを開きます。バスの宛先は、アプリケーションがメッセージの添付と交換を行うことができる、サービス統合バス内の仮想の場所です。
4. 「新規」をクリックし、「新規宛先の作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
5. 宛先タイプとして「キュー」にチェック・マークを付けたままにし、「次へ」をクリックして「新規キューの作成」ダイアログ・ボックスを開きます。
6. 「ID」フィールドに CQINERRBD と入力し、「説明」フィールドに「エラー・キュー・インバウンド」と入力して、「次へ」をクリックし、「point-to-point メッセージの新規キューを作成します」ダイアログ・ボックスを開きます。この値を使用する必要があります、値に含まれるのは大文字のみでなければなりません。
7. 「バス・メンバー」メニューから、「Node=ctgNode01:Server=MXServer」を選択します。
8. 「次へ」をクリックし、「キュー作成の確認」ダイアログ・ボックスを開きます。
9. 選択項目を確認し、「終了」をクリックして、CQINERRBD バス宛先キューを作成します。
10. 「バス」 > 「intjmsbus」 > 「宛先」の順に選択して「CQINERRBD」をクリックし、構成ダイアログ・ボックスを開きます。ここでは、以下の変更を行う必要があります。
 - a. 「指定」オプションを選択し、「例外宛先」の値として「CQINERRBD」と入力します。
 - b. 「最大デリバリー失敗数」の値を 5 に変更します。

このオプションは、メッセージを例外宛先に転送する前に最大何回メッセージング試行が失敗することができるかを示します。

- c. 「1 メッセージ当たりの配信失敗数を数え続ける (**Keep count of failed deliveries per message**)」が有効になっていることを確認します。
11. 「適用」をクリックします。
12. 「保存」をクリックします。
13. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「サービス統合」 > 「バス」をクリックし、「バス」ダイアログ・ボックスを開きます。
14. 「**intjmsbus**」をクリックし、「バス」 > 「**intjmsbus**」ダイアログ・ボックスを開きます。
15. 宛先リソースの下「宛先」をクリックし、「バス」 > 「**intjmsbus**」 > 「宛先」ダイアログ・ボックスを開きます。
16. 「**CQINBD**」を選択します。
17. 例外宛先として **CQINERRBD** を指定します。「最大デリバリー失敗数」の値を 5 に設定します。
18. 「**OK**」をクリックします。
19. 「保存」をクリックします。

エラー (**CQINERR**) **JMS** キューの作成:

エラー・キュー・バス宛先を作成したら、エラー・キューを作成します。

このタスクについて

エラー **JMS** キューを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「**JMS**」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「**Cell=ctgCell01**」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. 「デフォルトのメッセージング・プロバイダー」が選択されていることを確認し、「**OK**」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「**OK**」をクリックします。

名前 **CQINERR** と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名

jms/maximo/int/queues/cqinerr と入力します。

バス名

「**intjmsbus**」を選択します。

キュー名

「**CQINERRBD**」を選択します。

6. 「**OK**」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

インバウンド・エラー・キュー (CQINERR) 用の JMS 活動化仕様の作成:

継続インバウンド・キュー (CQINERR) でメッセージを受信するには、まず活動化する必要があります。

このタスクについて

CQINERR キューを活動化するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「アクティベーション・スペック」をクリックします。
2. 「スコープ」メニューから、「Cell=ctgCell01」を選択し、「適用」をクリックします。
3. 「新規」をクリックし、新規 JMS アクティベーション・スペックの「一般プロパティ」セクションに情報を入力します。
4. 「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 intjmsacterr と入力します。

この値は、小文字のみで入力する必要があります。

JNDI 名

intjmsacterr と入力します。

この値は、「名前」フィールドに使用した値と同じでなければなりません。

宛先タイプ

Queue と入力します。

宛先 JNDI 名

jms/maximo/int/queues/cqinerr

バス名

intjmsbus

エンドポイントごとの MDB の最大並行呼び出し数

10

6. 「OK」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。
8. すべての IBM 関連プロセスおよびデーモンが停止していることを確認します。
9. 更新を有効にするには、これらのプロセスを再始動する必要があります。
10. ctgNode MXServer intjmsbus のバス・メンバーが開始されていなければ開始します。 ctgNode MXServer intjmsbus を開始できない場合は、「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」の下の MXServer を再始動します。

手動による WebSphere Application Server Network Deployment での Virtual Member Manager の構成:

一部のデプロイメント環境では、Maximo Asset Management を保護するために、Virtual Member Manager の手動構成が必要です。

始める前に

Maximo Asset Management のセキュリティー・オプションを調べる場合は、セキュリティー計画情報を参照してください。

重要: この手順を開始する前に、LDAP リポジトリ内に wasadmin ユーザー ID を作成しておく必要があります。

フェデレーテッド LDAP リポジトリとの接続に SSL を使用するように Virtual Member Manager を構成する場合は、必ず Maximo Asset Management が正常にインストールおよび構成された後で実行してください。Maximo Asset Management の構成が完了する前に統合 LDAP リポジトリとの接続に SSL を使用するように Virtual Member Manager が構成されると、構成が失敗します。Maximo Asset Management を構成する前に、LDAP ディレクトリーとの接続に SSL を使用するように Virtual Member Manager LDAP 統合リポジトリを構成しないでください。Maximo Asset Management 構成プログラムが正常に完了した後で SSL を構成してください。

このタスクについて

構成プロセス中に、Maximo Asset Management 構成プログラムによって、Maximo Asset Management ミドルウェアを自動構成するオプションが提供されました。Maximo Asset Management 構成プログラムにより自動的に Maximo Asset Management ミドルウェアを構成するように選択した場合は、他のタスクと共に、Virtual Member Manager 構成が実行されます。Maximo Asset Management ミドルウェアを Maximo Asset Management で使用するように手動で構成することを選択した場合は、Virtual Member Manager を手動で構成する必要があります。

Virtual Member Manager を使用すると、複数のリポジトリ内のユーザー・データにアクセスし、保守することができます。また、このデータを 1 つの仮想リポジトリに統合することもできます。統合リポジトリは、独立したユーザー・リポジトリのセットである単一の名前付きレルムで構成されています。各リポジトリは、全体が外部リポジトリになっているか、LDAP の場合は、外部リポジトリ内のサブツリーです。各リポジトリのルートは、統合リポジトリ内の基本エントリーにマップされています。ルートは、仮想レルムの階層ネーム・スペース内の開始点になります。

LDAP ディレクトリーを Virtual Member Manager 仮想リポジトリに追加するには、まず LDAP ディレクトリーを、統合リポジトリの構成で使用可能なリポジトリのリストに追加します。その後、baseEntries のルートを LDAP ディレクトリー内の検索ベースに追加する必要があります。複数の基本エントリーを、1 つの LDAP ディレクトリー用のさまざまな検索ベースと共に追加できます。

ここで示す値は例に過ぎません。IBM Security Directory Server を使用する場合は、IBM Security Directory Server のインストールおよび構成中に使用した値を入

力してください。Microsoft Active Directory を使用するよう Virtual Member Manager を構成する場合、この手順では必要に応じて値を置き換えてください。それに応じて VMMSYNC クーロン・タスクを変更する必要があります。

IBM Security Directory Server または Microsoft Active Directory を VMM に追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment アプリケーション・サーバーを始動します。
2. Internet Explorer を開始し、以下の URL を入力して WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールを開きます。
http://<server_name>:<port_number>/admin

例えば、以下の URL 例のような URL を入力します。
http://localhost:9060/admin
3. ログイン画面でユーザー ID を入力し、「ログイン」をクリックします。このアクションによって、WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールの「ようこそ」画面が開きます。
4. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」を選択します。
5. 「ユーザー・アカウント・リポジトリ」領域を見つけて、「使用可能なレルム定義」フィールドから「統合リポジトリ」を選択し、「構成」をクリックします。
6. 「レルム内のリポジトリ (Repositories in the realm)」の下にある「リポジトリの追加 (Add repositories)」をクリックします。
7. 「新規リポジトリ (New repository)」 > 「LDAP リポジトリ (LDAP repository)」をクリックして、現在のデフォルト・レルムの下に新しいリポジトリ定義を作成します。
8. 以下の値を入力し、「適用」をクリックしてから「保存」をクリックします。

リポジトリ ID

IBM Security Directory Server の場合は、ISMITDS と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、ISMMSAD と入力します。

ディレクトリー・タイプ

IBM Security Directory Server の場合は、IBM Tivoli Directory Server を選択します。

Microsoft Active Directory の場合は、Microsoft Windows Server 2012 Active Directory を選択します。

1 次ホスト名

ディレクトリー・サーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレスを入力します。

ポート

389 と入力します。

他の LDAP サーバーへの参照サポート

この値を ignore に設定します。

バインド識別名

IBM Security Directory Server の場合は、cn=root と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、

CN=Administrator,CN=Users,DC=ism76,DC=com と入力します。

バインド・パスワード

バインド識別名のパスワードを入力します。

証明書マッピング

「EXACT_DN」を選択します。



図 11. 新規リポジトリ

9. 以下の値を入力し、「適用」をクリックしてから「保存」をクリックします。

リポジトリ

IBM Security Directory Server の場合は、ISMITDS を選択します。

Microsoft Active Directory の場合は、ISMMSAD を選択します。

統合リポジトリ内のベース・エンタリー (または親エンタリー) の固有識別名
IBM Security Directory Server の場合は、ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、DC=ism76,DC=com と入力します。

リポジトリ内の識別名が異なる (Distinguished name in the repository is different)

この値はオプションです。追加先リポジトリ内のベース・エンタリーと異なっている場合は、この値を指定する必要があります。

IBM Security Directory Server の場合は、ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、DC=ism76,DC=com と入力します。

10. 「統合リポジトリ」構成領域で、以下の値を入力し、「適用」をクリックしてから「保存」をクリックします。

レルム名

ISMRealm と入力します。

1 次管理ユーザー名

wasadmin と入力します。この値は、構成済み LDAP リポジトリの有効なユーザーである必要があります。

サーバー・ユーザー ID

「自動的に生成されたサーバー ID」を選択します。

許可検査で大/小文字を区別しない

このチェック・ボックスを選択します。

11. 「サポートされるエンティティ・タイプ」をクリックし、「PersonAccount」をクリックします。
12. 「PersonAccount」構成領域で、以下の値を入力します。

エンティティ・タイプ

値が **PersonAccount** であることを確認します。

デフォルトの親のベース・エントリー

IBM Security Directory Server の場合は、
ou=users,ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、CN=Users,DC=ism76,DC=com と入力します。

相対識別名のプロパティ

uid と入力します。

13. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
14. 「サポートされるエンティティ・タイプ」をクリックし、「グループ」をクリックします。
15. 「グループ」構成領域で、以下の値を入力します。

エンティティ・タイプ

値が **Group** であることを確認します。

デフォルトの親のベース・エントリー

IBM Security Directory Server の場合は、
ou=groups,ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、
ou=groups,CN=Groups,DC=ism76,DC=com と入力します。

相対識別名のプロパティ

cn と入力します。

16. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
17. 「サポートされるエンティティ・タイプ」をクリックし、「OrgContainer」をクリックします。
18. 「OrgContainer」構成領域で、以下の値を入力するか確認します。

エンティティ・タイプ

値が **OrgContainer** であることを確認します。

デフォルトの親のベース・エントリー

IBM Security Directory Server の場合は、ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。

Microsoft Active Directory の場合は、DC=ism76,DC=com と入力します。

相対識別名のプロパティ

o;ou;dc;cn と入力します。

19. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
20. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」の順に進みます。
21. グローバル・セキュリティ構成ページから、以下の操作を実行します。
 - a. 「管理セキュリティを有効にする」を有効にします。
 - b. 「アプリケーション・セキュリティを使用可能にする」を有効にします。
 - c. 「Java 2 セキュリティを使用」をクリアして、アプリケーションのアクセス権をローカル・リソースに制限します。
 - d. 「使用可能なレルム定義」から、「統合リポジトリ」を選択します。
 - e. 「現行値として設定」をクリックします。
22. 「適用」をクリックし、次に「保存」をクリックします。
23. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Application Server Network Deployment および管理対象ノードを再始動します。
 - a. `<WAS_HOME>%profiles%ctgDmgr01%bin%stopManager.bat`
 - b. `<WAS_HOME>%profiles%ctgAppSrv01%bin%stopNode.bat`
 - c. `<WAS_HOME>%profiles%ctgDmgr01%bin%startManager.bat`
 - d. `<WAS_HOME>%profiles%ctgAppSrv01%bin%startNode.bat`

注: 必要に応じて UNIX パスおよびファイル拡張子の値を置換します。

40 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment の構成タスクの実行』

この手順に従って、WebSphere Application Server Network Deployment の構成タスクを実行します。

31 ページの『手動による Microsoft Active Directory バージョン 2012 の構成』

Microsoft Active Directory は、手動で構成して、Maximo Asset Management と組み合わせて使用できます。

Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールします。

始める前に

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、管理ワークステーション上の既存の Maximo Asset Management バージョンとは別の場所にインストールする必要があります。

このタスクについて

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールするために、Maximo Asset Management 管理システム上で Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行します。

手順

1. Maximo Asset Management 管理ワークステーションにログインします。IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを Linux または UNIX の端末ウィンドウから実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストール・セッションの言語を選択して、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」をクリックします。
 - c. 「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」パネルで、「**IBM Maximo Asset Management v7.6.1**」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (**Recheck Status**)」をクリックしてから続行します。
 5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。

7. パッケージのインストール場所のパネルで、IBM Tivoli の Process Automation Suite パッケージ・グループを選択し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・ディレクトリーのパス情報を指定してから「次へ」をクリックします。
8. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。英語以外の環境にインストールする場合、環境の概要が英語でリストされることがあります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 用のサポート言語を後で構成します。
9. インストールが完了したら、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムが終了し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムが自動的に開始されます。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 を構成します。

手動構成されたミドルウェアによる Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成

この手順では、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 を構成する方法について説明します。

手順

1. Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムが開いていない場合、Maximo Asset Management ランチパッドからこれを開始します。ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、Maximo Asset Management のインストールの場所を指定してから「**Tivoli** の **Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。
2. IBM Maximo Asset Management の構成操作ページで、「新規デプロイメントの構成」をクリックします。
3. 「デプロイメント環境の定義」パネルで、インストールして準備した Db2 サーバーおよび WebSphere Application Server Network Deployment サーバーに関する情報を指定します。「**WebSphere** は既に構成されています」オプションを選択します。デプロイメント環境を定義したら、「終了」をクリックします。
4. 「製品の一般情報の構成」パネルで、インストールする製品コンポーネントについての要約の詳細を検討します。製品の外観およびナビゲーション機能を指定し、ワークフロー・メッセージを受け取るための電子メール・アドレスを追加し、サンプル・データをデプロイするかどうかを選択します。
5. 「DB2 インスタンスの構成」パネルで、Maximo Asset Management 用の Db2 インスタンスに関する情報を指定します。
6. 「DB2 データベースの構成」パネルで、Maximo Asset Management 用の Db2 データベースに関する情報を指定します。

7. 「アプリケーション・サーバーの構成」パネルで、インストール済みの WebSphere Application Server Network Deployment サーバーについての情報を指定します。統合アダプターから作成される JMS メッセージを保管するかどうかを指示します。
8. 「アプリケーション・セキュリティの構成」パネルで、Maximo Asset Management のセキュリティ・モデルを選択します。ディレクトリー・サーバーを含むセキュリティ・モデルを選択する場合、Virtual Member Manager 用のディレクトリーに関する情報を指定します。Maximo Asset Management 用に作成する必要があるユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。
9. インストールする基本言語および追加言語を選択します。
10. 「デプロイメント操作の適用」パネルで、ユーザー・インターフェースの設定を指定し、使用可能なすべてのデプロイメント操作を選択してから、「終了」をクリックします。

タスクの結果

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、WebSphere Application Server Network Deployment および Db2 を使用するためにインストールおよび構成されました。

NOTF JMS キューの作成

通知用の JMS キュー NOTF を作成する必要があります。

このタスクについて

NOTF という名前の JMS キューを作成して、通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 NOTF。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名
jms/maximo/int/queues/notf

バス名
intjmsbus。

キュー名
CQINBD。

6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

NOTFERR JMS キューの作成

エラー・キュー・バス宛先を作成したら、通知エラー処理用の NOTFERR エラー・キューを作成します。

このタスクについて

NOTFERR という名前の JMS キューを作成して、通知エラー処理を有効にする必要があります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment を自動的に構成しない場合は、このキューを手動で作成する必要があります。

Maximo Asset Management マルチテナンシー環境の場合は、システム・プロバイダーが NOTF キューを手動で作成して、各テナントの通知を有効にする必要があります。Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、これらのキューを自動的に作成することはできません。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールで、「リソース」 > 「JMS」 > 「キュー」をクリックします。
2. 「スコープ」ドロップダウン・リストから、「Cell=ctgCell01」を選択します。
3. 「新規」をクリックします。
4. デフォルトのメッセージング・プロバイダーが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。
5. 以下の情報を入力して、「OK」をクリックします。

名前 NOTFERR と入力します。

この値には、大文字のみを含める必要があります。

JNDI 名
jms/maximo/int/queues/notferr と入力します。

バス名
「intjmsbus」を選択します。

キュー名
「CQINERRBD」を選択します。

6. 「OK」をクリックし、次に「保存」をクリックします。

第 5 章 UpdateDB Lite コマンドを使用したアプリケーション・データベースの更新

UpdateDB Lite は、Maximo Asset Management でのクラス・ファイルの準備およびデータベースの更新のタスクを分割します。

Maximo Asset Management 7.6.1 では、新規プログラムを使用して構成ステップを手動で実行することにより、ダウンタイムを最小限に抑えることができます。UpdateDB Lite プログラムによって実行されるタスク (製品クラス・ファイルの準備およびデータベースの更新) は、2 つの個別のコマンドに分割されます。これらのコマンドには、プリプロセッシングおよびポストプロセッシングが含まれます。

プリプロセッシング・タスクは、アプリケーション・サーバーを停止することなく、クラス・ファイルがアプリケーション EAR ファイルにビルドされる前にクラス・ファイルを準備します。updatedb コマンドもこの作業を実行できますが、このコマンドはアプリケーション・サーバーを停止します。

ポストプロセッシングでは、UpdateDB Lite はデータベースへの更新を実行できませんが、コマンドを実行する前にアプリケーション・サーバーを停止する必要があります。UpdateDB と UpdateDB Lite は、完全に同じパラメーターを使用します。

Maximo Asset Management 7.6.1 構成ツールは、UpdateDB を使用して、構成を完了します。

UpdateDB Lite を使用したデータベースの更新

UpdateDB Lite を使用してデータベースを更新すると、アプリケーション・ダウンタイムを短縮できます。

始める前に

Installation Manager を使用して Maximo Asset Management 7.6.1 をインストールします。Maximo Asset Management 構成ツールを使用して、データベースを更新したり、アプリケーション EAR ファイルをビルドおよびデプロイしたりしないでください。

手順

1. 構成ツールを開きます。
2. 「UpdateDB Lite 機能を使用したデータベースの更新 (Update Database with UpdateDB Lite Feature)」をクリックします。
3. アプリケーションのバージョンおよび現在の状態を確認します。
4. プリプロセッシング・オプションまたはポストプロセッシング・オプションの実行を選択し、「終了」をクリックします。

タスクの結果

ポストプロセッシング・オプションが選択された場合、Maximo アプリケーションは、データベースへの更新が完了するまで閉じます。

第 6 章 クラスター環境でのデプロイ

Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment クラスター構成で Maximo Asset Management をインストールし、自動的に構成します。

このタスクについて

このシナリオでは、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを使用して、クラスター構成で以下のコンポーネントの新規インスタンスをインストールし、自動的に構成します。

- Db2
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Maximo Asset Management

Maximo Asset Management インストール・プログラムを使用して、デプロイメントで使用する Maximo Asset Management およびミドルウェアをインストールします。その後、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、ミドルウェアと Maximo Asset Management の両方を構成します。

Db2 は、Maximo Asset Management インストール・プログラムを使用してインストールすることができます。その後、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、これを自動的に構成します。

タスクのロードマップを使用してミドルウェアを自動的に構成して、クラスター環境に Maximo Asset Management をデプロイできます。



図 12. 自動ミドルウェア構成を使用した *Maximo Asset Management* のデプロイ

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間の SSL の構成

Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment との間の通信で SSL を構成すると、Maximo Asset Management 構成プログラムでユーザーおよびグループをディレクトリー内に自動的に作成することができます。Maximo Asset Management の認証および許可にディレクトリー・サーバーを使用する予定の場合、ユーザーおよびグループをディレクトリー内に作成する必要があります。認証および許可に Maximo Asset Management アプリケーション・セキュリティーを使用する予定の場合、ディレクトリー・サーバーに対して SSL を構成する必要はありません。

このタスクについて

構成プログラムが Microsoft Active Directory 内に自動的にユーザーおよびグループを作成できるようにするには、Microsoft Active Directory と WebSphere Application Server Network Deployment の間で SSL 通信を構成する必要があります。この手順が必要になるのは、構成プログラムによる WebSphere Application Server Network Deployment の自動構成を選択する場合のみです。そして、構成プログラムによって、Microsoft Active Directory でユーザーを自動的に作成させるようにする場合です。

Microsoft Active Directory に対して SSL を有効にし、証明書を生成して、その証明書を WebSphere Application Server Network Deployment に追加する必要があります。

認証局の名前またはドメインをいずれかの時点で変更すると、その認証局から以前に発行された証明書は無効になります。

ご使用の環境でホスト・ネーム・レゾリューションが正しく設定されていることを確認してください。証明書が発行されたシステムのホスト名が Microsoft Active Directory をホスティングするシステムで解決されないと、通信障害が発生します。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用した Db2 v11.1 のインストール

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Db2 v11.1 をインストールします。

手順

1. ターゲット・システムに管理権限を持つユーザーとしてログインします。
Linux または UNIX の端末ウィンドウから IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストールする言語を選択し、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「**IBM Maximo Asset Management** のインストール」をクリックします。
 - c. 「IBM Maximo Asset Management のインストール」パネルで、「**IBM Db2 v11.1**」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (**Recheck Status**)」をクリックしてから続行します。
 5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリおよび Installation Manager インストール・ディレクトリのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、パッケージ・グループを選択し、インストール・ディレクトリのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ機能パネルで、すべてのデフォルト・オプションをチェックしたままにし、「次へ」をクリックします。
 9. パッケージ構成パネルで、Db2 v11.1 の構成情報を指定し、「次へ」をクリックします。
 10. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 Installation Manager を使用した WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 のインストール

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7 をインストールします。

手順

1. ターゲット・システムに管理権限を持つユーザーとしてログインします。
Linux または UNIX の端末ウィンドウから IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストールする言語を選択し、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「IBM Maximo Asset Management のインストール」をクリックします。
 - c. 「IBM Maximo Asset Management のインストール」パネルで、「IBM WebSphere Application Server Network Deployment v9.0.0.7」を選択し、「IBM Maximo Asset Management コンポーネントのインストール」をクリックします。WebSphere Application Server Network Deployment のインストール時に、Java v8 をインストールします。Java v8 をインストールすると、構成プログラムによって、Java v8 を使用するように IBM Maximo Asset Management が構成されます。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (Recheck Status)」をクリックしてから続行します。
 5. 「ライセンス契約」パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、パッケージ・グループを選択し、そのインストール・ディレクトリーのパス情報を指定します。リストされている各パッケージ・グループについて、この処理を繰り返して、「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ翻訳パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment のための言語サポートを指定し、「次へ」をクリックします。

9. パッケージ機能パネルで、すべてのデフォルト・オプションを選択したままにし、「次へ」をクリックします。
10. パッケージ構成パネルで、IBM HTTP Server の構成情報を指定し、「次へ」をクリックします。
11. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。
12. インストールが完了したら、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成のために WebSphere Application Server Network Deployment を準備します。

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した WebSphere Application Server Network Deployment の準備およびアプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルの構成

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 構成のために WebSphere Application Server Network Deployment v8.5 を準備すること、およびアプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルを構成することができます。

このタスクについて

クラスター環境に対して Maximo Asset Management を構成する場合、最初に WebSphere Application Server Network Deployment サーバーを準備し、アプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルを構成する必要があります。その後、定義済みクラスターで動作するように Maximo Asset Management を構成します。

WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーでクラスターを定義および構成する必要があります。クラスター構成に他の WebSphere Application Server Network Deployment ノードのメンバーを含める場合、サーバーにログオンし、Maximo Asset Management 構成プログラムを実行して、WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルおよびそれらのクラスター・メンバーをホストするノードを構成する必要があります。

パフォーマンス上の理由により、最低 4 つのクラスターのクラスターを定義し、各クラスターが単一のプロダクト機能をホストするようにすることをお勧めします。必要に応じて追加のクラスターを作成できます。パフォーマンスについて詳しくは、「Best Practices for System Performance」ガイドを参照してください。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャー・サーバーをホストするシステムにログオンします。

2. Maximo Asset Management ランチパッドから Maximo Asset Management 構成プログラムを開始します。 ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、「**Tivoli Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。
3. IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成操作ページで、「**WebSphere Application Server** の構成の準備」をクリックします。
4. 「WebSphere Application Server の構成」パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment および関連するコンポーネントのインストール場所および構成情報を指定します。 クラスターのシステムを構成するオプション、および IBM HTTP Server の構成を自動化するオプションを選択します。
5. 「アプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルの構成」パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーおよびアプリケーション・サーバーのプロファイルを作成するために使用する情報を指定します。
 - a. 「このサーバーで新規デプロイメント・マネージャーを構成する」を選択します。
 - b. デプロイメント・マネージャー・プロファイルのプロファイル名、ノード名、セル名、および SOAP ポートを指定します。
 - c. オプション: 「詳細」をクリックして「デプロイメント・マネージャー・プロファイルの詳細オプション (**Deployment Manager Profile Advanced Options**)」ページにアクセスします。ここで、デプロイメント・マネージャー・プロファイルで使用するカスタム・ポート値を割り当てることができます。
 - d. WebSphere Application Server Network Deployment 管理者ユーザーの資格情報を指定します。
 - e. 「新規クラスター」をクリックして、新規クラスターを作成します。名前を指定し、単一のプロダクト機能をクラスターに割り当てます。
 - f. 「新規管理対象ノード」をクリックして管理対象ノードを作成します。ノード名および新規管理対象ノードに関する情報を含むプロファイルの名前を指定します。 複数の管理対象ノードを作成できますが、定義する必要があるのは最低 1 つです。
 - g. 管理対象ノードを選択し、「新規サーバー」をクリックします。
 - h. 「**WebSphere** 管理対象ノード・サーバー定義」ページで、「**Web** サーバー」を選択し、管理対象ノードで使用する Web サーバーの名前を指定します。 1 つの管理対象ノードに対し 1 つの Web サーバーのみ定義できます。
 - i. 「新規サーバー」をクリックします。「**WebSphere** 管理対象ノード・サーバー定義」ページで「アプリケーション・サーバー・クラスター・メンバー」を選択します。クラスター・メンバーの名前を指定し、そのクラスター・メンバーと関連付けるクラスターを選択します。 必要な数だけクラスター・メンバーを作成できますが、必要なのは最低 1 つです。
 - j. このプロセスを繰り返して合計 4 つのクラスターを作成し、それぞれに固有のプロダクト機能を割り当てます。
6. 必要な場合、「アプリケーション・サーバーの詳細オプションの構成」パネルに追加の構成情報を指定します。

7. WebSphere Application Server Network Deployment 管理セキュリティーのためにディレクトリー・サーバーの使用を選択する場合、ディレクトリー・サーバー・ホスト、資格情報、およびディレクトリー構造に関する情報を「管理セキュリティーの構成」パネルから指定します。
8. 「デプロイメント操作の適用」パネルで、デプロイメント操作のすべてのオプションを選択してから、「終了」をクリックします。

タスクの結果

Maximo Asset Management のために WebSphere Application Server Network Deployment v8.5 の準備ができました。

関連情報:



<https://www.ibm.com/developerworks/community/files/form/anonymous/api/library/75dbdf46-1a08-429c-9742-bd340d7d1fd3/document/c51d5f5b-dea3-4043-a81f-d5213fc10063/media/Best%20Practices%20for%20System%20Performance%207.5.x.pdf>

追加 WebSphere Application Server Network Deployment ノードでのクラスター・メンバーの構成

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、追加 WebSphere ノードでクラスター・メンバーを構成できます。

このタスクについて

WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーでクラスターを定義した後、追加 WebSphere Application Server Network Deployment ノードでクラスター・メンバーを構成できます。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment ノードとして機能するシステムにログオンします。
2. Maximo Asset Management ランチパッドから Maximo Asset Management 構成プログラムを開始します。ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、「**Tivoli Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。
3. IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 の構成操作ページで、「新規デプロイメントのための **WebSphere Application Server Network Deployment** の構成 (Configure WebSphere Application Server Network Deployment for a new deployment)」をクリックします。
4. 「WebSphere Application Server の構成」パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment および関連するコンポーネントのインストール場所および構成情報を指定します。クラスターのシステムを構成するオプション、および IBM HTTP Server の構成を自動化するオプションを選択します。
5. 「アプリケーション・サーバー・クラスター・プロファイルの構成」パネルで、このノードで追加クラスター・メンバーを作成するために使用する情報を指定します。

- a. 「既存のデプロイメント・マネージャーを使用する」を選択します。
 - b. リモート WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャー・システムの接続情報を指定します。
 - c. WebSphere Application Server Network Deployment 管理者ユーザーの資格情報を指定します。
 - d. 「クラスターのロード」をクリックして、リモート WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーからクラスター情報をロードします。
 - e. 「新規管理対象ノード」をクリックして管理対象ノードを作成します。ノード名および新規管理対象ノードに関する情報を含むプロファイルの名前を指定します。複数の管理対象ノードを作成できますが、定義する必要があるのは最低 1 つです。
 - f. 管理対象ノードを選択し、「新規サーバー」をクリックします。
 - g. 「**WebSphere** 管理対象ノード・サーバー定義」ページで「アプリケーション・サーバー・クラスター・メンバー」を選択します。クラスター・メンバーの名前を指定し、そのクラスター・メンバーと関連付けるクラスターを選択します。必要な数だけクラスター・メンバーを作成できますが、必要なのは最低 1 つです。クラスターに対して新しい Web サーバーは作成できません。これは、リモート WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーでクラスターを作成したときに定義したためです。
 - h. このプロセスを繰り返して新しいクラスター・メンバーを作成し、それらをリモート WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーで定義されているクラスターに割り当てます。
6. 必要な場合、「アプリケーション・サーバーの詳細オプションの構成」パネルに追加の構成情報を指定します。
 7. 「デプロイメント操作の適用」パネルで、デプロイメント操作のすべてのオプションを選択してから、「終了」をクリックします。

Maximo Asset Management 7.6.1 インストール・プログラムの実行

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールします。

始める前に

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 は、管理ワークステーション上の既存の Maximo Asset Management バージョンとは別の場所にインストールする必要があります。

このタスクについて

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 をインストールするために、Maximo Asset Management 管理システム上で Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを実行します。

手順

1. Maximo Asset Management 管理ワークステーションにログインします。IBM Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムを Linux または UNIX の端末ウィンドウから実行する場合は、root ユーザーとしてログインする必要があります。
2. 以下のディレクトリーから Installation Manager を実行します。

オプション	説明
Windows	「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」
UNIX	/opt/IBM/InstallationManager/eclipse ディレクトリーで、 IBMIM コマンドを実行します。

- a. インストール・セッションの言語を選択して、「OK」をクリックします。
 - b. ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「IBM Maximo Asset Management のインストール」をクリックします。
 - c. 「IBM Maximo Asset Management のインストール」パネルで、「IBM Maximo Asset Management v7.6.1」を選択し、「インストール」をクリックします。
3. パッケージ選択パネルで、「次へ」をクリックします。
 4. パッケージ前提条件検証パネルで、前提条件チェックの結果を確認し、「次へ」をクリックします。このパネルにエラーが報告されている場合は、問題を解決し、「ステータスの再確認 (Recheck Status)」をクリックしてから続行します。
 5. ご使用条件パネルで、インストールされる各パッケージのライセンス情報を確認し、条件に同意する場合は「使用条件の条項に同意します」を選択して「次へ」をクリックします。
 6. Installation Manager のインストール場所のパネルで、共有リソース・ディレクトリーおよび Installation Manager インストール・ディレクトリーのパス情報を指定し、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 コンポーネントをインストールするために使用するインストール・フレームワークです。共有リソース・ディレクトリーは、パッケージをインストールするときに Installation Manager によって使用される共通のワークスペース・ディレクトリーです。
 7. パッケージのインストール場所のパネルで、IBM Tivoli の Process Automation Suite パッケージ・グループを選択し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・ディレクトリーのパス情報を指定してから「次へ」をクリックします。
 8. パッケージ要約パネルで、計画されたインストールの情報を確認し、「インストール」をクリックします。英語以外の環境にインストールする場合、環境の概要が英語でリストされることがあります。Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 用のサポート言語を後で構成します。

9. インストールが完了したら、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを開始するためのオプションを選択し、「終了」をクリックします。Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 インストール・プログラムが終了し、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムが自動的に開始されます。

次のタスク

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 を構成します。

クラスター環境での Maximo Asset Management 構成プログラムを使用した Maximo Asset Management の構成

クラスタリング用に WebSphere Application Server Network Deployment を構成した後、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用してクラスター環境で Maximo Asset Management を構成します。

手順

1. Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 構成プログラムが開いていない場合、Maximo Asset Management ランチパッドからこれを開始します。ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、Maximo Asset Management のインストールの場所を指定してから「**Tivoli の Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。
2. IBM Maximo Asset Management の構成操作ページで、「新規デプロイメントの構成」をクリックします。
3. 「デプロイメント環境の定義」パネルで、インストールして準備した Db2 サーバーおよび WebSphere Application Server Network Deployment サーバーに関する情報を指定します。「データベースの作成および構成」、「製品の **WebSphere** の構成を完了します」、および「製品をクラスター環境にデプロイする」オプションを選択して、WebSphere Application Server Network Deployment および Db2 を自動的に構成します。デプロイメント環境を定義したら、「終了」をクリックします。
4. 「製品の一般情報の構成」パネルで、インストールする製品コンポーネントについての要約の詳細を検討します。製品の外観およびナビゲーション機能を指定し、ワークフロー・メッセージを受け取るための電子メール・アドレスを追加し、サンプル・データをデプロイするかどうかを選択します。
5. 「DB2 インスタンスの構成 (Configure the DB2 Instance)」パネルで、Maximo Asset Management 用に作成する Db2 インスタンスに関する情報を指定します。
6. 「DB2 データベースの構成」パネルで、Maximo Asset Management 用に作成する Db2 データベースに関する情報を指定します。
7. 「アプリケーション・サーバーの構成」パネルで、クラスターが定義されている WebSphere Application Server Network Deployment ドメイン・マネージャーの情報を指定し、「クラスター情報のロード」をクリックします。
8. クラスターにより管理される機能に対してアプリケーションを作成し、そのアプリケーションに対して JMS を構成し、Maximo Asset Management ヘル

プ・アプリケーションを構成します。 クラスター内の機能ごとに少なくとも 1 つのアプリケーションを作成する必要があります。

- a. 「アプリケーションの追加」をクリックします。
 - b. アプリケーションの名前を指定し、その機能に関連付けられたクラスター名と Web サーバーを選択します。
 - c. オプション: 選択したクラスターに関連する機能を変更します。
 - d. アプリケーションの JMS メッセージ処理を有効にし、構成します。
Maximo 統合フレームワーク機能では JMS が必要です。レポート機能は JMS をサポートしていません。DB2 を使用して JMS データを保管することを選択しない場合、この情報を保管するために Derby データベースが作成されます。
9. ヘルプ・アプリケーションの名前を指定し、そのアプリケーションに割り当てるクラスターを選択し、そのアプリケーション用に使用する Web サーバーを選択することで、Maximo Asset Management ヘルプ・アプリケーションを構成します。
 10. 「アプリケーション・セキュリティの構成」パネルで、Maximo Asset Management のセキュリティ・モデルを選択します。ディレクトリー・サーバーを含むセキュリティ・モデルを選択する場合、Virtual Member Manager 用のディレクトリーに関する情報を指定します。Maximo Asset Management 用に作成する必要があるユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。パスワード値としてユーザー名は使用しないでください。
 11. 言語を選択します。
 12. 「デプロイメント操作の適用」パネルで、ユーザー・インターフェースの設定を指定し、使用可能なすべてのデプロイメント操作を選択してから、「終了」をクリックします。

第 7 章 サイレント・インストール

Maximo Asset Management のサイレント・インストールのオプションでは、コマンド・プロンプトと応答ファイルを使用して、Maximo Asset Management インストール・プログラムと対話します。

Maximo Asset Management または関連するミドルウェア・パッケージのサイレント・インストールを実行する前に、Installation Manager ソフトウェアをインストールする必要があります。

インストール用のサイレント応答ファイルの作成

応答ファイルは、Maximo Asset Management インストール・プログラムを使用するときにユーザーが行った選択と指定した値を記録します。この応答ファイルを入力として使用して、Maximo Asset Management インストール・プログラムをサイレントに実行できます。

始める前に

record 環境変数を設定してから、Maximo Asset Management ランチパッドを使用してインストール・プログラムを開始することで、サイレント・インストール応答ファイルを作成することができます。応答ファイルは、プログラムを開始したユーザーのホーム・ディレクトリーに生成されます。ご使用のオペレーティング・システムに対応する以下のコマンドを使用することによって、現在のユーザーのホーム・ディレクトリーを判別できます。

Windows

```
set HOMEPATH
```

UNIX

```
echo $HOME
```

ファイルの名前は `tpaeInstallerRspdate_and_time_stamp.xml` になります。例えば `tpaeInstallerRsp20130716105258.xml` です。

手順

1. コマンド・プロンプトを開いて、**record** 環境変数を設定します。

オプション	説明
Windows	set record=true
Linux または UNIX	export record=true

2. Maximo Asset Management ランチパッドを開始します。

オプション	説明
Windows	!launchpad64.exe
Linux または UNIX	./!launchpad.sh

3. 「製品のインストール」をクリックします。
4. インストールするコンポーネントを選択し、「インストール」をクリックして Maximo Asset Management インストール・プログラムを開始します。
5. サイレント・インストールを実行するパッケージを選択し、共用リソースおよびインストール・ディレクトリーを指定します。選択内容が正しいことを確認したら、「インストール」をクリックしてパッケージをインストールします。
6. 「終了」をクリックして Maximo Asset Management インストール・プログラムを終了します。

サイレント・インストール応答ファイルのサンプル

tpaeInstallerRspdate_and_time_stamp.xml ファイルを使用する代わりに、サンプル応答ファイルを使用して、必要に応じてその内容を変更できます。

サンプル・ファイル

サンプル応答ファイルは、IBM Maximo Asset Management 7.6.1 ランチパッドの解凍先ディレクトリーにあります。サンプル応答ファイルで使用されている値を更新する場合は、インストール・ロケーション、ホスト名、ポート番号、ユーザー名などのパラメーターのみ更新するようにしてください。環境に関するもの以外の値（主要製品名や Installation Manager リポジトリーなど）を更新する必要がある場合は、Installation Manager ソフトウェアを使用して、独自のサイレント応答ファイルを作成してください。

表 3. サイレント応答ファイルのサンプル

ファイル	説明
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Unix¥ ResponseFile_MAM_Install_Unix.xml	Linux および UNIX に Maximo Asset Management をインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Unix¥ ResponseFile_MAM_Uninstall_Unix.xml	Linux および UNIX で Maximo Asset Management をアンインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Windows¥ ResponseFile_MAM_Install_Windows.xml	Windows に Maximo Asset Management をインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Windows¥ ResponseFile_MAM_Uninstall_Windows.xml	Windows に Maximo Asset Management をアンインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Unix¥ ResponseFile_DB2_Install_Unix.xml	Linux および UNIX に IBM Db2 をインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Windows¥ ResponseFile_DB2_Install_Windows.xml	Windows に IBM Db2 をインストールします。
<i>launchpad_directory</i> ¥SilentResponseFiles¥ Installer¥Unix¥ ResponseFile_DB2_Uninstall_Unix.xml	Linux および UNIX に IBM Db2 をアンインストールします。

表 3. サイレント応答ファイルのサンプル (続き)

ファイル	説明
<code>launchpad_directory%SilentResponseFiles% Installer%Windows% ResponseFile_DB2_Uninstall_Windows.xml</code>	Windows に IBM Db2 をアンインストールします。
<code>launchpad_directory%SilentResponseFiles% Installer%Unix% ResponseFile_TPAE_WAS_Install_Unix.xml</code>	WebSphere Application Server の基本コンポーネントを Linux および UNIX にインストールします。
<code>launchpad_directory%SilentResponseFiles% Installer%Windows% ResponseFile_TPAE_WAS_Install_Windows.xml</code>	WebSphere Application Server の基本コンポーネントを Windows にインストールします。
<code>launchpad_directory%SilentResponseFiles% Installer%Unix% ResponseFile_TPAE_WAS_Uninstall_Unix.xml</code>	Linux および UNIX 上にある WebSphere Application Server の基本コンポーネントをアンインストールします。
<code>launchpad_directory%SilentResponseFiles% Installer%Windows% ResponseFile_TPAE_WAS_Uninstall_Windows.xml</code>	Windows 上にある WebSphere Application Server の基本コンポーネントをアンインストールします。

サイレント応答ファイル内のパスワード値の更新

Maximo Asset Management インストール・プログラムでは、応答ファイル内のパスワード値を暗号化することが必要です。応答ファイル内の暗号化パスワード値を更新する必要がある場合、Installation Manager スtring暗号化ユーティリティを使用します。

このタスクについて

Installation Manager String暗号化ユーティリティはプレーン・テキストのパスワード値を受け入れ、そのパスワードの暗号化バージョンを生成します。ユーザーはその後、暗号化された値をコピーし、応答ファイルのパスワード・フィールドに貼り付ける必要があります。

手順

1. コマンド行から Installation Manager String暗号化ユーティリティを開始します。

オプション	説明
Windows	<code>c:%Program Files%IBM%InstallationManager%eclipse% tools%imutilsc newpasswordvalue</code>
AIX® または Linux	<code>/opt/IBM/InstallationManager/eclipse/ tools/imutilsc encryptString newpasswordvalue</code>

`newpasswordvalue` を、新しいプレーン・テキストのパスワード値に置き換えます。

2. 「Stringの暗号化バージョン (**Encrypted version of the string**)」フィールドのStringをコピーします。

3. 応答ファイルをテキスト・エディターで開き、パスワード値を、コピーした暗号化パスワードで置き換えて、ファイルを保存します。

Installation Manager ソフトウェアのサイレント・インストール

Maximo Asset Management および関連ミドルウェアをサイレント・インストールするには、Installation Manager ソフトウェアを最初にインストールしておく必要があります。

手順

1. システムでコマンド・プロンプトを開き、ランチパッド・ファイルを unzip したディレクトリーに移動します。
2. ご使用のオペレーティング・システム用の Installation Manager プログラムが格納されているフォルダー (¥Install¥IM¥installer.win64 など) にディレクトリーを変更します。
3. オプション: テキスト・エディターで silent-install.ini ファイルを開き、デフォルト値を更新します。
4. Installation Manager サイレント・インストール・プロセスを開始します。

オプション	説明
Windows	installc -acceptLicense
その他のオペレーティング・システム	./installc -acceptLicense

タスクの結果

Installation Manager ソフトウェアがシステムに正常にインストールされました。次に、Maximo Asset Management のサイレント・インストールに進むことができます。

Maximo Asset Management および関連ミドルウェアのサイレント・インストール

Maximo Asset Management および関連ミドルウェアをサイレントにデプロイすることで、事前定義された設定に基づく無人インストールを実行することができます。

始める前に

Maximo Asset Management および関連するミドルウェアのサイレント・インストールに使用できる応答ファイルを生成するには、インストールを正常に完了する必要があります。あるいは、製品メディアで用意されているサンプル応答ファイルのいずれかを使用して、これに変更を加えることもできます。

応答ファイルが別のシステムで作成されたものである場合、応答ファイルに記録されているすべての値が、ターゲット・システムで有効であることを確認してください。応答ファイルの作成時に定義されたパスの値が、ターゲット・システムでも有

効であることを確認してください。例えば、製品およびミドルウェアのインストール・イメージの正しいパスを示すように、**repository location** パラメーター値の更新が必要になる場合もあります。

応答ファイルの作成時に使用されたパスとは異なるディレクトリーに製品をインストールする場合、**installLocation** パラメーター値を更新します。**installLocation** パラメーターの値を更新する場合、**profile id** パラメーターにも新しい値を指定する必要があります。

手順

1. 以前に生成した応答ファイルと Maximo Asset Management ファイルをターゲット・システムにコピーします。
2. コマンド・プロンプトを開き、ご使用のオペレーティング・システムに対応する、Installation Manager プログラムのロケーションにディレクトリーを変更します (例: `cd /opt/IBM/InstallationManager/eclipse/tools/`)。
3. Installation Manager プログラムをサイレントに起動します。

```
imcl -input responsefilename  
-log logfile-acceptLicense
```

-input パラメーターによって、使用する応答ファイルが決まります (例: `/SI/tpaeInstallerResp20130716105258.xml`)。 **-log** パラメーターによって、ログ・ファイルの書き込み先が決まります (例: `/tmp/linuxDB2WASMAM_Log.xml`)。 応答およびログ・ファイルを指定するときには、絶対パスを含める必要があります。

タスクの結果

応答ファイルで提供されている値が使用され、インストールはサイレントに進行します。入力として別の応答ファイルを使用すると、別のシステム上にミドルウェアをサイレント・インストールすることができます。次に、別の応答ファイルを使用して、管理ワークステーションとして指定されているシステムに Maximo Asset Management をサイレント・インストールすることができます。

Maximo Asset Management および関連するミドルウェアのサイレント・アンインストール

インストール中に使用された設定に基づいて、Maximo Asset Management および関連するミドルウェアのサイレント・アンインストールを行うことができます。

手順

1. コマンド・プロンプトを開き、`launchpad_home%SilentResponseFiles%Installer` ディレクトリーに移動します。ここに、サンプルのアンインストール応答ファイルが格納されています。
2. ユーザー環境で使用される値を使用して、サンプルのアンインストール応答ファイルを更新します。
3. Maximo Asset Management アンインストール・プログラムをサイレント起動します。

```
imcl -input responsefilename  
-log logfile-acceptLicense
```

imc1 コマンドのデフォルトのホーム・ディレクトリーは、Windows システムの場合は `c:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse\tools\` で、Linux および UNIX システムの場合は `/opt/IBM/InstallationManager/eclipse/` です。

-input パラメーターによって、使用する応答ファイルが決まります (例えば、`C:\tmp\install_response.xml`)。

-log パラメーターによって、ログ・ファイルの書き込み先が決まります (例えば、`C:\tmp\silent.log`)。

応答およびログ・ファイルを指定するときには、絶対パスを含める必要があります。 **-acceptLicense** パラメーターは、ライセンスを自動的に受け入れるために使用されます。

4. アンインストール・プログラムを使用して、Installation Manager ソフトウェアをシステムから削除できます。

`uninstallc`

表 4. `uninstallc` コマンドの場所

Windows	その他のオペレーティング・システム
管理者 64 ビット <code>C:\ProgramData\IBM\Installation Manager\uninstall</code>	管理者 <code>var/ibm/InstallationManager/uninstall</code>
ユーザー 64 ビット <code>C:\Users\User ID\AppData\Roaming\IBM\Installation Manager\uninstall</code>	ユーザー <code>User Home/var/ibm/InstallationManager/uninstall</code>

第 8 章 サイレント構成

サイレント構成オプションを使用すると、コマンド・プロンプトと応答ファイルを使用して、Maximo Asset Management 構成プログラムと対話できます。

サイレント構成を実行するには以下の作業が必要になります。

1. 『ミドルウェア構成用のサイレント応答ファイルの作成』
2. 90 ページの『Maximo Asset Management のサイレント構成のための応答ファイルの作成』
3. 91 ページの『ミドルウェアのサイレント構成』
4. 91 ページの『Maximo Asset Management のサイレント構成』

ミドルウェア構成用のサイレント応答ファイルの作成

用意されているサンプル応答ファイルのいずれかを変更することで応答を作成します。この応答ファイルを入力として使用して、構成プログラムをサイレントに実行できます。

手順

1. サンプル・ファイルのコピーを作成します (例: `my-cfg-silent-win.properties`)。 サンプル応答ファイルは `launchpad_home¥SilentResponseFiles¥ConfigTool` にあります。
2. 応答ファイルをテキスト・エディターで開き、必要に応じて値を更新し、ファイルを保存します。

応答ファイルにリストされているすべての値 (特にパス値) がターゲット・システムでも有効であることを確認してください。例えば、ターゲット・システムを基準とした WebSphere Application Server Network Deployment の正しいパスを示すために、**WAS.InstallLocation** パラメーター値の更新が必要になる場合があります。

自動構成を行わない Maximo Asset Management コンポーネントがある場合は、該当するプロパティ値を `false` に設定します。例えば、システム上に WebSphere Application Server Network Deployment を構成しない場合、**WAS.ND.AutomateConfig** 値を `false` に設定します。

次のタスク

ミドルウェアのサイレント構成が完了した後、Maximo Asset Management のサイレント構成に進むことができます。

関連タスク:

91 ページの『ミドルウェアのサイレント構成』
構成応答ファイルを使用することで、Maximo Asset Management と一緒に使用されるミドルウェアをサイレント構成できます。

ミドルウェアのサイレント構成用の応答ファイルのサンプル

IBM Maximo Asset Management 7.6.1 製品イメージには、サンプル応答ファイルがいくつか付属しています。サンプル応答ファイルを使用して、必要に応じてその内容を変更できます。

サンプル・ファイル

サイレント応答ファイルは製品イメージの `launchpad_home¥SilentResponseFiles¥ConfigTool` ディレクトリーにあります。

表 5. ミドルウェアのサイレント応答ファイルのサンプル

ファイル	説明
<code>cfg-silent-aix.properties</code>	AIX に Maximo Asset Management ミドルウェアを構成します。
<code>cfg-silent-linux.properties</code>	Linux に Maximo Asset Management ミドルウェアを構成します。

Maximo Asset Management のサイレント構成のための応答ファイルの作成

用意されているサンプル応答ファイルのいずれかに、必要に応じて変更を加えることによって、応答ファイルを作成します。この応答ファイルを入力として使用して、構成プログラムをサイレントに実行できます。

始める前に

IBM Maximo Asset Management 製品イメージには、サンプル応答ファイルがいくつか付属しています。これらのファイルは、`<install_dir>/ConfigTool/samples` ディレクトリーの下、製品イメージを解凍したディレクトリーにあります。

このタスクについて

構成プログラムをサイレント・モードで実行すると、構成プログラムは応答ファイルのデータを使用して製品を構成します。

手順

1. サンプル・ファイルのコピーを作成し、`my-maximocfg-silent-win.properties` などの適切な名前を付けます。
2. 応答ファイルをテキスト・エディターで開き、必要に応じて値を更新し、ファイルを保存します。

応答ファイルにリストされているすべての値 (特にパス値) がターゲット・システムでも有効であることを確認してください。例えば、ターゲット・システムを基準とした WebSphere Application Server Network Deployment の正しいパスを示すために、**WAS.InstallLocation** パラメーター値の更新が必要になる場合があります。

自動構成を行わない Maximo Asset Management コンポーネントがある場合は、該当するプロパティ値を `false` に設定します。例えば、システム上に

WebSphere Application Server Network Deployment の Virtual Member Manager を構成しない場合、**WAS.VmmFullyAutomatedConfig** 値を **false** に設定します。

関連タスク:

『Maximo Asset Management のサイレント構成』

構成応答ファイルを使用することで、Maximo Asset Management をサイレント構成することができます。

ミドルウェアのサイレント構成

構成応答ファイルを使用することで、Maximo Asset Management と一緒に使用されるミドルウェアをサイレント構成できます。

手順

1. 以前に作成した応答ファイルをターゲット・システムにコピーします。
2. コマンド・プロンプトを開き、構成プログラムをサイレントに起動します。

```
reconfigurePae
-action deployMiddlewareConfiguration
-inputFile responsefilename
```

responsefilename パラメーターによって、使用する応答ファイルが決まります (例: C:\%tmp%\my-cfg-silent.properties)。応答およびログ・ファイルを指定するときには、絶対パスを含める必要があります。

タスクの結果

構成応答ファイルで提供されている値が使用され、構成はサイレントに進行します。

次のタスク

サイレント構成応答ファイルを変更して別のサーバーにコピーし、追加構成を実行できます。例えば、構成プログラムを使用して、あるサーバー上で WebSphere Application Server Network Deployment をサイレント構成した後、応答ファイルに変更を加えて別のサーバー上で IBM Security Directory Server を構成することができます。

Maximo Asset Management のサイレント構成

構成応答ファイルを使用することで、Maximo Asset Management をサイレント構成することができます。

手順

1. 以前に作成した応答ファイルをターゲット・システムにコピーします。
2. コマンド・プロンプトを開き、Maximo Asset Management 構成プログラムをサイレントに起動します。

```
reconfigurePae
-action deployConfiguration
-inputFile responsefilename middlewarecomponents
```

responsefilename パラメーターによって、使用する応答ファイルが決まります (例: `C:%tmp%my-cfg-silent.properties`)。 *middlewarecomponents* パラメーターは、構成するミドルウェア・コンポーネントを指定します (例: `-dbvendor DB2` または `-j2eevendor WebSphere`)。ほとんどの場合、ミドルウェア・コンポーネントを一緒に構成します。 応答ファイルを指定するときには、絶対パスを含める必要があります。

タスクの結果

応答ファイルで提供されている値が使用され、構成はサイレントに進行します。

次のタスク

サイレント構成応答ファイルを変更して別のサーバーにコピーし、追加構成を実行できます。例えば、構成プログラムを使用して、あるサーバー上で WebSphere Application Server Network Deployment をサイレント構成した後、応答ファイルに変更を加えて別のサーバー上で IBM Security Directory Server を構成することができます。

ミドルウェア構成のサイレント削除

ミドルウェアのサイレント構成に使用したのと同じファイルを使用して、構成情報を削除することができます。

このタスクについて

Maximo Asset Management ミドルウェア構成は、以前製品を構成するために使用したのと同じ構成応答ファイルを使用して、サイレント削除することができます。以前製品を構成するために使用した構成応答ファイルは、製品から構成情報を削除するために使用するには、事前に編集する必要があります。

手順

1. 以前サイレント構成に使用した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
2. 応答ファイルのコピーを作成して、ファイル名を変更します。例えば、ファイルの名前を `my-uncfg-silent.properties` に変更します。
3. ファイルをテキスト・エディターで開き、**MW.Operation** プロパティー値を **unconfigure** に変更し、ファイルを保存します。
4. コマンド・プロンプトを開き、Maximo Asset Management 構成解除プログラムをサイレント起動します。

```
reconfigurePae
-action deployMiddlewareConfiguration
-inputFile responsefilename
```

responsefilename パラメーターによって、使用する応答ファイルが決まります (例えば、`C:%tmp%my-uncfg-silent.properties`)。 応答ファイルを指定するときには、絶対パスを含める必要があります。

製品構成のサイレント削除

reconfigurePae コマンドの **removeConfiguration** アクションを使用して、Maximo Asset Management 構成情報を削除することができます。

このタスクについて

removeConfiguration アクションは、構成ツールによって実行された Maximo Asset Management 構成を、データベースおよびアプリケーション・サーバーから削除するために使用します。このアクションは、**removeJ2EEConfiguration** アクションおよび **removeDatabaseConfiguration** アクションと一緒に実行することに相当します。

手順

1. Maximo Asset Management 管理ワークステーションにログオンします。
2. コマンド・プロンプトを開いて、ディレクトリーを `Install_Home\ConfigTool%scripts` に変更します。
3. Maximo Asset Management 構成プログラムをサイレント起動します。

```
reconfigurePae -action removeConfiguration
-dbuser userid
-dbpwd password
-wasuser userid
-waspwd password
```

パラメーター **-dbuser** および **-dbpwd** は、データベースの構成に使用されるユーザー ID とパスワードです。パラメーター **-wasuser** および **-waspwd** は、IBM WebSphere Application Server Network Deployment の構成に使用されるユーザー ID とパスワードです。

第 9 章 HTTPOnly 属性の構成

アプリケーションが IBM WebSphere Application Server Network Deployment 8 環境のユーザー・インターフェースから開始しない場合、IBM WebSphere Application Server Network Deployment 内のセキュリティー設定に起因して問題が発生している可能性があります。特に、**HTTPOnly** 属性がセッション Cookie に設定されている場合、アプリケーションにアクセスできません。

手順

1. IBM WebSphere Application Server Network Deployment の管理コンソールにログオンします。
2. ナビゲーション・ペインから、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」を参照します。
3. 更新しようとする製品用に作成されたアプリケーション・サーバー (例えば、MXServer) をクリックします。
4. 「構成」パネルの「コンテナ設定」で、「セッション管理」をクリックします。
5. 「一般プロパティ」で、「**Cookie** を有効にする」をクリックします。このオプションをクリアしないでください。ラベルのみをクリックしてください。
6. 「セッション **Cookie** を **HTTPOnly** に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します」チェック・ボックスをクリアします。
7. 「**OK**」をクリックして変更を保存してから、「**OK**」をクリックします。
8. 「保存」をクリックして、「**OK**」をクリックします。
9. アプリケーション・サーバー・テーブルに戻って、必要なアプリケーション・サーバーを選択します。
10. 実施した変更を適用するために、「再始動」をクリックして、アプリケーション・サーバーを再始動します。

第 10 章 インストール・プログラムおよび構成プログラムのログ情報

Maximo Asset Management や構成プログラムが生成するログ・ファイルによって、完了したタスクや構成タスク、および発生した可能性のあるエラーについて、詳しい情報が提供される場合があります。

Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラム・ログの場所

Maximo Asset Management と関連ミドルウェアは、Installation Manager を通じてインストールされます。Installation Manager のログ・ファイルは、インストールすることを選択したコンポーネントに関係なく、どのインストールでも共通です。Maximo Asset Management インストール・プログラムのログ・ファイルは、当該プログラムが実行されたシステムにあります。

表 6. ログ・ファイル・ディレクトリー

ログ・ファイル・ディレクトリー
C:%ProgramData%IBM%Installation Manager%logs
/var/ibm/InstallationManager/logs
C:%IBM%SMP%ConfigTool%logs
opt/IBM/SMP/ConfigTool/logs

また、J2EE サーバーに起因するエラーを受け取った場合は、デプロイメント・マネージャー、ノード・エージェント、および WebSphere Application Server アプリケーション・サーバーのログ・ディレクトリーにあるログを調べてください。

IBM 製品サポート・サービスを利用するときには、これらのログ・ファイルをアーカイブ・ファイルで提供できるように準備しておいてください。このタスクは、`install_home%configtool%scripts` ディレクトリーにある LogZipper ユーティリティーを使用して実行できます。LogZipper ユーティリティーを使用すると、関連するすべてのログ・ファイルが `install_home/configtool/debug/YYYYMMDD_hhmmss.zip` にアーカイブされます。

第 11 章 ポストインストール・タスク

Maximo Asset Management のデプロイメントを完了するには、いくつかのポストインストール・タスクが必要です。

ローカルでのヘルプのインストール

Maximo Asset Management の製品ヘルプは、IBM Knowledge Center においてオンラインで提供されています。ヘルプをローカルにインストールしたい場合、IBM Knowledge Center とヘルプ・パッケージを Fix Central からダウンロードできます。

ヘルプのインストール

IBM Knowledge Center においてオンラインで使用可能なものと同じ文書パッケージが含まれているヘルプ・パッケージを Fix Central からダウンロードできます。このヘルプ・パッケージと構成ファイルを IBM Knowledge Center のローカル・インストールに追加します。

手順

1. ローカルにインストール可能なバージョンの IBM Knowledge Center およびヘルプ・パッケージを Fix Central からダウンロードするには、<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24041962> の説明に従います。
2. IBM Knowledge Center パッケージを、そのインストール場所に解凍します。デフォルトのインストール場所は `C:\%KnowledgeCenter` です。別の場所に IBM Knowledge Center をインストールする場合は、インストール対象の各ヘルプ・パッケージごとに `taxonomy.properties` ファイルのパス値を更新する必要があります。
3. ヘルプ・パッケージを一時的な場所に解凍します。解凍されたファイルには、1 つ以上のプラグイン・フォルダー、1 つのプロパティ・ファイル、および 1 つのタクソノミー・ファイルが含まれています。
4. ヘルプ・パッケージのすべての `com.ibm.prod.doc` プラグイン・フォルダーを、`install_home/KnowledgeCenter/usr/content/KCXhtml` ディレクトリーにコピーします。
5. プロパティ・ファイルを構成ディレクトリー (例: `install_home/KnowledgeCenter/usr/conf/SSLKT6_7.6.1.properties`) にコピーします。
6. テキスト・エディターで `taxonomy.properties` ファイルを開き、インストールの場所を指すようにパス値を更新します (必要な場合)。例えば、パス・プロパティの値を `C:/KnowledgeCenter/usr/content/KCXhtml` から `E:/IBM/SMP/KnowledgeCenter/usr/content/KCXhtml` に変更します。この場合、IBM Knowledge Center は `E:/IBM/SMP/KnowledgeCenter` にインストールされています。

7. `install_home/KnowledgeCenter/usr/taxonomy/KC_taxonomy.ditamap` を、ヘルプ・パッケージに含まれているバージョンの `KC_taxonomy.ditamap` ファイルで置き換えます。
8. `install_home/KnowledgeCenter/bin` ディレクトリーで、**startKC.bat** (Windows の場合) または **startKC.sh** (Linux または AIX の場合) をクリックして、IBM Knowledge Center を開始します。
9. ブラウザーで `http://install_home:port/kc` を開き、製品ヘルプを表示します (例: `http://127.0.0.1:9090/kc`)。
10. Maximo Asset Management で、アプリケーション・ヘルプのリンクが IBM Knowledge Center のローカル・インストールを指すように、以下のように宛先変更します。
 - a. システム・プロパティー・アプリケーションで、`mxe.help` プロパティーをフィルターに掛けます。
 - b. `mxe.help.host` プロパティーと `mxe.help.port` プロパティーを、IBM Knowledge Center のローカル・インストール済み環境のホストおよびポートの値 (デフォルトのホスト値 `127.0.0.1` とデフォルトのポート値 `9090` など) に変更します。
 - c. `mxe.help.path` プロパティーの値を `/support/knowledgecenter/` から `/kc/` に変更します。
 - d. 変更を保存し、「実行中のリフレッシュ」をクリックして実動データベース内の値を更新します。
11. IBM Knowledge Center を停止するには、`install_home/KnowledgeCenter/bin` ディレクトリーで、**stopKC.bat** (Windows の場合) または **stopKC.sh** (Linux または AIX の場合) をクリックします。

IBM Knowledge Center 構成

ローカル環境で IBM 製品のヘルプ・パッケージを実行するためには、IBM Knowledge Center の最小限の構成が必要です。また、IBM Knowledge Center の別々のインスタンスで異なるコンテンツを提供するように構成したり、既存の Eclipse ヘルプ・プラグインを IBM Knowledge Center で実行するように構成したりすることもできます。

IBM Knowledge Center URL の変更

ローカル・コンピューターに IBM Knowledge Center をインストールした場合、サーバーを始動すると、デフォルトの URL `http://localhost:9090/kc` でヘルプをブラウザーで利用できます。ホストの値は、IBM Knowledge Center をインストールした場所に応じて変わります。デフォルト・ポートが既に使用されている場合、`etc` ディレクトリーにある `kc_ant.properties` ファイルでポートの値を変更できます。

異なる対象者に別々のヘルプを提供する場合や、互換性のない複数の製品バージョンのヘルプをホストする場合、同じコンピューターに IBM Knowledge Center の複数のインスタンスをインストールできます。追加インスタンスの名前を、`KnowledgeCenter2` や `KnowledgeCenter3` などの固有のディレクトリー名に変更し、`etc` ディレクトリーにある `kc_ant.properties` ファイルを構成して、各インスタンスが異なるポートで稼働するようにします。

タクソノミー・ファイルの保守

IBM ソフトウェア・カタログ内の各製品バージョンには、www.ibm.com でのその製品ヘルプの URL の一部を構成する固有のタクソノミー値があります。例えば、Maximo Asset Management バージョン 7.6.0.5 のタクソノミー値は SSLKT6_7.6.0.5 であり、製品のウェルカム・ページの URL は http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSLKT6_7.6.0.5/com.ibm.mam.doc/welcome.html です。*taxonomy.properties* ファイルと *KC_taxonomy.ditamap* ファイルにより、IBM Knowledge Center 内のタクソノミー値が制御されます。

各ヘルプ・パッケージには、製品バージョンに固有の *taxonomy.properties* ファイルが含まれています。このファイルを、IBM Knowledge Center 内の *usr/conf* ディレクトリーに追加する必要があります。複数の製品のヘルプ・パッケージを IBM Knowledge Center に追加する場合、*usr/conf* ディレクトリーにはヘルプ・パッケージごとに別々の *taxonomy.properties* ファイルを格納する必要があります。

KC_taxonomy.ditamap ファイルには、IBM ソフトウェア・カタログ内の各製品バージョンがリストされており、新製品および製品の新規バージョンがリリースされるたびに、このファイルが頻繁に更新されます。*KC_taxonomy.ditamap* ファイルの基本バージョンが、プレースホルダーとして IBM Knowledge Center の *usr/taxonomy* ディレクトリー内に提供されていますが、これには製品タクソノミー値の包括的なリストは含まれていません。このプレースホルダー・ファイルを、ヘルプ・パッケージに含まれているバージョンの *KC_taxonomy.ditamap* で置き換える必要があります。

複数のヘルプ・パッケージを IBM Knowledge Center に追加する場合、各ヘルプ・パッケージに *KC_taxonomy.ditamap* ファイルが含まれています。頻繁に更新されるこのファイルの性質により、含まれている *KC_taxonomy.ditamap* ファイルのバージョンが異なる可能性があります。タクソノミー値はこのファイルにインクリメンタルに追加されていくため、常にこのファイルの最新バージョンを使用してください。

トラブルシューティング

新規ヘルプ・パッケージの追加後に IBM Knowledge Center を開始すると、ヘルプ・トピックの検索と取得を高速化するために、索引ファイルおよびキャッシュ・ファイルが作成されます。新規ヘルプ・トピックがブラウザーに表示されない場合、該当製品バージョン用のサブディレクトリーが *runtime/diskcache* および *runtime/index* ディレクトリー内に作成されているかどうかを確認してください。これらのサブディレクトリーが作成されていない場合、*taxonomy.properties* ファイルが *usr/conf* ディレクトリー内に存在し、そのファイルに、*usr/content/KCXhtml* ディレクトリー内のメイン・ヘルプ・プラグインへの正しいパスが設定されていることを確認してください。*taxonomy.properties* が正しい場所に存在し、ヘルプ・プラグインへの正しいパスが設定されている場合、最新バージョンの *KC_taxonomy.ditamap* を *usr/taxonomy* ディレクトリーに追加し忘れている可能性があります。

トラブルシューティングを行った後に IBM Knowledge Center を開始する前に、*runtime/diskcache* および *runtime/index* の各ディレクトリー内の製品バージョン

のサブディレクトリーを削除することで、コンテンツを完全にリフレッシュすることができます。

ヘルプ・コンポーネント

ヘルプ・コンポーネントには、ローカルにインストール可能なバージョンの IBM Knowledge Center と各製品バージョンのコンテンツ・プラグインが含まれたヘルプ・パッケージが含まれています。ローカルにインストール可能なバージョンの IBM Knowledge Center をダウンロードして、ローカル環境にヘルプ・パッケージをデプロイすることができます。

IBM Knowledge Center

WebSphere Application Server Liberty バージョン 8.5.5.x の組み込みサーバーが含まれたスタンドアロン・ヘルプ・システム。IBM Knowledge Center は、<https://www-933.ibm.com/support/fixcentral/> で Maximo のお客様に配布されます。IBM Knowledge Center は、Windows、Linux、または AIX の各オペレーティング・システムで使用でき、IBM Knowledge Center は、ローカル・コンピューター、サーバー、または読み取り専用メディア上で実行できます。

IBM Knowledge Center パッケージを解凍した後、そこに製品ヘルプ・パッケージを追加して、ローカル環境にヘルプをデプロイします。IBM Knowledge Center を使用して、同時に複数の製品のヘルプ・パッケージをホストできます (それらの製品が互換性のあるリリース・バージョンの場合)。互換性のない複数のヘルプ・パッケージをホストする場合は、異なるポートで稼働するように構成した IBM Knowledge Center の追加インスタンスを実行できます。

ヘルプ・パッケージ

<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter> で使用可能な文書と同じものが含まれ、1 つ以上のコンテンツ・プラグインが含まれています。ヘルプ・パッケージには、IBM Knowledge Center で必要となる以下のファイルも含まれています。

- *taxonomy.properties* ファイルには、製品バージョンのタクソノミー値と、ヘルプ・パッケージ内のプラグイン用のメイン *toc.ditamap* ファイルへのパスが含まれています。
- *KC_taxonomy.ditamap* ファイルには、IBM ソフトウェア・カタログ内のすべての製品のタクソノミー値がリストされています。このファイルの基本バージョンが IBM Knowledge Center に含まれていますが、このバージョンのファイルは最新ではありません。ヘルプ・パッケージに含まれている *KC_taxonomy.ditamap* ファイルが、ヘルプ・パッケージが作成されたときのこのファイルの現行バージョンです。

ヘルプ・パッケージに、プラグインおよび追加ファイルを IBM Knowledge Center のどこに追加するかに関する説明が用意されています。

IBM Knowledge Center のバージョン

ローカルにインストール可能なバージョンの IBM Knowledge Center は、IBM Knowledge Center バージョン 1.5 がベースになっています。このバージョンは、<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter> の IBM Knowledge Center バージョン 2.0 とは外観が異なります。機能は似てい

ますが、ナビゲーションと検索に多少の違いがあります。ローカルにインストール可能なバージョンでは PDF 作成はサポートされていません。

ローカルにインストール可能な IBM Knowledge Center バージョン 2.0 が使用可能になった場合は、ローカル・バージョンの更新を希望するお客様に配布されます。

Maximo Asset Management 文書ライブラリー

文書ライブラリー内のヘルプ・パッケージは、製品カタログとインストール環境を反映しています。Maximo Asset Management ヘルプ・パッケージまたは Maximo Asset Management Multitenancy ヘルプ・パッケージのいずれかを、業界ソリューションおよびアドオン製品のヘルプ・パッケージをインストールしたのと同じ IBM Knowledge Center 環境にインストールする必要があります。

Maximo Asset Management および Maximo Asset Management Multitenancy のヘルプ・パッケージには、複数のプラグインが含まれています。多くの業界ソリューションおよびアドオンのヘルプ・パッケージには 1 つのプラグインのみが含まれていますが、一部のヘルプ・パッケージには複数のプラグインが含まれています。ヘルプ・パッケージに複数のプラグインが含まれている場合、1 つのプラグインがナビゲーション・プラグインとして動作します。このプラグインには、ヘルプ・パッケージ内のすべてのプラグインの目次を制御するメインの *toc.ditamap* ファイルが含まれています。IBM Knowledge Center では、ヘルプ・パッケージ内の *taxonomy.properties* ファイルは、ナビゲーション・プラグイン内のメイン *toc.ditamap* ファイルへのパスを指定します。

Maximo Asset Management のヘルプ・パッケージ

このヘルプ・パッケージには、以下のプラグインが含まれています。

com.ibm.mam.doc

ヘルプ・パッケージ内のすべてのプラグインの目次を管理し、製品タクソミー値を設定するナビゲーション・プラグイン。コンテンツには、ウェルカム・ページと製品の概要および会計プロセスの計画、入門、管理のトピックが含まれています。

com.ibm.mam.inswas.doc

WebSphere Application Server への Maximo Asset Management のインストールのヘルプ。

com.ibm.mam.inswl.doc

Oracle WebLogic Server への Maximo Asset Management のインストールのヘルプ。

com.ibm.mbs.doc

Maximo Asset Management の管理、アプリケーション設計、ワークフロー設計、マイグレーション・マネージャーの処理、高可用性の実装、およびアプリケーションの使用のヘルプ。このプラグインは、他のプラグインによって使用されるトピックを提供するコンテンツ再使用プラグインですが、それ自体の目次またはタクソミー値を持っていません。コンテンツは多くのヘルプ・パッケージにより広範囲にわたって使用されるため、すべてのヘル

プ・パッケージについてコンテンツに矛盾がなく、リンクが確実に解決されるように、このプラグインを IBM Knowledge Center に含める必要があります。

com.ibm.mif.doc

Maximo Asset Management データの外部アプリケーションとの統合のヘルプ。com.ibm.mbs.doc と同様に、このプラグインは、コンテンツ再使用プラグインであり、IBM Knowledge Center に含める必要があります。

com.ibm.support.mbs.doc

Maximo Asset Management、業界ソリューション、およびアドオン製品のトラブルシューティング情報とサポート情報。業界ソリューションおよびアドオン製品のトラブルシューティング・トピックは、条件付きで管理され、そのヘルプ・プラグインが IBM Knowledge Center でも使用可能である場合にのみ表示されます。

Maximo Asset Management Multitenancy のヘルプ・パッケージ

このヘルプ・パッケージには、Maximo Asset Management ヘルプ・パッケージ内のプラグインのサブセットが含まれており、マルチテナンシー環境のテナントを特に対象としたコンテンツになっています。Maximo Asset Management のプラグインと Maximo Asset Management Multitenancy のプラグインを、同じインスタンスの IBM Knowledge Center 環境にインストールすることはできません。両方のライブラリーをサポートする必要がある場合、それらをサポートする IBM Knowledge Center の別々のインスタンスを構成する必要があります。

このヘルプ・パッケージには、以下のプラグインが含まれています。

com.ibm.mt.doc

ヘルプ・パッケージ内のすべてのプラグインの目次を管理し、製品タクソノミー値を設定するナビゲーション・プラグイン。コンテンツには、ウェルカム・ページと製品の概要および会計プロセスの計画、入門、管理のトピックが含まれています。マルチテナンシー環境のテナントに固有のトピックもコンテンツに含まれています。

com.ibm.mbs.doc

コンテンツ再使用プラグインおよびコンテンツはフィルターに掛けられ、マルチテナンシー環境のテナントに関連のない情報は除外されます。

com.ibm.mif.doc

コンテンツ再使用プラグインおよびコンテンツはフィルターに掛けられ、マルチテナンシー環境のテナントに関連のない情報は除外されます。

業界ソリューションおよびアドオンのヘルプ・パッケージ

多くの業界ソリューションおよびアドオンのヘルプ・パッケージには 1 つのプラグインのみが含まれていますが、一部のヘルプ・パッケージには複数のプラグインが含まれています。ヘルプ・パッケージに複数のプラグインが含まれている場合、1 つのプラグインがナビゲーション・プラグインとして動作します。このプラグインが、ヘルプ・パッケージ内のすべてのプラグインの目次を制御します。リンクが解決され、コンテンツが完全になるように、ヘルプ・パッケージに含まれているすべてのプラグインを IBM Knowledge Center に追加する必要があります。

業界ソリューションとアドオン製品のヘルプ・パッケージは、関連するバージョンの Maximo Asset Management ヘルプ・パッケージと併用されるように設計されています。どのバージョンの Maximo Asset Management または Maximo Asset Management が業界ソリューションおよびアドオン製品のバージョンの前提条件であるかを、<https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#!/wiki/IBM%20Maximo%20Asset%20Management/page/Other%20Maximo%20products%20system%20requirements>で確認できます。推奨バージョンでないヘルプ・パッケージの組み合わせをインストールできますが、一部のリンクが解決されなかったり、トピックで説明されている一部の機能をユーザーが使用できなかったりする場合があります。

初期データの構成

Maximo Asset Management コンポーネントを正常にインストールし、構成した後、Maximo Asset Management を使用する前に、いくつかのデータ構成タスクを実行する必要があります。

始める前に

- セキュリティー・グループを作成し、そのセキュリティー・グループにユーザーを追加します。
- デプロイメントの一部としてディレクトリー・サーバーを使用する場合、LDAP リポジトリーでユーザー名が作成されていることを確認してください。
- 必要な会計情報が用意されていることを確認するために、組織の会計部門に問い合わせます。

手順

1. ユーザー名 `maxadmin`、およびインストール時に指定したパスワードを入力して、Maximo Asset Management にログインします。
2. 構成ツールを使用して SMTP サーバーを設定していない場合、システム・イベントの電子メール通知をユーザーに送信するように SMTP サーバーを構成します。Maximo Asset Management のシステム・プロパティーの範囲について詳しくは、システム・プロパティー情報を参照してください。
 - a. 「リンク先」メニューで、「システム構成」 > 「プラットフォームの構成」 > 「システムのプロパティー」を選択します。
 - b. 「グローバル・プロパティー」テーブル・ウィンドウで、フィルター機能を使用して `mail.smtp.host` プロパティーを検索し、展開します。
 - c. 「グローバル値」フィールドに、SMTP ホスト名を指定します。
 - d. 「`mail.smtp.host`」チェック・ボックスを選択します。
 - e. 「共通アクション」メニューから「実行中のリフレッシュ」をクリックします。
 - f. 「実行中のリフレッシュ」ウィンドウで、「OK」をクリックします。
 - g. 「グローバル・プロパティー」テーブル・ウィンドウで、フィルター機能を使用して `mxe.adminEmail` プロパティーを検索します。
 - h. `mxe.adminEmail` プロパティーを展開し、「グローバル値」フィールドに電子メール・アドレスを指定します。
 - i. 「`mxe.adminEmail`」レコード・チェック・ボックスを選択します。

- j. 「共通アクション」メニューから「実行中のリフレッシュ」をクリックします。
 - k. 「実行中のリフレッシュ」ウィンドウで、「OK」をクリックします。
3. 通貨コードを定義します。
- a. 「リンク先」メニューから、「会計」 > 「通貨コード」を選択します。
 - b. 「新規行」をクリックし、通貨コードおよび説明を指定します。例えば、米国ドルを示す USD を入力します。
 - c. 「通貨の保存」をクリックします。
4. 部品セットおよび企業セットを定義します。
- a. 「リンク先」メニューから、「管理」 > 「セット」を選択します。
 - b. 「新規行」をクリックします。
 - c. 部品セット名を指定します。例えば、IT Items と入力します。
 - d. 「タイプ」フィールドに ITEM を指定します。
 - e. 「新規行」をクリックします。
 - f. 企業セット名を指定します。例えば、IT Comps と入力します。
 - g. 「タイプ」フィールドに COMPANY を指定します。
 - h. 「セットの保存」をクリックします。
5. 組織を作成します。
- a. 「リンク先」メニューから、「管理」 > 「組織」を選択します。
 - b. ツールバーから、「新規組織」をクリックします。
 - c. 組織名を指定します。例えば、EAGLENA と入力し、詳細説明を入力します。
 - d. ステップ 3 で定義した基本通貨を指定します。
 - e. ステップ 4 で定義した部品セットおよび企業セットを指定します。
 - f. 「デフォルトの部品ステータス」フィールドで、ステータスを「保留中」に設定します。
 - g. 「サイト」タブをクリックし、「サイト」テーブル・ウィンドウで「新規行」を選択します。
 - h. サイト名を指定します。例えば、Factory01 と入力し、詳細説明を入力します。
 - i. 「組織の保存」をクリックします。
6. GL 勘定科目コンポーネントを作成します。
- a. 「リンク先」メニューから、「システム構成」 > 「プラットフォーム構成」 > 「データベース構成」を選択します。
 - b. 「追加アクション」メニューから、「GL 勘定科目の構成」を選択します。
 - c. 「新規行」をクリックします。
 - d. コンポーネント名を指定します。例えば、MYCOMPONENT と入力します。
 - e. コンポーネントの長さを指定します。例えば、5 と入力します。
 - f. コンポーネントのタイプを指定します。例えば、「英数字」を選択します。

- g. 「OK」をクリックします。
7. データベースに変更を適用します。
- a. 「追加アクション」メニューから、「管理モードの管理」を選択します。
 - b. 「管理モードをオンにする」を選択し、「OK」をクリックします。このタスクは、完了までには多少の時間がかかることがあります。「ステータスの最新表示」をクリックすると、ステータスを確認できます。
 - c. 「追加アクション」メニューから、「構成変更の適用」を選択します。リストされたオブジェクトのステータス列に「変更予定」ステータスが表示されていないことを確認してください。
 - d. 「追加アクション」メニューから、「管理モードの管理」を選択します。
 - e. 「管理モードをオフにする」を選択し、「OK」をクリックします。管理モードをオフにしない場合、クローン・タスクは失敗します。
8. GL 勘定科目を作成します。
- a. 「リンク先」メニューから、「会計」 > 「勘定科目一覧」を選択します。
 - b. 「組織」テーブル・ウィンドウで、組織を選択します。
 - c. 「追加アクション」メニューから、「GL 勘定科目コンポーネント設定」を選択します。
 - d. 「コンポーネント」テーブル・ウィンドウで、ステップ 6 で入力したコンポーネントを選択し、「新規行」をクリックします。
 - e. 「GL 勘定科目構成」の値と説明を指定し、「OK」をクリックします。
 - f. 「GL 勘定科目」テーブル・ウィンドウで、「新規行」をクリックします。
 - g. GL 勘定科目を指定し、「GL 勘定科目の保存」をクリックします。
 - h. 「リンク先」メニューから、「管理」 > 「組織」を選択します。
 - i. 組織を見つけ、レコードを選択します。
 - j. 「清算勘定」フィールドに、作成した GL 勘定科目を指定します。
 - k. 「アクティブ」を選択します。
 - l. 「組織の保存」をクリックします。
9. GL コンポーネント・タイプを変更する許可をセキュリティー・グループに与えます。
- a. 「リンク先」メニューから、「セキュリティー」 > 「セキュリティー・グループ」を選択します。
 - b. 許可を提供するグループを選択します。例えば、**FINANCE** を選択します。
 - c. 「GL コンポーネント」タブをクリックします。
 - d. リストされている GL コンポーネントごとに、「認証済み」チェック・ボックスを選択します。ショートカットとして、「グループにすべての GL コンポーネント・タイプの変更を許可」を選択できます。
 - e. 「グループの保存」をクリックします。
10. 企業関連勘定科目を更新します。
- a. 「リンク先」メニューから、「会計」 > 「勘定科目一覧」を選択します。
 - b. 組織を選択し、「追加アクション」メニューから「企業関連勘定科目」を選択します。

- c. 「新規行」をクリックし、企業タイプ「運送業者」を指定します。
 - d. 「RBNI 勘定」、「支払仮勘定」、および「支払統括勘定科目」フィールドに勘定科目番号を入力します。各フィールドに同じ勘定科目番号を指定できます。
 - e. 「OK」をクリックします。
 - f. 「追加アクション」メニューから、「データベースの更新」を選択し、「OK」をクリックします。
11. デフォルトの挿入サイトを作成します。
- a. 「リンク先」メニューから、「セキュリティ」 > 「ユーザー」を選択します。
 - b. **maxadmin** を見つけ、レコードを選択します。
 - c. 「デフォルトの挿入サイト」フィールドに、ステップ 5 で作成したサイト名を指定します。
 - d. 「セルフサービス要求書の保管場所のサイト」フィールドに、同じサイト名を指定します。
 - e. 「ユーザーの保存」をクリックします。
12. 作業タイプを定義します。作業タイプは作業タスクの重要度を示します。
- a. 「リンク先」メニューから、「管理」 > 「組織」を選択します。
 - b. 組織を見つて、レコードを選択します。
 - c. 「追加アクション」メニューから、「作業指示書オプション」 > 「作業タイプ」を選択します。
 - d. 「新規行」をクリックします。
 - e. 「作業指示書クラス」フィールドで、「作業指示書」を選択します。
 - f. 「作業タイプ」を指定します。例えば、MAJOR と入力します。
 - g. 「開始ステータス」を「進行中」に設定します。
 - h. 「完了ステータス」を「完了」に設定します。
 - i. 「新規行」をクリックし、ステップ f から i を繰り返して、異なる作業タイプの別の作業指示書クラスを作成します。例えば、MINOR のように入力します。
 - j. 「新規行」をクリックし、ステップ f から i を繰り返して、異なる作業タイプの変更作業指示書クラスを作成します。例えば、重要な変更を表すために SIG と入力します。
 - k. 「OK」をクリックしてから、「組織の保存」をクリックします。

関連情報:

データの外部アプリケーションへの統合

システム・プロパティ

ユーザーとグループの同期化

アプリケーション・サーバーのセキュリティを選択する場合、LDAP リポジトリと Maximo Asset Management の間で行われるユーザーとグループのスケジューリングされた同期は、統合リポジトリによって制御されます。

始める前に

Knowledge Center の管理セクションに記載されているクローン・タスクの構成に関する情報を確認してください。

このタスクについて

Virtual Member Manager を介して IBM WebSphere Application Server Network Deployment によって管理される LDAP リポジトリーは、VMMSYNC クローン・タスクによって同期されます。

LDAP リポジトリーと Maximo Asset Management の間の同期化スケジュールを構成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. Web ブラウザーを開き、`http://host name:port/maximo` にアクセスします。
2. `maxadmin` のユーザー ID を使用して Maximo Asset Management にログインします。
3. Maximo Asset Management インターフェースから、「リンク先」 > 「システム構成」 > 「プラットフォーム構成」 > 「クローン・タスクのセットアップ」にナビゲートします。
4. 「クローン・タスク」フィールドで適切なクローン・タスクを探し、それを構成します。
5. 「アクティブ」にするタスクを設定します。

次のタスク

デフォルトでは、クローン・タスクはそのタスクを 5 分ごとに実行します。この間隔を変更する場合は、クローン・タスクの「スケジュール」フィールドを変更します。

構成後の Maximo Asset Management データベースへのサンプル・データの追加

`maxinst` コマンドを使用して、Maximo Asset Management の初期インストールおよび構成後に、サンプル・データを Maximo Asset Management データベースに追加することができます。

始める前に

`maxinst` コマンドは、テーブル・スペース・パラメーターのデフォルト値を提供しません。インストール時に指定したデータ表スペース名とインデックス表スペース名を指定する必要があります。この `maxinst` コマンドは、現在のデータベース・スキーマおよびデータを置き換えます。データベースに現在格納されているレコードを保持する場合は、サンプル・データを Maximo Asset Management データベースに追加しないでください。`maxinst` コマンドを実行すると、Maximo Asset Management データベース内のデプロイメント後の構成情報とデータがすべて削除されます。

このタスクについて

インストール中に自動または手動でデータベースを作成した場合は、**maxinst** コマンドを使用して、そのデータベース・インスタンスにサンプル・データを作成することができます。初期構成パネルでオプションを選択するか、次の手順を使用することで、データベースにサンプル・データを追加できます。

手順

1. 既存のデータベースをバックアップします。
2. `install_home\IBM\SMP\Maximo\tools\maximo\en\maxdemo.dbtype.zip` ファイルを `unzip` します。 `dbtype` 変数を、Maximo Asset Management デプロイメント用に使用したデータベースのタイプに対応する拡張子に置き換えます。選択可能なオプションは、`ora`、`sqz`、または `db2` です。
3. `install_home\IBM\SMP\Maximo\tools\maximo\en\maxdemo.dbtype` ファイルを、初期デプロイメント時に構成した Maximo Asset Management データベースの名前に変更します。例えば、ファイルの名前を `max76db.db2` に変更します
4. コマンド・プロンプトを開き、`install_home\IBM\SMP\Maximo\tools\maximo` ディレクトリーに移動します。
5. データベースにサンプル・データを取り込みます。**maxinst** コマンドを実行するときは、表スペース名パラメーターを指定する必要があります。

`maxinst -stablespace -ttablesapacename -imax76db` 例えば、Oracle Database または Db2 の場合、`maxinst -sMAXDATA -tMAXDATA -imax76db` と入力します。SQL Server の場合、`maxinst -tPRIMARY -sPRIMARY -imax76db` と入力します。システムが `maximo.properties` ファイルからデータベース接続情報を読み取ります。`maximo.properties` ファイルは `install_home\IBM\SMP\Maximo\Applications\Maximo\Properties` ディレクトリーにあります。

6. 特定のパラメーター値を指定してコマンドを実行することで、データベースにデータを取り込みます。以下の **maxinst** データベース・パラメーターを使用します。

パラメーター	説明
-a	データベース別名。このパラメーターを指定しない場合、別名 <code>mxe.db.url.property</code> が使用されます。
-d	ログ・ファイル・ディレクトリー。 <code>-l</code> パラメーターを使用した場合、ログ・ファイルは指定したディレクトリーに送られます。それ以外の場合は、ログ・ファイルはログ・ディレクトリー (<code>install_home\IBM\SMP\Maximo\tools\maximo\logs</code> など) に送信されます。
-e	SQL を実行します。このパラメーターは必須であり、 <code>maxinst.bat</code> ファイルに既に組み込まれています。

パラメーター	説明
-f	プロパティ・ファイルのファイル名。このパラメーターを指定しない場合、 maximo.properties が使用されます。
-i	入力ファイルのファイル名 (パスおよび拡張子なし)。
-k	プロパティ・ファイルのディレクトリー。
-l	詳細なログ・ファイルを作成します。このパラメーターは maxinst.bat ファイルに既に組み込まれています。
-m2	SQL Server 用のオプション値: スtring用のカラム幅を 2 で乗算します。この値は、2 バイト文字セット用に必要です。
-o	-l パラメーターを使用する場合は、 -o パラメーターでログ・ファイルのファイル名を指定します。
-p	データベース接続用のパスワード。このパラメーターを指定しない場合、 mxe.db.password プロパティまたは MAXIMO が使用されます。MAXIMO を使用する場合には、大文字で入力する必要があります。
-s	必須の値: 索引を保管するための表スペース。
-t	必須の値: 表を保管するための表スペース。
-u	データベース接続用のユーザー名。このパラメーターを指定しない場合、 mxe.db.user プロパティまたは MAXIMO が使用されます。MAXIMO を使用する場合には、大文字で入力する必要があります。
-x	UNIX の場合は必須の値: UNIX 環境でドキュメント・リンク・ファイル分離文字を修正します。注: このパラメーターを使用せずに UNIX 環境をデプロイすると、添付ドキュメントが正しく機能しません。
-y	String用のカラム幅を 2 で乗算します。この値は、2 バイト文字セット用に必要です。

7. `install_home¥IBM¥SMP¥ETC` ディレクトリーから `install.properties` ファイルを開き、インストール関連のプロパティを指定します。これらのプロパティは、システムのプロパティ・アプリケーションからデータベースに追加することができます。

タスクの結果

Maximo Asset Management データベースにサンプル・データが取り込まれます。

maxinst コマンドの実行時にエラーが生じた場合は、
install_home¥IBM¥SMP¥Maximo¥tools¥maximo¥logs ディレクトリーのログ・ファイルを確認してください。**maxinst** コマンドが失敗する場合は、エラーを訂正し、**maxinst** コマンドを再実行して Maximo データベース スキーマのデプロイメントを完了してからアプリケーションを開始する必要があります。

第 12 章 EAR ファイルの管理

このセクションでは、Maximo Asset Management EAR ファイルの管理について説明します。

WebSphere Application Server Network Deployment で、Maximo Asset Management maximo.ear ファイルを手動で作成またはアンインストールするには、次の手順を使用します。

Maximo Asset Management のインストール・プログラムによって、インストール時にこれらの EAR ファイルはデプロイされますが、これらの EAR ファイルを手動で再作成することが望ましい場合があります。

- 初期インストールの後に maximo.properties ファイル内のいずれかのデータベース接続パラメーターを変更した場合は、maximo.ear ファイルを再ビルドしてから、これを WebSphere Application Server Network Deployment 内に再デプロイする必要があります。このシナリオでは、maximo.ear ファイルのみの再ビルドと再デプロイを行います。
- Maximo Asset Management は、WebSphere Application Server Network Deployment アプリケーション・サーバーにインストールする必要があります。ただし、Maximo Asset Management は、WebSphere Application Server Network Deployment クラスターのフレームワーク内部で実行することができます。Maximo Asset Management をクラスターにデプロイするには、Maximo Asset Management EAR ファイルをクラスターに再デプロイするか、またはインストール時に使用したアプリケーション・サーバーでクラスターを作成します。アプリケーション・サーバー内に Maximo Asset Management をすでにインストールしている場合に、クラスター内に再デプロイするには、MAXIMO アプリケーションをアンインストール (115 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment からのアプリケーションの手動アンインストール』) するか、またはクラスター内に MAXIMO アプリケーションをインストール (115 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment への手動によるアプリケーションのインストール』) するときにアプリケーションに新しい名前を付ける必要があります。
- Maximo Asset Management を開発環境にインストール済みの場合は、いずれかの時点でそのデプロイメントをテスト環境または実稼働環境にマイグレーションすることが必要になる場合があります。このシナリオでは、Maximo アプリケーションと Maximo ヘルプ・アプリケーションの両方を新しい環境にデプロイする必要があります。

両方のアプリケーションについて、115 ページの『WebSphere Application Server Network Deployment への手動によるアプリケーションのインストール』に記載のステップを実行してください。

EAR ファイルのビルド

例えば、初期インストールの後で、`maximo.properties` ファイルのデータベース接続パラメーターを変更する場合は、手動で Maximo Asset Management EAR ファイルを作成することができます。

このタスクについて

Maximo Asset Management EAR ファイルを手動でビルドするには、`buildmaximoear` コマンドを使用します。

Windows

```
install_home%maximo%deployment%buildmaximoear.cmd
```

Linux および UNIX

```
install_home/maximo/deployment/buildmaximoear.sh
```

手動によるワーク・センター WAR ファイルのデプロイ

ワーク・センター WAR ファイル `maximo-x.war` は、インストールおよび構成のプロセス中に自動的にビルドおよびデプロイされます。ただし、`buildmaximo-xwar` コマンドを使用して、ワーク・センター WAR ファイルを手動でビルドできます。

手順

1. 管理ワークステーションにログオンし、コマンド行を開き、`maximo-root%deployment` ディレクトリーに変更します。
2. `buildmaximo-xwar` コマンドを実行します。 `maximo-x.war` ファイルは、`maximo-root%deployment%default` ディレクトリーに作成されます。
3. `maximo-x.war` ファイルを、Maximo Asset Management アプリケーション・サーバーにデプロイします。

構成	アクション
簡易	<code>maximo-x.war</code> ファイルを、Maximo Asset Management アプリケーション・サーバーまたは UI クラスターにデプロイします。
単一のホスト名およびポートを使用して Maximo Asset Management と通信するプロキシ・サーバー	<code>maximo-x.war</code> ファイルを別個のアプリケーション・サーバーにデプロイします。
Maximo Asset Management サーバーへのクロス・オリジン要求	<code>maximo-x</code> アプリケーションをホストするアプリケーション・サーバーでアクセス制御ヘッダーを設定するサブレット・フィルターを使用して、CORS 設定を構成します。

タスクの結果

`maximo-x.war` ファイルをビルドしてデプロイした後で、デフォルトのコンテキスト・パス `/maximo-x` を使用してワーク・センターにアクセスします。

WebSphere Application Server Network Deployment からのアプリケーションの手動アンインストール

このセクションでは、Maximo Asset Management アプリケーションを WebSphere Application Server Network Deployment からアンインストールする方法について説明します。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールにログインして、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」と選択し、「MXServer」を選択して「停止」をクリックします。
2. 「アプリケーション」リンクをクリックします。
3. アンインストールするアプリケーションの隣のチェック・ボックスを選択します。デフォルトでは、Maximo Asset Management アプリケーションは、maximo および maximoiehs と名前が付けられています。
4. 「アンインストール」をクリックします。

WebSphere Application Server Network Deployment への手動によるアプリケーションのインストール

Maximo Asset Management アプリケーションを、WebSphere Application Server Network Deployment に追加できます。

手順

1. WebSphere Application Server Network Deployment 管理コンソールにログインします。
2. 「アプリケーション」 > 「新規アプリケーション」 > 「新規エンタープライズ・アプリケーション」を参照します。
3. アップロードおよびインストールする EAR、WAR、JAR、または SAR モジュールを指定するページで、「ローカル・ファイル・システム」を選択します。
4. maximo.ear ファイルのシステム上でのロケーションを参照して、「次へ」をクリックします。
5. 「詳細」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「アプリケーション・セキュリティー警告」パネルから、「続行」をクリックします。
7. ステップ 2: 「モジュールをサーバーにマップ」をクリックします。
8. 「クラスターおよびサーバー」フィールドにリストされたすべてのエントリを強調表示し、テーブルにリストされたモジュールのすべてのチェック・ボックスにチェック・マークを付け、「適用」をクリックします。
9. ステップ 11: 「Web モジュール用の仮想ホストをマップ」をクリックします。
10. テーブルにリストされた Web モジュールのすべてのチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
11. 「複数マッピングの適用」を展開します。

- 「仮想ホスト」メニューから仮想ホスト (例えば、maximo_host) を選択し、「適用」をクリックします。

図 13. Web モジュール用の仮想ホストのマップ

Step 11: Map virtual hosts for Web modules

Map virtual hosts for Web modules

Specify the virtual host for the Web modules that are contained in your application. You can either map all modules to the same virtual host or disperse them among several hosts.

Apply Multiple Mappings

To apply multiple mappings, follow the steps below.

- Select one or more check boxes in the table.
- Complete mappings and click the "Apply" button.

Virtual Host:
maximo_host

Select	Web module	Virtual host
<input type="checkbox"/>	MAXIMO Web Application	maximo_host
<input type="checkbox"/>	MBO Web Application	maximo_host
<input type="checkbox"/>	MEA Web Application	maximo_host
<input type="checkbox"/>	REST Web Application	maximo_host

- ステップ 15: 「ユーザーまたはグループへのセキュリティー・ロールのマップ」をクリックします。
- 「ロール」テーブルの maximouser のチェック・ボックスを選択し、次に「特別な対象のマップ」メニューから「全員」を選択します。
- ステップ 17: 「要約」をクリックし、要約情報を確認して、「終了」をクリックします。

第 13 章 コマンド・ラインによる構成

Maximo Asset Management には、コマンド・ラインからアクセスする構成プログラム (`Install_Home %ConfigTool%scripts%` ディレクトリーにある `reconfigurePae`) が含まれています。このコマンド・ライン構成プログラムは、Maximo Asset Management 構成プログラム・ユーザー・インターフェースと同じ処理を実行します。構成ツール・ユーザー・インターフェースを使用しないよう選択した場合は、コマンド・ライン構成を使用して構成値を素早く更新することができます。

フィックスパックをインストールする場合、または Maximo Asset Management をアップグレードする場合は、以前のデプロイメントで記録された値が構成プログラムで使用されます。これらの値は、管理システム上の `install.properties` ファイルと `maximo.properties` ファイルに格納されます。これらのファイルはそれぞれ、`install_home%etc` ディレクトリーと `install_home%maximo%applications%maximo%properties` ディレクトリーにあります。

元のデプロイメントで使用していたいずれかのシステムの環境を変更した場合、`install.properties` ファイルおよび `maximo.properties` ファイルに変更内容を記録する必要があります。一般に、このような種類の変更には、ホスト名の変更やパスワードの更新などがあります。

これらの値は手動で更新できます。また、構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールを使用して、既存のデプロイメントの構成値が変更された際にそれらの値を更新することもできます。構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールにパラメーターとして、または入力プロパティ・ファイルで指定されたプロパティにより、`maximo.properties` ファイルと `install.properties` ファイル内の既存のプロパティが置き換えられます。プロパティは、保存時に暗号化されます。

構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールでは、以下のタスクを実行できます。

- 元のデプロイメントのセキュリティー・モデルを変更する。例えば、Maximo Asset Management ベースのセキュリティーから WebSphere Application Server セキュリティーにマイグレーションすることができます。このオプションは、Oracle WebLogic Server では使用できません。
- 更新されたプロパティ値が必須の入力ドメインに従っていることを確認する。資格情報、ホスト名、使用可能ポートを検証します。
- 使用可能なサーバーがない状態で、データベースまたはアプリケーション・サーバーの構成設定を更新する。これらの値は、このシナリオでは検証できません。
- 既存の環境を複製し、構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールを使用して、新しいサーバーを使用するように管理ワークステーションを再構成する。複製環境は、元の環境と同じディレクトリー構造を使用する必要があります。
- (非複製) 環境を作成し、構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールを使用して、必須の成果物データベース、表スペース、アプリケーション・サーバー・オブジェクトなどをすべて作成する。

- 以前に構成されたデータベースから構成を削除する。

構成パラメーターの検証

Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management 構成プログラムがユーザー・インターフェース内の入力内容を検証するのと同じ方法で、入力の検証を行います。

Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムでは、以下の項目を検証できます。

- ホスト名または IP アドレスの形式が正しく、アクセス可能であること。
- ユーザー ID とパスワードが長さや文字セットの基準を満たしていること。
- 指定された資格情報が WebSphere Application Server の認証に使用されること。
- 指定されたポート値が対応するホスト上で listen されていること。ポート値に数字のみが含まれ、値が有効範囲内にあること。
- 指定したミドルウェア・インストール・ディレクトリが存在すること。
- 事前構成されたミドルウェアが製品データベースに対して認証できること。
- JMS キュー、SIB の宛先、データベース、表スペースなどの必須オブジェクトが存在すること。
- 必須の WebSphere Application Server Virtual Member Manager ユーザーが存在すること。
- WebSphere Application Server Virtual Member Manager ユーザーを作成できるだけの十分な権限があること。
- リモート・ログイン資格情報が有効であること。
- 指定したディレクトリ内に、データベース・オブジェクトを作成できるだけの十分なスペースがあること。

入力プロパティ・ファイル

Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムへの入力として、プロパティ・ファイルを使用することができます。

Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムには、以下のサンプル入力プロパティ・ファイルが付属しています。

- DB2_Sample_input.properties
- Oracle_Sample_input.properties
- SQLServer_Sample_input.properties
- WebSphere_App_Server_Sample_input.properties

これらのサンプル・ファイルは、`ibm\%smp%\configtools\samples` ディレクトリにあります。これらの各サンプル・ファイルには、特定のデータベースまたはアプリケーション・サーバー・タイプに関連するプロパティが含まれています。これらのファイルにはコメントとプロパティが含まれており、ご使用の環境の値で更新

することができます。その後、**-input** パラメーターを指定して、構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールへの入力として更新ファイルを使用することができます。

コマンド・ラインから指定された入力プロパティ、または入力プロパティ・ファイルに含まれる入力プロパティはすべて使用前に検証されます。検証が成功すると、指定した値で `maximo.properties` ファイルと `install.properties` ファイルが更新されます。

コマンド・ライン・インターフェースのパラメーター

コマンド・ライン構成プログラムで以下のパラメーターを使用して、環境を構成することができます。

表 7. *Maximo Asset Management* コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター

パラメーター名	説明
-action	<p>構成アクション。</p> <ul style="list-style-type: none"> • addLanguages - 現在のデプロイメントに言語を追加します。 • configureProducts - 初期インストールと構成が完了した後に、他の製品を構成します。このアクションを使用して、複数の製品をインストール後に構成する必要があります。また、アップグレード・シナリオでもこのアクションを使用する必要があります。 • configureProductsDBLite - DB Lite 機能を使用した初期インストールと構成が完了した後に、他の製品を構成します。このアクションでは、複数の製品をインストール後に構成することができます。また、アップグレード・シナリオでもこのアクションを使用できます。 • deployConfiguration - 初期インストールを構成します。このアクションでは、複数の製品をインストール後に構成することができます。このアクションの使用対象は新規インストールのみです。 • deployDatabaseConfiguration - コマンド入力を検証し、現行製品用の新規データベースの構成プロパティ値を定義します。 • deployJ2eeConfiguration - コマンド入力を検証し、現行製品用の新規アプリケーション・サーバーの構成プロパティ値を定義します。 • deployMiddlewareConfiguration - ミドルウェアの初期インストールを構成します。 • disableAppSecurity - アプリケーションに対してアプリケーション・セキュリティを無効にします。セキュリティは完全に <i>Maximo Asset Management</i> によって処理されます。このアクションは、mxo.useAppServerSecurity プロパティの値を 0 に設定します。この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。 • disableDB2TextSearch - Db2 データベース上の全文検索機能を無効にします。 • enableAppSecurity - アプリケーションに対してアプリケーション・セキュリティを有効にします。このアクションは、mxo.useAppServerSecurity プロパティの値を 1 に設定し、mxo.ldapUserManagement フラグを更新します。この値は、データベースの更新時にデータベースに書き込まれます。 • enableDB2TextSearch - Db2 データベース上の全文検索機能を有効にします。 • reapplyAppServerTuning - チューニング構成をアプリケーション・サーバーに再適用します。 • removeDatabaseConfiguration - 以前に構成済みのデータベースから製品構成情報を削除します。 • removeJ2EEConfiguration - 構成ツールによって追加されたアプリケーション・サーバー構成を削除します。 • updateApplication - データベースを更新し、アプリケーション EAR ファイルを再デプロイして、<i>Maximo Asset Management</i> アプリケーションを更新します。このアクションは、アップグレード・シナリオまたは既存の製品内への新規製品のインストールでは使用しないでください。

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • updateApplicationDBLite - DB Lite 機能を使用してデータベースを更新し、EAR を再ビルドおよび再デプロイします。 • updateDatabaseConfiguration - 既存のデータベース構成値を更新します。 • updateJ2eeConfiguration - 既存のアプリケーション・サーバー構成値を更新します。 • upgrade75Configuration - Maximo Asset Management 7.5 デプロイメントのデータベース・プロパティ検証を実行して、データベースへの有効な接続があることをチェックします。また、WebSphere Application Server を Maximo Asset Management 7.6 用に構成します。Maximo Asset Management 7.5 からアップグレードするときには、WebSphere Application Server の新規インスタンスを構成する必要があります。 • validateAndUpdateDatabaseConfiguration - 再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールの入力を検証し、既存のデータベース構成プロパティ値を更新します。 • validateAndUpdateJ2eeConfiguration - 再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールの入力を検証し、既存のデータベース構成プロパティ値を更新します。 • validateDatabaseConfiguration - 再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールへの入力として指定されたデータベース構成値を検証します。 • validateJ2eeConfiguration - 再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールへの入力として指定されたアプリケーション・サーバー構成値を検証します。 • removeConfiguration - 構成ツールによって実行されたデータベースおよびアプリケーション構成を削除します。 <p>Maximo Asset Management のセキュリティ設定を変更するアクションを実行すると、Maximo Asset Managementweb.xml ファイルも更新されます。</p>
-additionalLangs	<p>1 つ以上の言語をデプロイメントに追加します。</p> <p>このパラメーターは、入力として 1 つ以上のロケール略語を必要とします。例えば、スペイン語の場合は ES と入力します。</p>
-allowUpdateDB	データベース更新タスクを実行して、指定された言語をデータベースに追加します。
-applicationServerName	アプリケーション・サーバーの名前。
-applicationServerNode	アプリケーション・サーバー・ノードの名前。
-automatedbconfig	データベースの構成を自動化します。このパラメーターを使用すると、データベース・インスタンス、データベース・ユーザー、データベース、表スペース、データベース・スキーマが作成されます。
-automatej2eeconfig	WebSphere Application Server の構成を自動化します。このパラメーターを使用すると、JMS キューやプロファイルなどが作成されます。
-buildAndDeployEAR	アプリケーション EAR ファイルを再ビルドしてデプロイします。構成変更をアプリケーションに反映させるには、アプリケーション EAR ファイルを再ビルドして再デプロイする必要があります。
-buildears	アプリケーション EAR ファイルを再ビルドします。

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
-bypassJ2eeValidation	<p>アプリケーション・サーバーの検証と構成をスキップします。</p> <p>このパラメーターを使用する場合は、Maximo Asset Management をデプロイする前にアプリケーション・サーバーを手動で構成する必要があります。</p> <p>手動で構成されたアプリケーション・サーバーを検証するには、アプリケーション・サーバーの管理資格情報を使用してアプリケーション・サーバーにログインする必要があります。これらの資格情報を構成プログラムに指定したくない場合は、検証タスクをスキップして構いません。</p> <p>bypassJ2eeValidation パラメーターを使用する場合、以下のパラメーターも使用することはできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • applicationServerName • applicationServerNode • automatej2eeconfig • buildAndDeployEAR • createResourcesIfMissing • deploymaximoear • enableappsecurity • enableEnhancedNavigation • enableSkin • inputfile • j2eeserverport • usermanagement • wasuser • waspwd
-bypassUpdateDB	<p>データベース更新タスクを実行せず、インストール・プログラムがデータベースを更新しないように指定します。</p> <p>指定されたロケールの言語ファイルがアプリケーション EAR ファイルに組み込まれます。</p> <p>データベース更新タスクを実行し、別の方法で言語ファイルをデータベースに組み込んだ場合は、このパラメーターを使用します。</p>
-createResourcesIfMissing	構成時に見つからないリソースを作成します。
-db2_english_only	<p>英数字データが varchar データ型として格納されるように指定します。このパラメーターを使用すると、ユーザー・インターフェースでの使用言語が英語のみに制限されます。</p> <p>このパラメーターを使用しない場合は、英数字データが vargraphic データ型として格納されます。</p>
-db2textsearchport	Db2 サーバーが全文検索に使用するポート。
-dbname	データベースの名前。
-dbpwd	データベースにアクセスするユーザー ID のパスワード。
-dbrxapwd	リモート・ミドルウェア・サーバーへのアクセスに使用するユーザー ID のパスワード。
-dbrxouser	リモート・ミドルウェア・サーバーへのアクセスに使用するユーザー ID。
-dbserverhost	データベース・サーバーのホスト名。
-dbserverport	データベース サーバーのポート名。
-dbuser	データベースにアクセスするユーザー ID。
-dbvendor	<p>データベースのソフトウェア名。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DB2 • Oracle • SQLServer

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
-deleteInstanceUsersAndGroups	<p>インスタンス所有者とデータベース・ユーザーの ID、および関連するグループを Db2 サーバーから削除します。このパラメーターは、Microsoft SQL Server では使用できません。</p> <p>deleteInstanceUsersAndGroups パラメーターは、dbxouser および dbxapwd、dbuser および dbpwd の各パラメーターを必要とします。</p>
-deleteWASprofiles	アプリケーション用に作成された WebSphere Application Server プロファイルを削除します。
-deployDemoData	サンプル・データを含めます。
-deploymaximoear	Maximo のアプリケーション EAR ファイルをデプロイします。
-enableappsecurity	<p>アプリケーションに対してアプリケーション・セキュリティーを有効にします。このパラメーターは、enableAppSecurity アクションと同じように機能します。</p> <p>このアクションは、mxe.useAppServerSecurity プロパティの値を 1 に設定し、mxe.ldapUserManagement フラグを更新します。この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。</p>
-enableEnhancedNavigation	<p>ユーザー・インターフェースで拡張ナビゲーション・エレメント (アプリケーション間の切り替えや、レコード・リストの表示に関する拡張など) を有効にします。</p> <p>enableEnhancedNavigation パラメーターは、enableSkin パラメーターと一緒に使用する必要があります。</p> <p>拡張ナビゲーションを有効にした後、-enableSkin パラメーターを使用して別のユーザー・インターフェース・スキンを有効にした場合は、拡張ナビゲーションを再度有効にする必要があります。</p>
-enableMultiTenancy	<p>マルチテナンシー機能を有効にします。</p> <p>マルチテナンシーとは、テナントと呼ばれるクライアントからなる複数のグループにサービスを提供するよう構成できる、ソフトウェアまたはサービスを指します。各テナント・グループにサービスを提供するソフトウェア・インスタンスは、それらのテナントのみがアクセスできるデータを使用します。</p>

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
<p>-enableRestrictivePasswordPolicy</p>	<p>Maximo Asset Management ユーザーに対して、より厳しいパスワード・ポリシーを有効にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ログイン試行 <p>標準ポリシーの場合、アカウントがロックされるまでに試行できるログイン回数は 10 回です。</p> <p>厳しいポリシーの場合、アカウントがロックされるまでに試行できるログイン回数は 3 回です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード忘れリンクを使用できる回数 <p>標準ポリシーの場合、アカウントがロックされるまでにパスワード忘れリンクを使用できる回数は 5 回です。</p> <p>厳しいポリシーの場合、アカウントがロックされるまでにパスワード忘れリンクを使用できる回数は 3 回です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード有効期間 (日) <p>標準ポリシーの場合、パスワードの有効期限はありません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、パスワードの有効期限は 90 日です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワード有効期限の警告 (日数) <p>標準ポリシーの場合、アカウントのパスワード期限が近づいていることをユーザーに知らせる警告は出されません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、アカウントのパスワード期限が近づいていることをユーザーに知らせる警告が、期限切れになる 7 日前に出されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • パスワードしきい値 <p>標準ポリシーの場合、パスワードしきい値は強制されません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、270 文字のパスワードしきい値が強制されます。</p>

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • パスワードの最小文字長 <p>標準ポリシーの場合、パスワードは 6 文字以上でなければなりません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、パスワードは 8 文字以上でなければなりません。</p> • 連続文字の使用限度 <p>標準ポリシーの場合、パスワード内に同じ文字を連続して繰り返せる回数に制限はありません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、パスワード値内に同じ文字を連続して繰り返せるのは 2 回までです。</p> • パスワードをユーザー名と同じ値にできるか <p>標準ポリシーの場合、ユーザー名とパスワードに同じ値を使用することができます。</p> <p>厳しいポリシーの場合、ユーザー名とパスワードに同じ値を使用することはできません。</p> • パスワード内に必要な数字の数 <p>標準ポリシーの場合、パスワード値に数字を使用する必要はありません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、パスワード値に 1 つ以上の数字を使用する必要があります。</p> • パスワード内に必要な英字の数 <p>標準ポリシーの場合、パスワード値に英字を使用する必要はありません。</p> <p>厳しいポリシーの場合、パスワード値に 1 つ以上の英字を使用する必要があります。</p>

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
-enableSkin	<p>ユーザー・インターフェースの外観を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • classic <p>次のプロパティーが 0 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.homeButtonHeaders - mxe.webclient.systemNavBar - mxe.webclient.tabBreadCrumbs - mxe.webclient.verticalLabels <p>次のプロパティーが NULL に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.skin <ul style="list-style-type: none"> • IoT18 <p>拡張ナビゲーションが有効なときは、次のプロパティーが値 1 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.homeButtonHeaders - mxe.webclient.systemNavBar - mxe.webclient.tabBreadCrumbs <p>次のプロパティーが値 2 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.verticalLabels <p>拡張ナビゲーションを選択していないときは、次のプロパティーが値 0 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.homeButtonHeaders - mxe.webclient.systemNavBar - mxe.webclient.tabBreadCrumbs - mxe.webclient.verticalLabels <p>以下のプロパティーを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.skin=IoT18 <ul style="list-style-type: none"> • tivoli09 <p>拡張ナビゲーションが有効なときは、次のプロパティーが値 1 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.homeButtonHeaders - mxe.webclient.systemNavBar - mxe.webclient.tabBreadCrumbs - mxe.webclient.verticalLabels <p>拡張ナビゲーションが有効ではないときは、次のプロパティーが値 0 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.homeButtonHeaders - mxe.webclient.systemNavBar - mxe.webclient.tabBreadCrumbs - mxe.webclient.verticalLabels <p>以下のプロパティーを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - mxe.webclient.skin=tivoli09

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • tivoli13 <p>拡張ナビゲーションが有効なときは、次のプロパティが値 1 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - <code>mxe.webclient.homeButtonHeaders</code> - <code>mxe.webclient.systemNavBar</code> - <code>mxe.webclient.tabBreadCrumbs</code> - <code>mxe.webclient.verticalLabels</code> <p>拡張ナビゲーションが有効ではないときは、次のプロパティが値 0 に設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - <code>mxe.webclient.homeButtonHeaders</code> - <code>mxe.webclient.systemNavBar</code> - <code>mxe.webclient.tabBreadCrumbs</code> - <code>mxe.webclient.verticalLabels</code> <p>以下のプロパティを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - <code>mxe.webclient.skin=tivoli13</code>
-force	<p>入力プロパティ・ファイルによってプロパティ・ファイルが更新され、入力プロパティ・ファイルを使用したコマンド・ライン・ツールへのパラメーター入力の検証がスキップされることを示します。</p> <p>このパラメーターを使用した場合は、プロパティ更新タスクの確認プロンプトが出力されません。</p>
-inputfile	<p>環境内のプロパティ設定に使用されるプロパティ・ファイルの完全修飾パス。</p> <p>構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールのコマンド・ライン・パラメーターとして指定された値によって、入力ファイルの値が置き換えられます。</p>
-j2eeserverhost	<p>アプリケーション・サーバーのドメイン・マネージャーのホスト名。</p> <p>デプロイメント・マネージャーのホスト名またはサーバー・ポートが指定されている場合は、それに従って <code>thinwsadmin</code> スクリプトが更新されます。</p>
-j2eeserverport	<p>アプリケーション・サーバーのドメイン・マネージャー・サーバーのポート名。</p> <p>デプロイメント・マネージャーのホスト名またはサーバー・ポートが指定されている場合は、それに従って <code>thinwsadmin</code> スクリプトが更新されます。</p>
-j2eevendor	<p>アプリケーション・サーバー・ソフトウェア。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere • WebLogic
-removeCreatedArtifacts	<p>構成ツールによって作成された成果物をすべて削除します。例えば、構成プログラム、JMS オブジェクト、アプリケーション・サーバーによって作成されたディレクトリーなどが含まれます。</p>
-removeInstance	<p>Db2 と Oracle のデータベース・インスタンスを削除します。このパラメーターは、Microsoft SQL Server では使用できません。</p> <p>removeInstance パラメーターは、<code>dbrxouser</code> および <code>dbrxapwd</code>、<code>dbuser</code> および <code>dbpwd</code> の各パラメーターを必要とします。</p>
-setjdbcurl	<p>JDBC 接続の URL ストリングを設定します。</p>
-stopApplications	<p>言語を追加する際には、Maximo Asset Management アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。addLanguages アクションと共に stopApplications パラメーターを使用しない場合は、addLanguages アクションを使用する前に、アプリケーション・サーバーを手動で停止してください。</p> <p>このパラメーターは、WebSphere Application Server のみで使用されます。</p>
-unsetjdbcurl	<p>現在使用されている JDBC 接続の URL ストリングを削除します。</p>

表 7. Maximo Asset Management コマンド・ライン構成プログラムのパラメーター (続き)

パラメーター名	説明
-updatedb	updatedb 構成タスクを実行します。
-usermanagement	<p>既存の Maximo デプロイメントのセキュリティー構成を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • j2ee <p>Maximo ユーザーと Maximo グループの両方がアプリケーション・サーバーのセキュリティー・メカニズムによって管理されるように、Maximo のセキュリティー設定を変更します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • mixed <p>アプリケーション・サーバーのセキュリティー・メカニズムによってユーザーを管理し、Maximo を使用してグループを管理します。</p>
-validateForNewDeploy	<p>ミドルウェア構成を検証します。</p> <p>このパラメーターを指定すると、ツールがミドルウェアを構成しているかのように検証が実行されます。ディスク・スペースの利用可能状況やリモート・アクセスの資格情報などの追加の構成詳細がチェックされます。</p> <p>このパラメーターを指定しない場合は、環境内で既に確立されているコンポーネントのコンテキストで検証が実行されます。</p>
-validateUsers	<p>enableAppSecurity アクションと共に使用され、LDAP リポジトリ内にユーザーが存在するかどうかを検証されます。</p> <p>ユーザーが存在しない場合は、既存のセキュリティー・モデルが変更されません。</p>
-waspwd	WebSphere Application Server の管理者ユーザー ID のパスワード。
-wasrxapwd	リモートの WebSphere Application Server サーバー・ホストにアクセスするユーザー ID のパスワード。
-wasrxauser	リモートの WebSphere Application Server ホストへのアクセスに使用されるオペレーティング・システム・ユーザー ID。通常、このユーザー ID は Administrator または root として定義されます。
-wasuser	<p>WebSphere Application Server 管理者ユーザー ID。</p> <p>これは、WebSphere Application Server 管理クライアント・アプリケーションへのログインに使用されるユーザー ID です。通常、このユーザー ID は wasadmin として定義されます。</p>

コマンド・ライン構成プログラムのアクション

コマンド・ライン構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management の新規デプロイメントまたは既存のデプロイメントを構成します。

action updateDatabaseConfiguration

既存のデータベース構成値を更新するには、**updateDatabaseConfiguration** アクションを使用します。

```
-action updateDatabaseConfiguration [-force] [-buildAndDeployEAR]
[-dbserverhost hostname] [-dbserverport port number]
[-dbname database name] [-dbuser userid]
[-dbpwd password] [-dbrxauser userid]
[-dbrxapwd password] [-setjdbcurl jdbcurl]
[-unsetjdbcurl] [-inputfile path to input properties file]
```

action validateDatabaseConfiguration

現在のデータベース構成プロパティーを検証するには、**validateDatabaseConfiguration** アクションを使用します。このアクションを使用

すると、データベース・プロパティが更新される前または更新アクションの後に、それらのプロパティを検証することができます。

```
-action validateDatabaseConfiguration [-validateForNewDeploy]
[-dbserverhost hostname]
[-dbserverport port number]
[-dbname database name]
[-dbuser userid] [-dbpwd password]
[-dbrxouser userid]
[-dbrxapwd password] [-setjdbcurl jdbcurl]
[-unsetjdbcurl] [-enableMultiTenancy]
[-inputfile path to input properties file]
```

-validateForNewDeploy パラメーターを使用する場合は、以下のプロパティが必須となります。

- **Database.DB2.InstanceAdminGroup**
- **Database.DB2.InstanceAdminUserName** (Windows のみ)
- **Database.DB2.InstanceAdminPassword** (Windows のみ)
- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.FencedGroupName**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

action validateAndUpdateDatabaseConfiguration

再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールの入力を検証した後、既存のデータベース構成プロパティ値を更新するには、

validateAndUpdateDatabaseConfiguration アクションを使用します。

```
-action validateAndUpdateDatabaseConfiguration [-validateForNewDeploy] [-force]
[-buildAndDeployEAR] [-dbserverhost hostname]
[-dbserverport port number] [-dbname database name]
[-dbuser userid] [-dbpwd password]
[-dbrxouser userid] [-dbrxapwd password]
[-setjdbcurl jdbcurl] [-unsetjdbcurl] [-enableMultiTenancy]
[-inputfile path to input properties file]
```

-validateForNewDeploy パラメーターを使用する場合は、以下のプロパティが必須となります。

- **Database.DB2.InstanceAdminGroup**
- **Database.DB2.InstanceAdminUserName** (Windows のみ)
- **Database.DB2.InstanceAdminPassword** (Windows のみ)
- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.FencedGroupName**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

-enableMultiTenancy パラメーターは、**-validateForNewDeploy** パラメーターと一緒に使用する必要があります。

action deployDatabaseConfiguration

コマンド・ライン構成プログラムの入力を検証し、現在デプロイされている製品の
新規データベースの構成プロパティー値を定義するには、

deployDatabaseConfiguration アクションを使用します。このアクションは、
deployConfiguration アクションが成功した後に実行できます。

```
-action deployDatabaseConfiguration [-buildAndDeployEAR] [-createResourcesIfMissing]
[-dbserverhost hostname] [-dbserverport port number]
¥[-dbname database name] [-dbuser userid]
[-dbpwd password] [-dbrxouser userid] [-dbrxapwd password]
[-setjdbcurl jdbcurl] [-unsetjdbcurl] [-enableMultiTenancy]
[-deployDemoData]
[-inputfile path to input properties file] [-enableRestrictivePasswordPolicy]
```

-createResourcesIfMissing パラメーターを使用する場合は、以下のプロパティー
が必須となります。

- **Database.DB2.InstanceAdminGroup**
- **Database.DB2.InstanceAdminUserName** (Windows のみ)
- **Database.DB2.InstanceAdminPassword** (Windows のみ)
- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.FencedGroupName**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティーは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

action removeDatabaseConfiguration

以前に構成済みのデータベースから構成設定を削除するには、
removeDatabaseConfiguration アクションを使用します。

```
-action removeDatabaseConfiguration [-removeInstance] [-dbrxouser userid]
[-dbrxapwd password] [-dbuser userid]
[-dbpwd password] [-deleteInstanceUsersAndGroups]
```

action enableDB2TextSearch

Db2 データベースで全文検索機能を有効にするには、**enableDB2TextSearch** アクシ
ョンを使用します。

```
-action enableDB2TextSearch [-db2textsearchport port number]
```

action updateJ2eeConfiguration

既存のアプリケーション・サーバー構成値を更新するには、
updateJ2eeConfiguration アクションを使用します。

```
-action updateJ2eeConfiguration [-force] [-buildAndDeployEAR]
[-j2eeserverhost hostname] [-j2eeserverport port number]
[-wasuser userid] [-waspwd password]
[-applicationServerNode nodeName] [-applicationServerName appServerName]
[-inputfile path to input properties file]
```

action validateJ2eeConfiguration

再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールへの入力として指定されたアプリケーション・サーバー構成値を検証するには、**validateJ2eeConfiguration** アクションを使用します。

```
-action validateJ2eeConfiguration [-validateForNewDeploy] [-j2eeserverhost hostname]  
[-j2eeserverport port number] [-wasuser userid]  
[-waspwd password] [-applicationServerNode nodeName]  
[-applicationServerName appServerName] [-inputfile path to input properties file]
```

-validateForNewDeploy パラメーターを使用し、**WAS.SibPersistMessages** プロパティを `true` に設定する場合は、以下のプロパティが必須となります。

- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

action validateAndUpdateJ2eeConfiguration

再構成コマンド・ライン・インターフェース・ツールの入力内容を検証した後、既存のアプリケーション・サーバー構成プロパティ値を更新するには、

validateAndUpdateJ2eeConfiguration アクションを使用します。

```
-action validateAndUpdateJ2eeConfiguration [-force] [-validateForNewDeploy]  
[-buildAndDeployEAR] [-j2eeserverhost hostname]  
[-j2eeserverport port number] [-wasuser userid]  
[-waspwd password] [-applicationServerNode nodeName]  
[-applicationServerName appServerName]  
[-inputfile path to input properties file]
```

-validateForNewDeploy パラメーターを使用し、**WAS.SibPersistMessages** プロパティを `true` に設定する場合は、以下のプロパティが必須となります。

- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

action deployJ2eeConfiguration

コマンド・ライン構成プログラムの入力を検証し、現在デプロイされている製品の

新規アプリケーション・サーバーの構成プロパティ値を定義するには、

deployJ2eeConfiguration アクションを使用します。このアクションは、

deployConfiguration アクションが成功した後に実行できます。

```
-action deployJ2eeConfiguration [-bypassJ2eeValidation] [-buildAndDeployEAR]  
[-createResourcesIfMissing] [-j2eeserverhost hostname]  
[-j2eeserverport port number] [-wasuser userid]  
[-waspwd password] [-applicationServerNode nodeName]  
[-applicationServerName appServerName]  
[-inputfile path to input properties file]  
[-enableSkin Classic|tivoli09|tivoli13] [-enableEnhancedNavigation]
```

-**validateForNewDeploy** パラメーターを使用し、**WAS.SibPersistMessages** プロパティを **true** に設定する場合は、以下のプロパティが必須となります。

- **Database.DB2.FencedUser**
- **Database.DB2.FencedUserPassword**
- **Database.DB2.InstanceUserPassword**

これらのプロパティは、`install.properties` ファイルに手動で追加する必要があります。

action removeJ2EEConfiguration

以前に構成済みのアプリケーション・サーバーから構成設定を削除するには、**removeJ2EEConfiguration** アクションを使用します。削除されるアイテムには、ドメイン・マネージャーとアプリケーション・サーバーのプロファイルや、JMS オブジェクトなどがあります。

```
-action removeJ2EEConfiguration [-wasuser userid] [waspwd password]  
[-wasrxouser userid] [-wasrxapwd password]  
[-removeCreatedArtifacts] [-deleteWasProfiles]
```

action deployConfiguration

初期インストールを構成するには、**deployConfiguration** アクションを使用します。このアクションの使用対象は、Maximo Asset Management の新規インストール・シナリオのみです。このアクションでは、複数のミドルウェア製品をインストール後に構成することができます。**deployConfiguration** アクションを実行するには、**inputfile** パラメーターと、使用する構成値が指定された入力プロパティ・ファイルが必要です。

```
-action deployConfiguration [-inputfile path to input properties file]  
[-dbvendor Oracle|DB2|SQLServer] [-j2eevendor WebSphere|WebLogic]  
[-bypassJ2eeValidation] [-automatedbconfig] [-automatej2eeconfig]  
[-usermanagement j2ee|mixed] [-buildears] [-deploymaximoea]  
[-enableappsecurity] [-deployDemoData] [-enableMultiTenancy] [-db2_english_only]  
[-enableSkin Classic|tivoli09|tivoli13] [-enableEnhancedNavigation]  
[-enableRestrictivePasswordPolicy]
```

action removeConfiguration

構成ツールによって実行されたデータベースおよびアプリケーション構成を削除するには、**removeConfiguration** アクションを使用します。このアクションは、**removeJ2EEConfiguration** アクションおよび **removeDatabaseConfiguration** アクションを一緒に実行することに相当します。

```
-action removeConfiguration -dbuser userid  
-dbpwd password -wasuser userid  
-waspwd password [-wasrxouser userid]  
[-wasrxapwd password] [-dbrxouser userid]  
[-dbrxapwd password] [-removeInstance] [-deleteInstanceUsersAndGroups]  
[-removeCreatedArtifacts] [-deleteWasProfiles]  
[-inputfile path to input properties file]
```

action reapplyAppServerTuning

ベスト・プラクティスのアプリケーション・サーバー・チューニング設定を再適用するには、**reapplyAppServerTuning** アクションを使用します。

```
-action reapplyAppServerTuning [-wasuser userid]  
[-waspwd password] [-applicationServerNode nodeName]  
[-applicationServerName appServerName]
```

設定が適用された後にアプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

action enableAppSecurity

アプリケーションに対してアプリケーション・セキュリティを有効にするには、**enableAppSecurity** アクションを使用します。このアクションは、**mxe.useAppServerSecurity** プロパティーの値を 1 に設定し、**mxe.ldapUserManagement** プロパティーを **-usermanagement** パラメーターの設定に従って更新します。この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。このアクションの実行時には、maximouiweb、maxrestweb、meaweb、mboweb web.xml の各ファイルが更新されます。

```
-action enableAppSecurity -usermanagement {j2ee,mixed}  
[-buildAndDeployEAR] [-validateUsers] [-force]
```

action disableAppSecurity

アプリケーションに対してアプリケーション・セキュリティを無効にするには、**disableAppSecurity** アクションを使用します。このアクションは、**mxe.useAppServerSecurity** プロパティーの値を 0 に設定します。この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。このアクションを使用すると、ユーザーおよびグループに関するセキュリティ実装が Maximo セキュリティに戻ります。このアクションの実行時には、maximouiweb、maxrestweb、meaweb、mboweb web.xml の各ファイルが更新されます。

```
-action disableAppSecurity [-buildAndDeployEar] [-force]
```

action updateApplication

データベースを更新し、アプリケーション EAR ファイルを再デプロイしてアプリケーションを更新するには、**updateApplication** アクションを使用します。このアクションは、アップグレード・シナリオまたは既存の製品内への新規製品のインストールでは使用しないでください。

```
-action updateApplication [-updatedb] [-deploymaximoear]  
[-enableSkin Classic|tivoli09|tivoli13] [-enableEnhancedNavigation]  
[-enableRestrictivePasswordPolicy]
```

action addLanguages

デプロイメントの追加言語を構成するには、**addLanguages** アクションを使用します。

```
-action addLanguages [-additionalLangs locale1,locale2,locale3]  
[-buildAndDeployEAR] [-allowUpdateDB | -bypassUpdateDB] [-stopApplications]  
[-inputfile path to input properties file]
```

言語を追加する際には、アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。**addLanguages** アクションと共に **stopApplications** パラメーターを使用しない場合は、**addLanguages** アクションを使用する前に、アプリケーション・サーバーを手動で停止してください。

以下のロケール値がサポートされています。

表 8. 構成プログラムでサポートされるロケール

言語	ロケール
アラビア語	ar
ブラジル・ポルトガル語	pt_BR
クロアチア語	hr
チェコ語	cs
デンマーク語	da
オランダ語	nl
フィンランド語	fi
フランス語	fr
ドイツ語	de
ヘブライ語	he
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	ja
韓国語	ko
ノルウェー語	no
ポーランド語	pl
ロシア語	ru
中国語 (簡体字)	zh_CN
スロバキア語	sk
スロベニア語	sl
スペイン語	es
スウェーデン語	sv
中国語 (繁体字)	zh_TW
トルコ語	tr

action configureProducts

初期インストールおよび構成後にインストールされる他の製品を構成するには、**configureProducts** アクションを使用する必要があります。このアクションは、既存の製品のフルインストールおよび構成が正常に完了したことを検証してから、処理を続行します。このアクションでは、複数の製品をインストール後に構成することができます。アップグレード・シナリオでこのアクションを使用する必要があります。

```
-action configureProducts [-updatedb] [-buildears] [-deploymaximoear]
```

action deployMiddlewareConfiguration

ミドルウェアをインストール後に構成するには、**deployMiddlewareConfiguration** アクションを使用します。

```
-action deployMiddlewareConfiguration [-inputfile path to input properties file]
```

以下のプロパティは、**deployMiddlewareConfiguration** アクションで使用される入力プロパティ・ファイルに含めることができます。

表 9. *deployMiddlewareConfiguration* アクションの入力ファイルに使用可能なプロパティ

カテゴリー	プロパティ
HTTP Server のプロパティ	IHS.HTTPPort
	IHS.InstallLocation
	IHS.WebserverName
LDAP サーバーのプロパティ	LDAP.AdminDN
	LDAP.AdminPassword
	LDAP.BaseEntry
	LDAP.GroupSuffix
	LDAP.OrgContainerSuffix
	LDAP.ServerHostName
	LDAP.ServerPort
	LDAP.UserSuffix
一般的なミドルウェア構成プロパティ	LDAP.Vendor
	MW.Operation
WebSphere のプロパティ	PLG.InstallLocation
	WAS.AdminPassword
	WAS.AdminUserName
	WAS.ApplicationServerName
	WAS.CellName
	WAS.DeploymentManagerNodeName
	WAS.DeploymentManagerProfileName
	WAS.InstallLocation
	WAS.LDAPAutomatedConfig
	WAS.ND.AutomateConfig
WAS.NodeName	
WAS.ServerProfileName	
WAS.SOAPConnectorPort	
WCT.InstallLocation	

action upgrade75Configuration

upgrade75Configuration アクションは、Maximo Asset Management 7.5 デプロイメントのデータベース・プロパティ検証を実行して、データベースへの有効な接続があることを検査します。また、WebSphere Application Server を Maximo Asset Management 7.6 用に構成します。Maximo Asset Management 7.5 からアップグレードするときには、WebSphere Application Server の新規インスタンスを構成する必要があります。

```
-action upgrade75Configuration [-inputfile path to input properties file]
[-dbvendor <Oracle|DB2|SQLServer>] [-j2eevendor <WebSphere|WebLogic>]
[-automate.j2eeconfig] [-usermanagement <j2ee|mixed>]
[-enableappsecurity] [-bypassJ2eeValidation]
```

action updateApplicationDBLite

DB Lite 機能を使用してデータベースを更新し、EAR を再ビルドおよび再デプロイするには、**updateApplicationDBLite** アクションを使用します。このアクションは、アップグレード・シナリオまたは既存の製品内への新規製品のインストールでは使用しないでください。

```
-action updateApplicationDBLite [-preprocessor] [-updatedb]
[-buildears] [-deploymaximoeear] [-enableSkin tivoli09|tivoli13|classic]
[-enableEnhancedNavigation] [-disableEnhancedNavigation]
[-enableRestrictivePasswordPolicy]
```

-preprocessor 属性を使用して、クラス・ファイルがアプリケーション EAR ファイルにビルドされる前にクラス・ファイルを準備できます。Lite ではないバージョンの **updatedb** コマンドもこの作業を実行できますが、このコマンドではアプリケーション・サーバーを停止する必要があります。**-preprocessor** 属性を使用する場合は、クラス・ファイルの準備中にアプリケーション・サーバーを停止する必要がないため、ご使用の環境でのダウンタイムが減少します。

-updatedb 属性を使用して、データベースを独立して更新できます。この属性を使用する場合は、アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。**updatedb** プロセスにはクラス・ファイルの準備が含まれないため、アプリケーション・サーバーのダウンタイムが短縮されます。

-preprocessor 属性と **-updatedb** 属性は相互に排他的です。これらを一緒に使用することはできません。**-buildears** 属性は、**-preprocessor** 属性と組み合わせて使用する必要があります。**-deploymaximoeear** 属性は、**-updatedb** 属性と組み合わせて使用する必要があります。

action configureProductsDBLite

DB Lite 機能を使用した初期インストールと構成が完了した後に製品を構成するには、**configureProductsDBLite** アクションを使用する必要があります。このアクションでは、複数の製品をインストール後に構成することができます。アップグレード・シナリオではこのアクションを使用する必要があります。

```
-action configureProductsDBLite [-preprocessor] [-updatedb]
[-buildears] [-deploymaximoeear]
```

-preprocessor 属性を使用して、クラス・ファイルがアプリケーション EAR ファイルにビルドされる前にクラス・ファイルを準備できます。Lite ではないバージョンの **updatedb** コマンドもこの作業を実行できますが、このコマンドではアプリケーション・サーバーを停止する必要があります。**-preprocessor** 属性を使用する場合は、クラス・ファイルの準備中にアプリケーション・サーバーを停止する必要がないため、ご使用の環境でのダウンタイムが減少します。

-updatedb 属性を使用して、データベースを独立して更新できます。この属性を使用する場合は、アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。**updatedb** プロセスにはクラス・ファイルの準備が含まれないため、アプリケーション・サーバーのダウンタイムが短縮されます。

-preprocessor 属性と -updatedb 属性は相互に排他的です。これらを一緒に使用することはできません。-buildears 属性は、-preprocessor 属性と組み合わせて使用する必要があります。-deploymaximoear 属性は、-updatedb 属性と組み合わせて使用する必要があります。

構成プログラムのプロパティ

コマンド・ライン構成プログラムで Maximo Asset Management のプロパティを変更する際には、input.properties ファイルを使用します。プロパティ値を Windows パスに設定する場合は、円記号 (¥) を 2 つ続けて使用する必要があります (例: C:¥¥IBM¥¥WebSphere¥¥AppServer)。プロパティ値を Linux または UNIX パスに設定する場合は、スラッシュを 1 つ使用します。例えば、/opt/IBM/db2/V10.5 などです。

表 10. Maximo Asset Management のプロパティ

カテゴリー	プロパティ	定義
共用データベースのプロパティ	mx.db.schemaowner	データベース・スキーマのオーナー。 例えば、maximo などです。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	mx.db.user	データベースにアクセスするユーザー ID。
	mx.db.password	データベースにアクセスするユーザー ID のパスワード。
	Database.RemoteAccessUserName	データベースのリモート構成に使用されるデータベース・サーバー・システム・ユーザー ID。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.RemoteAccessPassword	Database.RemoteAccessUserName に指定されたユーザー ID のパスワード。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
Db2 のプロパティ	Database.DB2.ServerHostName	Db2 サーバーの完全修飾ホスト名。 例えば、mymachine.mydomain.com などです。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	Database.DB2.ServerPort	データベース・サーバーのポート。 例えば、50005 とします。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	Database.DB2.InstanceName	データベース・インスタンスの名前。 例えば、ctginst1 とします。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.DB2.InstanceUserPassword	データベース・インスタンス所有者のパスワード。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.DB2.InstanceAdminGroup	インスタンス管理者のグループ。 例: ctgiadm1。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.DB2.DatabaseName	データベースの名前。 例えば、maxdb76 などです。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.InstallLocation	<p>データベースのインストール・ロケーション。</p> <p>例えば、/opt/IBM/db2/V10.5 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.LogFileSize	<p>トランザクション・ログのサイズを設定します。</p> <p>例えば、8192 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.AppCtlHeapSize	<p>アプリケーション制御ヒープ・サイズ。</p> <p>例えば、1024 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.ApplHeapSize	<p>アプリケーション・ヒープ・サイズ。</p> <p>例えば、1024 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.LockListSize	<p>ロック・リストに割り振られるサイズ。</p> <p>例えば、AUTOMATIC です。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.LogSecond	<p>2 次ログ・ファイルの許容数。</p> <p>例えば、100 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.ServiceUser	<p>自動始動に使用されるユーザー ID。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、Db2 が Windows システムにインストールされている場合のみです。</p>
	Database.DB2.ServicePassword	<p>Database.DB2.ServiceUser のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、Db2 が Windows システムにインストールされている場合のみです。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.ExtentSize	<p>エクステント (ページのグループ) ごとのページ数。</p> <p>例えば、32 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.FencedUser	<p>Linux または UNIX システムでの Db2 の Fenced ユーザー ID。</p> <p>例えば、db2fenc1 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.FencedUserPassword	<p>Linux または UNIX システム上の Db2 の Fenced ユーザー ID のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.FencedGroupName	<p>データベース Fenced ユーザーのデフォルト・グループ。</p> <p>例えば、ctgfgrp1 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、Db2 が Linux または UNIX システムにインストールされている場合のみです。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.AuthType	<p>Db2 がユーザーを認証するために使用する方式。</p> <p>例えば、server とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.DataTablespaceName	<p>製品データベースの Db2 表スペース名。</p> <p>例えば、maxdata とします。</p>
	Database.DB2.BufferPoolName	<p>Db2 バッファ・プール名。</p> <p>例えば、MAXBUFFERPOOL とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.BufferPoolSize	<p>バッファ・プールのサイズ。</p> <p>例えば、4096 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.DataTablespaceLocation	<p>Db2 データベース表スペースのデータ・ファイルのロケーション。</p> <p>例えば、CTGDAT などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.DataTablespaceSize	<p>表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、5000 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.TempTablespaceName	<p>一時表スペース名。</p> <p>例えば、maxtemp とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.TempTablespaceLocation	<p>一時表スペースのロケーション。</p> <p>例えば、CTGTMP などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.TempTablespaceSize	<p>一時表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、1000 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.IndexTablespaceName	<p>インデックス表スペース名。</p> <p>例えば、maxdata とします。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.DB2.IndexTablespaceLocation	<p>インデックス表スペースのロケーション。</p> <p>例えば、CTGDAT などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.IndexTablespaceSize	<p>インデックス表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、5000 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.DB2.InstanceAdminUserName	<p>管理ユーザーまたはデータベース・インスタンス。</p> <p>例えば、db2admin などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>UNIX および Linux プラットフォームの場合、この値はインスタンス所有者と同じでなければなりません。</p>
	Database.DB2.InstanceAdminPassword	<p>Database.DB2.InstanceAdminUserName に指定したユーザー ID のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。createResourcesIfMissing</p>
Oracle	Database.Oracle.SchemaPassword	スキーマ所有者のパスワード。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.Oracle.InstanceName	Oracle インスタンス名。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	Database.Oracle.SoftwareOwner	ソフトウェア・インストールのオーナー。 例えば、oracle とします。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.Oracle.SoftwareOwnerPassword	Database.Oracle.SoftwareOwner にリストされたユーザー ID のパスワード。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.Oracle.InstallLocation	Oracle のインストール・ロケーション。例えば、/opt/app/oracle/product/10.2.0/db_1 などです。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.Oracle.DataTablespaceName	製品データベースの Oracle 表スペース名。 例えば、maxdata とします。
	Database.Oracle.InstanceLocation	Oracle インスタンスのロケーション。 例えば、/opt/app/oracle/product/10.2.0/db_1 とします。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.Oracle.DataTablespaceSize	<p>表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、5000 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.Oracle.TempTablespaceName	<p>一時表スペース名。</p> <p>例えば、maxtemp とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.Oracle.TempTablespaceSize	<p>一時表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、1000 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.Oracle.IndexTablespaceName	<p>インデックス表スペース名。</p> <p>例えば、maxdata とします。</p>
	Database.Oracle.IndexTablespaceSize	<p>インデックス表スペースのサイズ。MB 単位で測定されます。</p> <p>例えば、1000 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.Oracle.ServerHostName	Oracle サーバーの完全修飾ホスト名。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.Oracle.ServerPort	Oracle で使用するポート番号。 例えば、1521 とします。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	Database.DBUserName	Oracle DBA ユーザー名。 例えば、sys とします。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.DBAPassword	Database.DBUserName にリストされたユーザー ID のパスワード。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
Microsoft SQL Server	Database.SQL.DatabaseName	データベースの名前。 例えば、maxdb76 などです。 この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。
	Database.SQL.DataFileName	データベースに使用されるデータ・ファイルの名前を指定する手段。 例えば、maxdb76_dat などです。 このプロパティが必須となるのは、 createResourcesIfMissing 、 validatefornewdeploy 、 automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。
	Database.SQL.DataFileMaxSize	データベースのデータ・ファイルの最大サイズ。

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.SQL.DataFileSize	<p>データベースのデータ・ファイルの初期サイズ (KB 単位)。</p> <p>例えば、5000 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.SQL.LogFileName	<p>データベース・トランザクション・ログ・ファイルの名前を指定する手段。</p> <p>例えば、maxdb76_log などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.SQL.LogFileSize	<p>Microsoft SQL Server トランザクション・ログ・ファイルのサイズ。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.SQL.DataFilegroupName	<p>データベース論理名ファイル・グループ。</p> <p>例えば、PRIMARY とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.SQL.ServerHostName	<p>データベース・サーバーのホスト名。</p> <p>例えば、myhost.mydomain.com などです。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	Database.SQL.ServerPort	<p>データベース・サーバーのポート。</p> <p>例えば、1433 とします。</p> <p>この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。</p>
	Database.SQL.InstanceAdminUserName	<p>Microsoft SQL Server インスタンスの管理ユーザー。インストール時にデータベースとデータベース・ユーザーを作成および変更するために使用されます。</p> <p>例えば、sa などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
	Database.SQL.InstanceAdminPassword	<p>管理ユーザー・パスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatedbconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p>
WebSphere Application Server Network Deployment	WAS.InstallLocation	<p>WebSphere Application Server Network Deployment のインストール・ロケーション。</p> <p>例えば、 C:\IBM\WebSphere\AppServer などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.DeploymentManagerHostName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーのホスト名。</p> <p>この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。</p>
	WAS.DeploymentManagerProfileName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment プロファイル名。</p> <p>例えば、ctgDmgr01 などです。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.DeploymentManagerProfileRoot	<p>WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルのロケーション。</p> <p>例: C:\¥¥ IBM¥¥WebSphere¥¥AppServer¥¥profiles¥¥ctgDmgr01</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.NodeName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment ノード名。</p> <p>例えば、ctgNode01 とします。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.ApplicationServerName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment アプリケーション・サーバー名。</p> <p>例えば、MXServer などです。</p> <p>この値は、更新時にデータベースに書き込まれます。</p>
	WAS.CellName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment セル名。</p> <p>例えば、ctgCell01 とします。</p>
	WAS.AdminUserName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment 管理者名。</p> <p>例えば、wasadmin などです。</p>
	WAS.AdminPassword	<p>WebSphere Application Server Network Deployment 管理者パスワード。</p>
	WAS.RemoteAccessUserName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーのシステム・ユーザー ID。Integrated Solutions Console の Web アーカイブ・ファイルのコピーや鍵ストアのフェッチなどのタスクに使用されます。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.RemoteAccessPassword	<p>WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーのシステム・ユーザー・パスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SOAPConnectorPort	<p>WebSphere Application Server Network Deployment デプロイメント・マネージャーの SOAP ポート。</p> <p>例えば、8879 とします。</p>
	WAS.VirtualHost	<p>WebSphere Application Server Network Deployment 仮想ホストの名前。</p> <p>例えば、maximo_host とします。</p>
	WAS.WebServerHostName	<p>HTTP サーバーが配置されているホスト名。</p>
	WAS.SibName	<p>サービス統合バスの名前。</p> <p>例えば、intjmsbus とします。</p>
	WAS.SibHiMsg	<p>サービス統合バスの最大メッセージ数。</p> <p>例えば、500000 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatej2eeconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.WebServerName	<p>WebSphere Application Server Network Deployment Web サーバーの名前。WebSphere Application Server Network Deployment 内から HTTP サーバーを管理するために使用されます。</p> <p>例えば、webserver1 とします。</p>
	WAS.SibPersistMessages	<p>サービス統合バス・メッセージが製品データベースまたはローカル Derby データベースのいずれかで保持されるかどうかを示すバイナリー値。</p> <p>値 true は、メッセージが保持されることを示します。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、createResourcesIfMissing、validatefornewdeploy、automatej2eeconfig のいずれかのパラメーターが指定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDSName	<p>サービス統合バスのパーシスタンス・ストアにアクセスするために作成されるサービス統合バスのデータ・ソース名。</p> <p>例えば、intjmsds とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDBName	<p>サービス統合バス・メッセージ・データベースの名前。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDBInstance	<p>サービス統合バス・データベースのインスタンス名。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDBInstancePassword	<p>SIB IBM Db2 データ・ストアの IBM Db2 インスタンス・ユーザー・パスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDBServerName	<p>サービス統合バス・メッセージ・データベースをホストするシステムのサーバー名。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDBServerPort	<p>サービス統合バス・メッセージが格納されるデータベースのデータベース・サーバー・ポート。</p> <p>例えば、50005 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDBUserName	<p>サービス統合バス・メッセージのパーシスタンス・データ・ストア・データベースへのアクセスに使用されるユーザー ID。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDBUserPass	<p>WAS.SibDBUserName に指定されたユーザー ID のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合のみです。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDBInstallDir	<p>サービス統合バス・データベースのインストール・ロケーション。</p> <p>例: c:\program files\ibm\sqllib</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDbFencedUser	<p>サービス統合バス・データベースの Fenced ユーザー ID。このプロパティの使用対象は、Linux および UNIX システム上でホストされるデータベースのみです。</p> <p>例えば、db2fenc1 とします。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、データベースが Linux または UNIX システム上でホストされる場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDbFencedPassword	<p>サービス統合バス・データベースの Fenced ユーザー ID のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、データベースが Linux または UNIX システム上でホストされる場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDbInstanceAdminUser	<p>サービス統合バス・データベースのインスタンス・オーナー。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、データベースが Windows システム上でホストされる場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDbInstanceAdminPassword	<p>サービス統合バス・データベースのインスタンス・オーナーのパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、データベースが Windows システム上でホストされる場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.SibDbRemoteAccessUser	<p>サービス統合バスのリモート構成に使用されるデータベース・サーバー・システム・ユーザー。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.SibDbRemoteAccessPassword	<p>WAS.SibDbRemoteAccessUser に指定されたユーザー ID のパスワード。</p> <p>このプロパティが必須となるのは、WAS.SibPersistMessages プロパティが true に設定されている場合です。</p> <p>このプロパティは、以下のいずれかのプロパティで指定されたプロパティ・ファイル内で必須となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WAS.MIFSIBPropertiesFile • WAS.CronSIBPropertiesFile • WAS.UISIBPropertiesFile
	WAS.VmmGroupRDN	<p>Virtual Member Manager グループのロケーションの相対識別名。</p> <p>例えば、ou=groups,ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。</p>
	WAS.VmmUserRDN	<p>Virtual Member Manager ユーザーのロケーションの相対識別名。</p> <p>例えば、ou=users,ou=SWG,o=IBM,c=US と入力します。</p>
	WAS.UseClustersForDeploy	<p>アプリケーション EAR をクラスターにデプロイします。</p> <p>例えば、true とします。</p>
	WAS.UIClusterName	<p>UI タスクを管理するクラスターの名前。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.WAS.UIEnableJMS	<p>UI クラスターの Maximo Enterprise Adapter の JMS を有効または無効にします。</p> <p>例えば、true とします。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.UISIBPropertiesFile	<p>メッセージを UI クラスター・バスに保持している場合に、SIB 永続性プロパティが格納されるファイル。</p> <p>例: c:¥¥sibdb_ui.properties。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.CronClusterName	<p>クローン・タスクを管理するクラスターの名前。</p> <p>例えば、maximocron などです。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.CronEnableJMS	<p>クローン・タスク・クラスターの Maximo Enterprise Adapter の JMS を有効にします。</p> <p>例えば、true とします。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.CronSIBPropertiesFile	<p>メッセージをクローン・クラスター・バスに保持している場合に、SIB 永続性プロパティが格納されるファイル。</p> <p>例: c:¥¥sibdb_cr.properties。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.ReportingClusterName	<p>レポート・タスクを管理するクラスターの名前。</p> <p>例えば、maximorpt などです。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	WAS.MIFClusterName	<p>Maximo 統合フレームワーク・タスクを管理するクラスターの名前。</p> <p>例えば、maximomea などです。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.MIFEnableJMS	<p>Maximo 統合フレームワーク・タスク・クラスターの Maximo Enterprise Adapter の JMS を有効にします。</p> <p>例えば、true とします。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
	WAS.MIFSIBPropertiesFile	<p>メッセージを Maximo 統合フレームワーク・クラスター・バスに保持している場合に、SIB 永続性プロパティが格納されるファイル。</p> <p>例えば、c:¥¥sibdb_mif.properties などです。</p> <p>WAS.UseClustersForDeploy が true に設定されている場合は、このパラメーターの値を設定します。</p>
マルチテナンシー	mt.sysprovider.tenantcode	<p>マルチテナンシー・システム・プロバイダーのテナント・コード ID。</p> <p>例えば、MTM などです。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p>
	mt.sysprovider.desc	<p>マルチテナンシー・マネージャーの説明。</p>
	mt.configmanager.adminuserid	<p>マルチテナンシー構成マネージャーのユーザー ID。</p> <p>例えば、maxadmin などです。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p> <p>この値は、mtadminuser ユーザーと同じ値にすることができます。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリ	プロパティ	定義
	mt.configmanager.adminpassword	<p>マルチテナンシー構成マネージャーのユーザー ID のパスワード。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p> <p>この値は、mtadminpwd と同じ値にすることができます。</p>
	mt.configmanager.tenantcode	<p>マルチテナンシー構成マネージャーのテナント・コード ID。</p> <p>例えば、GA などです。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p>
	mt.configmanager.desc	<p>マルチテナンシー・グローバル管理者の説明。</p>
	mt.configmanager.dbuser	<p>データベースへの接続に使用されるマルチテナンシー構成マネージャーのユーザー ID。</p> <p>例えば、ADMIN などです。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p> <p>この値は、mtdbuser ユーザーと同じ値にすることができます。</p>
	mt.configmanager.dbpassword	<p>データベースへの接続に使用されるマルチテナンシー構成マネージャーのユーザー ID のパスワード。</p> <p>マルチテナンシーを有効にする場合は、このプロパティが必須となります。</p> <p>この値は、mtdbpwd と同じ値にすることができます。</p>
	mxe.mt.enabled	<p>マルチテナンシーが有効かどうかを示す値。</p> <p>例えば、値 1 はマルチテナンシーが有効であることを示します。値 0 は、当該製品に対してマルチテナンシーが無効であることを示します。</p>
	mxe.mt.db.adminuser	<p>このプロパティはもう使用されていません。</p>

表 10. Maximo Asset Managementのプロパティ (続き)

カテゴリー	プロパティ	定義
	mxe.mt.db.adminrole	<p>テナントが初回にプロビジョンされたときにテンプレート・データへのアクセス権を持つ管理者ロール。デフォルト値は MXTMPLT です。ただし、ユーザーは異なるロールを作成し、その値をこのプロパティに対して指定できます。</p>
	mxe.mt.demo.extratenants	<p>マルチテナンシーを有効にする場合に作成するサンプル・テナントの数。</p> <p>例えば、10 などです。</p> <p>このプロパティは、maxinst 操作時に maximo.properties ファイル内に設定されます。</p>

第 14 章 バックアップとリストア

すべての重要なビジネス・データと同様に、Maximo Asset Management データをバックアップするプロセスとスケジュールを確立することをお勧めします。

ミドルウェア・アプリケーション・データのバックアップとリストアは、該当する製品の資料で説明されている方法を使用して行うことが重要です。また、Maximo Asset Management 管理ワークステーションにあるデータのバックアップのプロセスを確立することも重要です。

Maximo Asset Management 管理ワークステーションのデフォルト・インストール・ディレクトリーは C:\ibm です。このディレクトリーには、Maximo Asset Management のデプロイメントで重要なファイルが格納されています。これには、ご使用の環境のすべてのクラス・ファイルとそこで実行されたカスタマイズ、現在のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル、およびご使用の環境で使用されるプロパティー・ファイルとインストール・ツールが含まれます。初期デプロイメントの直後に Maximo Asset Management 管理ワークステーション・データのバックアップを計画し、継続的に定期バックアップをスケジュールしてください。

管理ワークステーションのバックアップ

すべての Maximo Asset Management ミドルウェア・アプリケーションおよび Maximo Asset Management 管理ワークステーションを定期的にバックアップすることをお勧めします。

このタスクについて

管理ワークステーションのデフォルトのインストール・ディレクトリーは %ibm です。このディレクトリーには、Maximo Asset Management デプロイメントの重要なファイルが入っています。

特に、管理ワークステーションは以下の項目を含んでいます。

- ご使用の環境で実行されたクラス・ファイルおよびカスタマイズ
- アプリケーション・サーバーにデプロイされた現在のエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル
- ご使用の環境で使用されるプロパティー・ファイルおよびインストール・ツール

管理ワークステーションをバックアップする際、同時にデータベースをバックアップすることが重要です。リストアする際、ペアになった管理ワークステーションのバックアップをリストアすると同時に、データベースのバックアップをリストアします。

重要な Maximo Asset Management 情報をバックアップするには、以下のステップを実行します。

手順

1. ミドルウェアのベンダーから提供されている説明に従って、Maximo Asset Management データベース、J2EE サーバー、および認証サーバーの情報をバックアップします。
2. インストール・ディレクトリーのバックアップを作成します。 デフォルトでは、このディレクトリーは ¥IBM¥SMP です。 すべてのファイル・アクセス権が保持されるようにします。
3. IBM Business Process Manager (BPM) でのリカバリーのために IBM Installation Manager エージェント・データと共有ファイルをバックアップします。 詳しくは、IBM サポート・サイト (<http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21665878>) を参照してください。

管理ワークステーションのリストア

このセクションでは、以前にバックアップした Maximo Asset Management 管理ワークステーションの情報をリストアする方法について詳しく説明します。この情報を使用して、既存の Maximo Asset Management 管理ワークステーションを以前の状態に戻すことができます。

始める前に

管理ワークステーションをバックアップした際に作成されたデータベースのバックアップをリストアすることが重要です。データベースのバックアップは、そのペアとなった管理ワークステーションのバックアップと共にリストアする必要があります。

このタスクについて

Maximo Asset Management の情報を管理ワークステーションにリストアするには、以下の手順を実行します。

手順

1. リストアする管理ワークステーションのバックアップとペアになったデータベースのバックアップをリストアします。
2. 既存の管理ワークステーションに製品をインストールする際に使用したユーザー ID を使用してターゲット管理システムにログオンします。
3. Maximo Asset Management インストール済み環境のファイルおよびディレクトリーを、ターゲット管理システムのファイル・システムにコピーします。元のインストールのディレクトリー構造を維持する必要があります。例えば、既存の管理システム上の Maximo Asset Management インストール・ディレクトリーが ¥IBM¥SMP の場合、それらのファイルをターゲット管理ワークステーション上の ¥NewAdminWS¥IBM¥SMP ディレクトリーにコピーすることはできません。

第 15 章 製品のアンインストール

Maximo Asset Management バージョン 7.6.1 のアンインストールでは、Maximo Asset Management と関連ミドルウェアから構成値が削除された後、Maximo Asset Management がアンインストールされます。

Maximo Asset Management のアンインストールは包括的な手順であり、個々のコンポーネントやプロセス・マネージャー（他の製品によってデプロイされたプロセス・マネージャーなど）の部分的な削除はサポートしていません。以前にデプロイされた製品のプロセス・マネージャーも、Maximo Asset Management をアンインストールするときに削除されます。

Maximo Asset Management は、Maximo Asset Management インストール・プログラムおよび構成プログラムを指示通りに使用することによってのみ、アンインストールできます。「プログラムの追加と削除」パネルを使用するなど、他の方法で Maximo Asset Management をアンインストールしようとしないでください。

Maximo Asset Management のアンインストール・プロセスが完了したら、Maximo Asset Management のインストール・プログラムと構成プログラムを使用して Maximo Asset Management を再インストールできます。

Maximo Asset Management の構成の削除

Maximo Asset Management をアンインストールするための最初のステップは、Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して構成値を削除することです。

このタスクについて

データベース・インスタンスを削除するオプションを選択すると、表スペース、データベース、およびデータベース・インスタンスが削除されます。構成プログラムで作成されたインスタンス・ユーザー、データベース・ユーザー、およびシステム・ユーザーも削除できます。WebSphere Application Server Network Deployment の場合、Maximo Asset Management アプリケーションをアンインストールするための WebSphere 管理ユーザーの資格情報を指定します。WebSphere 成果物を削除するオプションを選択すると、アプリケーション・サーバーおよび JMS キュー情報が削除されます。

手順

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、WebSphere Application Server Network Deployment サーバーにログオンし、Maximo Asset Management アプリケーションをすべて停止します。
2. Maximo Asset Management 構成プログラムが開いていない場合、Maximo Asset Management ランチパッドからこれを開始します。ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、Maximo Asset Management のインストールの場所を指定してから「**Tivoli の Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。

3. IBM Maximo Asset Management の構成操作ページで、「製品の構成情報を削除します」をクリックします。
4. 「製品の構成情報を削除します」パネルで、Maximo Asset Management のために以前構成したデータベースおよび WebSphere Application Server Network Deployment サーバーにアクセスするための資格情報を指定します。
5. 「終了」をクリックし、「OK」をクリックして確定します。

WebSphere Application Server Network Deployment 構成の削除

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して WebSphere Application Server Network Deployment 構成を削除すると、すべての構成データが削除されます。

手順

1. Maximo Asset Management 構成プログラムが開いていない場合、Maximo Asset Management ランチパッドからこれを開始します。ランチパッドのナビゲーション・ペインで、「製品の構成」をクリックし、Maximo Asset Management のインストールの場所を指定してから「**Tivoli の Process Automation Suite** 構成プログラムの起動」をクリックします。
2. IBM Maximo Asset Management の構成操作ページで、「**WebSphere Application Server** の構成解除 (Unconfigure WebSphere Application Server)」をクリックします。
3. 「WebSphere の構成解除 (Unconfigure WebSphere)」パネルで、WebSphere Application Server Network Deployment プロファイル情報を削除するための WebSphere 管理ユーザーの資格情報を指定し、「次へ」をクリックします。
4. 「ミドルウェアの構成解除 (Unconfigure Middleware)」パネルで、「**WebSphere Application Server Network Deployment** の構成解除 (Unconfigure WebSphere Application Server Network Deployment)」オプションを選択し、「終了」をクリックしてから確認のために「OK」をクリックします。

Maximo Asset Management およびミドルウェアのアンインストール

Installation Manager ソフトウェアを使用して、Maximo Asset Management と、Maximo Asset Management インストール・プログラムでインストールされたすべてのミドルウェアをアンインストールします。

このタスクについて

Maximo Asset Management 構成プログラムを使用して、Maximo Asset Management および関連付けられたミドルウェアを構成解除した後、Installation Manager ソフトウェアを使用して、以前インストールされたコンポーネントをアンインストールします。Installation Manager は、アンインストールするコンポーネントをホストしているシステムでローカルに実行する必要があります。

手順

1. システム上のすべての Db2 および WebSphere Application Server Network Deployment プロセスを停止します。

2. コマンド・プロンプトを開き、Installation Manager を開始します。

Windows	UNIX
C:\Program Files\IBM\Installation Manager\ eclipse\ IBMIM.exe	IBMIM.sh

3. IBM Installation Manager インターフェースから、「アンインストール」を選択します。
4. 削除するパッケージを選択して、「次へ」 をクリックします。
5. パッケージの要約情報を確認し、「アンインストール」をクリックして、選択したパッケージを削除します。

次のタスク

ログ・ファイルおよびその他の履歴データは、評価のために残されています。製品を以前と同じディレクトリーに再インストールしたい場合は、最初にディレクトリーを完全に削除してから、次のインストールを試行する必要があります。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料は、IBM から他の言語でも提供されている可能性があります。ただし、これを入力するには、本製品または当該言語版製品を所有している必要がある場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の websites サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Director of Licensing
IBM Corporation
North Castle Drive, MD-NC119
Armonk, NY 10504-1785
US

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

記載されている性能データとお客様事例は、例として示す目的でのみ提供されています。実際の結果は特定の構成や稼働条件によって異なります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名前はすべて架空のものであり、類似する個人や企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下の条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用条件

IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布（頒布、送信を含む）または表示（上映を含む）することはできません。

商業的使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、認証、シングル・サインオン構成、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様の名前、ユーザー名、パスワード、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用の詳細については、IBM プライバシー・ポリシー (<http://www.ibm.com/privacy>) および IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント (<http://www.ibm.com/privacy/details>) のセクション『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』、および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』 (<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール
製品 167
ミドルウェア 168
Maximo Asset Management 168
インストール
既存のミドルウェアを自動的に構成する 13
クラスター環境 71
サイレント 83
自動ミドルウェア構成 3
手動構成されたミドルウェアによるデプロイ 19
手動ミドルウェア構成を使用したデプロイ 21
準備 1
プログラム・ログ 97
ポストインストール・タスク 105
インストール、サイレント 86
インストール・プログラム
ログ 97
エラー・キュー 56

[カ行]

管理ワークステーション
バックアップ 165
リストア 166
継続インバウンド (CQIN) JMS キュー
作成 53
構成 105
サイレント 89
データベース・サーバー 21
構成アクション
addLanguages 133
configureProducts 134
configureProductsDBLite 136
deployConfiguration 132
deployDatabaseConfiguration 130
deployJ2eeConfiguration 131
deployMiddlewareConfiguration 134
disableAppSecurity 133
enableAppSecurity 133
enableDB2TextSearch 130

構成アクション (続き)
reapplyAppServerTuning 133
removeConfiguration 132
removeDatabaseConfiguration 130
removeJ2EEConfiguration 132
updateApplication 133
updateApplicationDBLite 136
updateDatabaseConfiguration 128
updateJ2eeConfiguration 130
upgrade75Configuration 135
validateAndUpdateDatabase
Configuration 129
validateAndUpdateJ2eeConfiguration 131
validateDatabaseConfiguration 129
validateJ2eeConfiguration 131

構成の削除

Maximo Asset Management 167
WebSphere Application Server
Network Deployment 168
コマンド・ライン構成プログラム
アクション 128
入力プロパティ・ファイル 118
パラメーター 120

[サ行]

サービス統合バス
サーバーの追加 49
サービス統合バス宛先
インバウンド・エラー・キュー
(CQINERRBD) を対象にした作成 56
継続インバウンド (CQINBD) キュー
を対象にした作成 50
順次アウトバウンド (SQOUTBD) キュー
の作成 51
順次インバウンド (SQINBD) キュー
の作成 51
サイレント応答ファイル
インストール 83
ミドルウェア構成 89
Maximo Asset Management 構成 90
サイレント・インストール 86, 91
アンインストール 87
サンプル応答ファイル 84
順次アウトバウンド (SQOUT) JMS キュー
作成 54
順次インバウンド (SQIN) JMS キュー
作成 54
製品
構成のサイレント削除 93

製品インストール・プログラム
概説 1
製品構成プログラム
概説 1
前提条件 83, 89

[タ行]

データベース・サーバー 21
データ・ソース
パーシスタンス・ストアの場合の手動
での作成 38
ディレクトリー・サーバー
手動による構成 26

[ナ行]

ノード・エージェント
Windows サービスとして作成 47

[ハ行]

パスワード
応答ファイル内の更新 85
バックアップ 165
プロパティ
Maximo Asset Management 137
プロファイル
WebSphere での作成 34
ポストインストール 99

[マ行]

ミドルウェア 83, 89
構成のサイレント削除 92
ミドルウェア構成
サイレント・サンプル応答ファイル 90
ミドルウェアのサイレント構成 91
メディア
インストール 1

[ヤ行]

ユーザー
グループ
同期 109
同期 109

[ラ行]

リストア 165

[ワ行]

ワーク・センター

手動による WAR ファイルのビルド
114

A

action addLanguages 133
action configureProducts 134
action configureProductsDBLite 136
action deployConfiguration 132
action deployDatabaseConfiguration 130
action deployJ2eeConfiguration 131
action
 deployMiddlewareConfiguration 134
action disableAppSecurity 133
action enableAppSecurity 133
action enableDB2TextSearch 130
action reapplyAppServerTuning 133
action removeConfiguration 132
action removeDatabaseConfiguration 130
action removeJ2EEConfiguration 132
action updateApplication 133
action updateApplicationDBLite 136
action updateDatabaseConfiguration 128
action updateJ2eeConfiguration 130
action upgrade75Configuration 135
action validateAndUpdateDatabase
 Configuration 129
action
 validateAndUpdateJ2eeConfiguration 131
action
 validateDatabaseConfiguration 129
action validateJ2eeConfiguration 131

C

CQINERR JMS キュー
作成 57

D

Db2
 手動構成、v11.1 21
DB2 v11.1
 インストール 5, 73

E

EAR ファイル
 管理 113
 手動によるビルド 114

H

HTTPOnly
 構成 95

I

IBM Security Directory Server
 手動による構成 27
IBM WebSphere Application Server
 Network Deployment
 HTTPOnly 95
Installation Manager
 サイレント・インストール 86

J

J2EE サーバー
 手動による構成 34
JMS アクティベーション・スベック
 インバウンド・エラー・キュー
 (CQINERR) を対象にした作成 58
 継続インバウンド・キュー (CQIN) を
 対象にした作成 55
JMS キュー
 手動による構成 48
JMS 接続ファクトリー
 作成 52

M

Maximo Asset Management 69
 アンインストール 168
 クラスター環境での構成 81
 構成の削除 167
 バージョン 7.6 のインストール 8, 15,
 64, 79
 Maximo Asset Management 構成プロ
 グラムによる構成 10, 17, 65
Maximo Asset Management の構成
 コマンド・ラインからの構成パラメー
 ターの検証 118
 コマンド・ライン構成プログラム 117
Maximo Asset Management のサイレン
 ト構成 91
Microsoft Active Directory
 構成 32
Microsoft SQL Server
 手動構成 24

N

NOTF JMS キュー
 作成 10, 17, 66
NOTFERR JMS キュー
 作成 11, 18, 67

S

SSL
 構成 5, 14, 73

U

UpdateDB Lite
 データベースの更新 69

V

VMM
 手動構成 59

W

WebSphere
 手動によるプロファイルの作成 34
WebSphere Application Server Network
 Deployment
 構成タスク 40
 構成の削除 168
 手動アンインストール 115
 手動による構成 34
 Maximo Asset Management アプリケ
 ーションをインストールします。
 115
WebSphere Application Server Network
 Deployment v9.0.0.7
 インストール 6, 75
WebSphere Application Server Network
 Deployment サーバー
 アプリケーション・サーバー・クラス
 ター・プロファイルの構成 76
 追加 WebSphere ノードでのクラス
 ター・メンバーの構成 78
Maximo Asset Management 構成のた
 めの準備 8, 14, 76, 78



Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21